
清家未森
MIMORI SEIKE
六蓮国物語
王宮の花嫁武官
角川ビーンズ文庫

六蓮国物語

王宮の花嫁武官

清家未森

BEANS BUNKO
17056
角川ビーンズ文庫

六蓮国物語

王宮の花嫁武官

清家未森

17056

角川ビーンズ文庫

六蓮国物語

王宮の花嫁武官

Contents

―目次―

序章	少女と術師	008
第一章	突然の求婚者	011
第二章	神憑きの太刀	061
第三章	鬼娘の事情	130
第四章	水と炎の交錯	194
終章	同じ空の下で	240
あとがき		255

六蓮国物語

CHARACTERS



庶民派ヒーロー!?

橘季隆【たちばなすえたか】

封陰省次官。「璉」からの留学生。
一見軽薄そうだが……？

◆所属：封陰省



クールな突っ込み役

翡翠丸【かわせみまる】

季隆の使い魔。
14、5歳くらいの少年の姿をとる。

◆所属：封陰省（？）

CHARACTERS



結蓮を愛する太子

臨琮成【りんそうせい】

煌国太子で、結蓮の幼なじみ。
悪鬼妖怪の類に狙われやすい体質。

一途で堅物な少女

豊結蓮【ほうゆいれん】

太子の命が何よりも大切な女武官。
怪力で大食らい。
大商家・豊家のお嬢様。

◆所属：柚梨軍

物語の世界観

六雄と呼ばれる六つの国があり、その一つ・煌国が舞台。
煌国の太祖は龍の血を引く碧眼の娘で、代々碧眼を
持つ者だけが玉座にのぼることが許されている。

イラスト／Izumi

本文イラスト／Ｉｚｕｍｉ

――古書に曰く。

神代の昔から伝わる天下の秘宝の一に、龍神の太刀なるものがあるという。

封印されているのは龍王か、はたまた龍族一の悪神か。

その太刀を手にした者は龍神の主となり、この世のあらゆるものを望むことができる。

天下を治める神の御位。

不老不死の身体。

世界中の財宝が集まるといわれる水晶宮の万の倉。

欲しいものをすべて手に入れ、意に添わぬものをすべて破壊し滅ぼすことも。

けれども、それを手にして神になった者のその後は、伝わっていない。

序章　少女と術師

悲鳴すら途絶えた室内に、獣の咆哮が響いていた。
赤い飛沫で染まった部屋。床に広がる血溜まり。転がった肢体。おぞましい獣の臭い――。
（……皇后さま。琮成さま。玉玲。紫蘭。琳琳――）
卓子の下にうずくまり、少女は震えながら、声にならない声で名を叫んでいた。
鋭く尖った爪に引っかかれ、胸がずきずき痛む。流れ出る血が衣を濡らしていく。
彼女を支配しているのは恐怖と、そして混乱だった。
みんな、誰も動かない。どうしたのだろう。すぐに自分も動かなくなるのだろうか。あの、黒い獣がもう一度襲ってきたら――。
（いや……怖い。だれか、助けて……！）
その時、翠色の流星が駆けぬけた。
はっとして顔をあげた少女の前に、見知らぬ背中が立ちはだかった。黒の長袍姿――後宮に

は入れないはずの男の官人のものだ。
そこからは、一体何が起こったのかよくわからない。軽く気を失っていたのかもしれない。気づけばあの獣は消えており、慌ただしく行き交う声や足音が聞こえていた。部屋を移動したのか、凄惨な光景も見当たらない。
「――お嬢ちゃん。もう大丈夫だ。顔をあげていいよ」
頭上から降ってきた声の優しさに、少女はぼんやりと彼を見上げた。
（だれ……？）
視界が茫洋としていて、顔かたちがよくわからない。どうやらかなり若い男のようだ。長持に腰掛けた少女の前に若者が膝をつく。それから彼はふと眉を寄せた。
「これ……、怪我したのか？」
彼の目が自分の胸に注がれているのを見て、少女はうなずいた。獣の爪に裂かれたはずの傷口が青く染まっている。痛みはいつのまにかなくなっていた。
「お嬢ちゃん――いいかい。このことは誰にも言ってはいけないよ。約束できるかい？」
このこと、というのがよくわからなかったが、彼のひどく深刻な様子を見て少女はこくりとまたうなずく。途端、堰を切ったようにぼろぼろと涙がこぼれた。
「……術師さまが妖怪を倒してくれたのでしょ。翠玉を使った術で……」
「翠玉……うーんと、まあ、そうかな」
頭をなでてくれる掌が優しい。いろんな感情が同時に押し寄せ、少女は泣きじゃくる。

「すごく、怖かったです……。術師さまが来てくれて、よかった……」
「うん――怖かったね。でももう大丈夫だ。さあ、涙をふいて」
少女の手をそっと取ると、若者はその手に小さな包みを握らせた。
「そんなに泣いたら、せっかくの美人がもったいないよ。飴玉でも舐めて元気をだしなさい」
彼のやわらかな声と雰囲気が、少女のこわばった心をほぐしていく。
この人が助けてくれた。この人が来てくれたから、自分は生きている。
あの怪物をやっつけてしまったなんて、きっとものすごく強い人なのだ。それだけじゃない、怖いものを見なくて済むように、別の部屋に連れてきてくれた――とても優しい人。
「それにしても、本当に大した小仙女ぶりだ。大人になったら私の嫁になるかい？　ハハハ」
冗談めかしたその笑顔に、少女ははっと息を呑む。
この人とここで会えたのは、きっと天命だ。この人について行かなければならない。
「……お嫁さまは、いやです」
え、と意外そうな声をあげた若者に、少女は懸命に訴えた。
強くなりたい。怪物が襲ってきても立ち向かえるようになりたい。――この人のように。
「お嫁さまじゃなくて……わたしを、弟子にしてください――！」

第一章　突然の求婚者

翠玉の御使い様

お元気でいらっしゃいますか。桃霞はまもなく花の盛りの季節です。
庭の桃のつぼみを眺めていると、ふとあなた様のことが思い出されます。
いつの日かご一緒にお花見に行けたらと夢見るのも、今年で何度目になるでしょう。
御使い様。あなた様は、今、どこにいらっしゃるのでしょうね。
お弟子にしてくださるというお約束を胸に、結蓮は日々、鍛錬に励んでいます。
御使い様。結蓮はもう大人になりました。
どうか、早く、早く迎えに来てくださいね。

月まで凍てつくような真冬の夜。

都のとある屋敷で、名門同士の婚礼が執り行われていた。
花婿は、家門の当主である朝廷官吏。
花嫁は、皇后の異母妹にあたる国一番の富豪の娘。
家同士で決められた結婚である。二人が顔を合わせるのは今宵が初めてのことだった。
「――なぜそんなものを持っているのだね？　物騒な」
遅れて寝室に入った花婿が、それに気づいて眉をひそめる。
赤い布と花で飾られた寝台に腰掛けた花嫁は、一振りの太刀を胸に抱いていたのだ。
房飾り付きの錦の織物を頭からかぶった彼女は、そっと身じろいで太刀を抱きしめる。
「……どうかお許しを。母の形見なのです。傍に置かせていただけませんか」
若い娘とは思えない、ひどく静かな声だった。
早くに母親を亡くした、か弱い富豪の末娘。わざわざ機嫌を損ねて権門との縁をふいにはしたくない。そんな思惑から、花婿は寛大なところを見せておくことにした。
「いいだろう。ただし、寝床の中では鞘を抜いてくれるなよ？　剣豪の貴女相手ではさすがに私も太刀打ちできぬからな」
戯れ言のように言いながら、花嫁がかぶる綾絹を剝ぎ取る。都でも評判の美女である彼女を好奇の目でのぞきこんだが――。
「……っ、これは……！」
伏せていた彼女の目がゆっくりと視線をあげた時、花婿は全身に震えが走るのを感じた。

花嫁は確かに美しかった。白絹のごとく清らかですべらかな肌も、凛とこちらを見つめる黒い瞳も、紅をさした小さな唇も、なんら申し分はない。

だがなぜだろう。賞賛すべき美貌なのに――〝恐ろしい〟と一瞬思ってしまったのは。

「いや――驚いた。なんという佳人だ。この世のものとは思えない……！」

「……」

花嫁が無言で目を伏せる。そんな褒め言葉は聞き飽きているのか、それとも恥じらっているのだろうか。そのはかなげな様子に、花婿は軽く唾を呑み、彼女の肩に手をかけた。

「では……契りの杯をかわそうか。我が妻よ――」

彼女は富豪の令嬢ながら武官として朝廷に出仕しているという変わり者だが、彼女の一族とのつながりが欲しかった花婿にとってはそれは些末なことだった。何より、これほどの稀なる美貌の妻を得ることができるのだ。多少のことには目をつぶらねば罰があたるだろう――。

と、その時。

「豊舎人に申し上げますーっ！」

突然、扉のすぐ外で誰かが叫び、花婿はぎょっとして手を止めた。

今宵は新婚初夜、誰も邪魔をしないよう言いつけているし、第一見張りの者がいたはずだ。

だが誰何するより先に、きびきびとした声はさらに続く。

「東宮春明殿にて太子殿下琮成様、怪異に遭われたとの由！　豊舎人には万難を排してのご登城をお命じです！」

その瞬間、らんっ、と花嫁の目に光が走った。
それまでろくに口もきかず借りてきた猫のように大人しかった彼女は、別人のごとき機敏な動きで立ち上がると、躊躇いもなくするりと帯を解いた。
「な――結蓮嬢!?」
仰天する花婿に構わず、彼女は豪奢な錦の花嫁衣装を脱ぎ捨てる。太刀を中帯に差し、重い簪の束を引き抜いて顔をあげた。さらりと長い黒髪が舞う。
「……太子殿下に狼藉を働くとは、なんと不届き千万な妖怪……！」
低くつぶやきながら腰の太刀に手をかける彼女は、もはやどこをどう見ても可憐な花嫁ではない。凛とした鋭い眼差しは堂々たる戦士のものだ。
「豊結蓮、ただちに登城つかまつります！　――御免！」
「ぬおっ！」
戸口へと突進した花嫁は、開けるのももどかしかったらしく派手に扉を破壊して飛び出して行く。
残されたのは木片となり果てた扉の残骸と、跳ね飛ばされて転がった哀れな花婿。
「……だ……誰か、誰かいないか！　花嫁が――」
床に打ち伏したまま、花婿はわなわなと震えながら声を限りに叫んだ。
「花嫁が、また逃げたぞ――――っ!!」

太古の昔、混沌の海に一頭の大亀がいた。それは幾億の年月を経てやがて朽ち、広大な大地となった。世界唯一の大陸、星霜大陸である。



いつからか世界は、天界、人界、冥界の三つに分かれていた。

天の玉皇、地の玉帝の双子同一神が神仙を束ね、大陸四方の海を東西南北の四海龍王が治める『天界』。死者が赴く国でありながら地上と同じ官僚政治の機構を整え、その頂点に閻王をいただく『冥界』。そして双方の狭間にある『人界』だ。三つの世界は、時折交差しながら存在している。

人界には、古代より六つの大国があった。

天帝が遣わした六人の天女に守護された国々は、朝を変えつつ脈々と現代に継がれている。天帝の象徴である蓮花になぞらえて六蓮天女と呼ばれる彼女らに守られた現在の六国は、朧、煌、汀、采、璉、垣。周辺の小国と区別して、これを六雄と呼ぶ。

六雄の一、煌は、六百年の昔、太祖が暴虐な前朝の皇帝を倒して建てた国である。言い伝え

によれば、太祖は龍の血を引く碧眼の娘で、龍神の篤い加護を得ていたという。以来、煌朝では碧眼の持ち主だけが玉座にのぼることを許された。つまりは碧眼を持つ者だけが皇太子に、そして皇帝になれるのである。

それを破る者があると、煌はたちまちに龍神の加護を失うといわれるが、定かではない。

煌国の都、桃霞。

その名のごとく、春になれば都中いたるところに植えられた桃の花が咲き乱れ、霞がかって見えるという、花を愛した初代皇帝が命名した美しい城市である。

その季節が間もなく都に訪れようとしている、あるのどかな午後。結蓮は宮城の東にある東宮府へと向かっていた。

大事に抱えた包みを見下ろし、聡明な主君を想って感服のため息をつく。

（三翠同にある菓子屋の新作って、これでよかったのかしら。市井の人々の流行までご存じだなんて、さすがは太子殿下だわ）

久々の登城理由が主君から「何某の菓子を買ってまいれ」と命令が出たためというのもまた誇らしい。

カチャ、カチャ、と歩くたびに鎧の奏でる音がする。武官姿になるのも久しぶりだ。着飾ら

されて屋敷に閉じこめられていた時とは比べものにならない身軽さで、颯爽と石畳を歩く。

朝廷の各官府は石畳の路によって繋がっており、官府ごとに見事な庭園が備わっているのが煌国皇城の特徴だ。東宮府のある内朝に入る門まで来ると、結蓮は思わず足を止めた。

そこに広がる桃花園のまだ固い蕾を見て、自然と唇がほころぶ。

（よかった……。なんとか花の季節の前に復帰できたみたい）

桃霞生まれの者にとって、この季節は特別なものだった。

花が満開になる頃、都では各地で祭りが行われる。月を友に夜の桃花を楽しむもよし、のどかな陽射しの下で大勢の酒盛りを開くもよし。過ぎゆく春を思い思いに愛でる、桃霞の人々にとっては欠かせない行事だ。登城の折、にぎやかな都がいつも以上に浮かれているように思えたのはそのせいに違いない。

（……でも今年も、屋敷の桃花を見るだけで終わってしまいそうね）

なんとなく残念な思いを抱きつつ、再び歩き出す。門をくぐればすぐそこは東宮府だ。

東宮府とはその名のごとく東宮、つまり太子のための官府である。太師、太傅、太保の東宮三師を長に置き、舎人と呼ばれる近衛や官吏、そして粒ぞろいの女官たちをそろえた、『もう一つの小さな朝廷』といってもいいかもしれない。

さらに奥の東宮御殿を目指して回廊を歩いていくと、前方から官吏の一団がやってくるのに出くわした。会議帰りの高官だと気づき、結蓮はさっと端へ寄る。

「――これはこれは、豊舎人ではないか。久しく顔を見ていなかったが」

声をかけてきたのは恰幅のいい初老の男。蔡東宮太傅だ。東宮府の最高官の一人である彼が気安く一武官と言葉をかわすのは珍しいが、その声音は友好的なものではなかった。
「はっ。しばらくお暇をいただいておりました」
「ほーぉ。そうかそうか。そのまま永遠に休んでおればよかったのにの～」
蔡太傅の笑顔は引きつっている。ぴくぴくと額の青筋が動いていたが、面を伏せている結蓮は気づかない。
「はっ。ありがたいお気遣いですが、そういうわけにはまいりません。長く休んでしまいました分も含め、今日より精一杯務めてまいる所存です」
「やらなくてよいわーっ！　そなたが働くとろくなことにならぬ！」
とうとう我慢できなくなったのか蔡太傅が癇癪を起こした。
「任務に出かけるたびに何かしら破壊しおって！　修理費がいくら溜まっているか知っておるのか!?　そなたの給金の五十年分だぞ！　しかもそのすべてが東宮府に請求されておる！　そなたは東宮府の庫を空にする願掛けでもしておるのかっ！」
「はっ！」
「はっ、ではない！　このままいけば冗談ではなく東宮府は破産なのだぞ！」
がみがみと説教を繰り出す蔡太傅を、隣にいた痩軀の官吏が「まあまあ」となだめた。
「お務め熱心でよいではありませぬか。それに豊舎人も破壊したきり素知らぬ顔をしているわけではありますまい。修繕費は豊家のほうから出ているはず。――違うかね？　豊舎人」

ちらりと視線を向けられ、結蓮は拱手して頭をさげる。
「私の個人財産から捻出しております。范東宮太保」
「そうであろうな。権門豊家にしてみれば、これしきの修繕費など雀の涙ほどでもなかろう。あと五百年分ほど暴れてみてはどうかね」
范太保が薄く笑みを浮かべる。切れ者と評判の彼も時には冗談を言うらしい。
人柄も外見も正反対のこの二人が実質的な東宮府の最高官だった。どちらも朝廷の権力者である豊家に良い印象は抱いていないようだが、太子に対する職務は忠実だ。ちなみにもう一つの席である東宮太師は現在病気療養中である。
「さっすっがっ范太保～！　豊舎人の事情までご存じとは、慧眼でございますなぁ！　しかもその冗談の面白いこと！　しびれますなぁ、まったく！」
横からわかりやすく揉み手をしながら首を突っ込んできたのは孔東宮少保だ。その名のとおり范太保の副官であり東宮府の次官でもある彼は、仕事中よりも太保にごまをすっている時のほうがいきいきしているともっぱらの評判である。あだ名はもちろん『腰巾着』だ。
「のう、皆もそう思うだろう？　その上、叱られる豊舎人を庇っておやりになるとは、范太保のお優しい人柄がにじみ出ているではないかっ」
「まったくです。そのとおりです！」
傍にいた体格のいい下官が汗を拭き拭きうなずく。他の下官たちも愛想笑いで同意しているのを見やり、蔡太傅が苦々しい顔をした。

「しかし最初に立て替えるのは東宮府なのだぞ。それが立て続けに請求された日には、わしの心の臓も止まりかけるわっ！　まったく、おとなしくあのまま嫁に行っておればよかったものを――」

「あーら、皆様。また今日も結蓮様いじめですの？」

華やかな声が割って入った。

次の瞬間、その場にいた全員が振り向いて礼をとる。

「……ご機嫌麗しゅう存じます。耀妃様、景妃様、麗妃様」

代表して口上をのべた蔡太傅に、東宮御殿のほうから出てきた女性たちが一様に微笑んだ。結い上げた見事な黒髪にはそれぞれ花を象った宝玉の簪を挿し、幾重にもなるひれをまとった姿は天女のように美しい。

「お顔をおあげくださいな。せっかくお話しするのですもの、そのほうが楽しいでしょう？」

「そうよ。特に結蓮様。お顔を拝見したいわ」

「お会いするのお久しぶりですものねえ」

勝ち気な美貌と気さくな性格を併せもつ耀妃、愛らしい顔立ちで快活な雰囲気のある景妃、ほんわかとした優しい笑みがまぶしい麗妃。目にもあざやかな衣装に身を包んだ彼女たちは、全員が太子妃である。

とはいっても、太子は彼女らと本当の夫婦にはなっていない――らしい。耀妃は学問、景妃は香道、麗妃は囲碁をそれぞれ得意としており、その実力は学者たちも舌を巻くと言われる。

息子の後宮に多彩な才能を求めた皇后が彼女たちを集めたのだが、負けず嫌いな当の太子は、妃らとの勝負に勝つまでは夫婦にはならないと言い張っていた。

若くして後宮に入った妃たちとは結蓮も長いつきあいになる。今日も彼女たちは裳裾をひるがえす勢いで群がってきた。

「ちょっと結蓮様！　三度目の縁談が破談になったと聞いたけれど、本当ですの？」

「お相手は確か、梅州候の一族の令息でしたかしら？　でもわたくしね、破談になってよかったと思っているの。だって、その相手ときたら官職にもついていないドラ息子だっていうじゃない。そんな男に結蓮様を任せられないわ」

「景妃様、それは二度目のお相手でしょう。三度目の方は兵部省のお役人です。三十も歳が離れておられる上、あちらは四度目のご結婚だとか。わたくし、正直申し上げて、結蓮様が嫁がれることに納得がいっておりませんでしたわ」

「まったくそのとおりですわね。こんなことを申し上げてはなんですけれど、結蓮様のお父君は婿選びに手を抜きすぎではございませんの？　豊家の力をもってすれば、もっとふさわしい婿がねはいくらでも見つかるでしょうに。ねえ、皆様もそう思われますでしょう？」

急に話を振られ、東宮官らはぎくりとした様子で目をそらす。彼らにしてみればなんとも答えにくい質問だから、無理もない。

「結蓮様も早く殿下の後宮にお入りなさいよ。そうすればもう手抜きな婿がねを押しつけられることもないわ。わたくしたちも楽しいし」

景妃の無邪気な提案に、東宮官らがぎょっとする。しかし他の二人の妃も同意のようだ。
「学問、香道、囲碁ときて、武の達人が妃に加われば、殿下の後宮は安泰ですわね」
「ぜひそうなさいませ。今すぐにでも！」
「いえ、私は……」
三人の美女ににじりよられ、結蓮は困った。彼女たちの会話を聞くのは楽しいが毎度最後にはこんな流れになるのだからたまらない。
「お妃様方！　そのような戯れ言、大きな声で仰いますな。豊舎人は太子殿下とは叔母と甥の関係なのですぞ。後宮になぞ入れるわけがございませぬ！」
「ええ～。別にそんなの、気にしませんわ」
「殿下がご命令なさるなら、誰も文句なんて言わないわよねえ」
蔡太傅が目をむいてたしなめたが、それがどうしたと言わんばかりに妃たちは顔を見合わせている。彼女たちにとっては後宮の仲間に幼なじみの結蓮が加わるという事実が大事らしい。
と、そこへ遠慮がちな咳払いが響いた。
彼女たちのさらに後ろからやってきたのは三十がらみの若い官吏。太子の守り役である秦東宮少傅だ。柔和な顔に苦笑を浮かべている。
「お妃様方、そのへんになさいませ。豊舎人は伺候の途中でございますよ」
「まあ、そうでしたわ。ごめんあそばせ、結蓮様」
妃たちが眉をひそめて詫びを入れるのを、結蓮はかしこまったまま受け止めた。

「皆様の過分なお心遣い、いたみいります」

一度ならず三度も結婚が破談になったのだから、若い娘にとって不幸な話題には違いない。だが彼女らに悪意がないことはわかるし、むしろ心配されているのが伝わってきて逆に申し訳ない気分になる。

ようやく騒動の輪を抜け出せた結蓮は、あらためて本来の目的地である東宮御殿へと向かうことになった。

「迎えに来てくださってありがとうございました、秦少傅。助かりました」

「いえ、実は殿下のご命令なんですよ。豊舎人の登城をお待ちかねのようで」

秦少傅が爽やかに笑う。穏やかな物腰は先ほどの官吏たちとはまるで別の人種のようだ。

「ご所望の品はこちらでよかったのでしょうか？」

「はい、ありがとうございました。使い走りのようなことをさせてしまって申し訳ありませんでしたね」

「殿下のお役に立てるのならば、どんな任務であろうと本望です」

秦少傅が、くすっと笑みをこぼす。

「あなたのその太子殿下大事のご発言、このところ聞いていなかったので懐かしいですね」

少し口調をくだけさせた彼に、結蓮もいくらか緊張を解いてうなずいた。太子が幼少の頃から仕えている彼とも、昔からの知り合いだ。

東宮府の次官である東宮少傅は、本来なら三十そこそこの若さで就けるものではない。彼の

生母がかつて皇后の養育係を務めていたという縁から任命されたのだが、当時は随分と陰で非難されたとも聞く。

だが結蓮は、彼は太子の守り役に適任だと思っていた。穏和な性格もそうだが、やはり太子の傍には素姓のはっきりした一族の者がいてくれたほうが安心できる。

「久しぶりの出仕なので、なかなか勘が戻らなくて困りました」

「大変でしたね。でもあなたには花嫁衣装より武官姿のほうがお似合いですよ。――あ、もちろん良い意味で、ですけど」

慌てたように付け加える彼に、結蓮は唇をほころばせる。

「ありがとうございます。私にとっては最高の賛辞です」

舎人の身分証である白と紅の玉牌を提示し、許可を得て門をくぐる。

水を落としてぼかしたような薄色の空は門の外と中とでは変わらないが、一歩足を踏み入れると明らかに空気が変わる。太子を守るための結界が施してあるのだ。かすかにぴりぴりと肌を刺すような緊張感が身体を包む。

桃花園の先には、あざやかな朱塗りの柱と吊り灯籠の回廊が続いている。欄間に描かれた壮麗な龍の紋様は翠と蒼。それに彩られた扁額には〈春明殿〉と力強い文字が躍っている。

「――お気を付けください。豊老公がお見えになっておいでです」

声を落として忠告してくれた秦少傅に、結蓮は一瞬間を置いてうなずいた。

太子の御在所である奥の間は、しんと清涼な香気がただよっていた。
蓮花と桃花の透かし彫りがされた玻璃の壁がめぐらされ、金の燭台には二十ばかりの受け皿に香りのする明かりが灯っている。水晶と翡翠を縫いつけた白絹と綾絹の重ね帳をくぐり、結蓮はその場に膝をついた。
「豊結蓮、ただいままかりこしましてございます。太子殿下におかれましては――」
よい、と涼やかな声が遮った。
「口上は不要だ。顔をあげて、客人に挨拶してやるがいい」
そっけない口調は以前と変わっていない。結蓮は言われるまま視線をあげた。
一段高いところにある御座。正面だけ御簾があげられたそこが太子の御ましどころだ。
煌国太子、臨琮成。大椅子の肘掛けにもたれてこちらを見ている彼の瞳は、椅子に象眼された宝玉と同じ輝き――蒼い色をしている。龍神に選ばれた証である碧眼の持ち主は、蒼い星の加護を受ける者という意味をこめて蒼星太子という号で呼ばれるのが慣例だ。
（殿下……）
年々立派になっていく主君を結蓮は内心うっとりして見つめた。華やかな美貌の皇后にはあまり似ていないが、冴え冴えとした月を思わせる端整な面立ちは彼を実際の年齢より大人びて見せている。
（よかった。お元気そう……）

彼と会うのは約一月ぶりだった。花嫁衣装をひるがえして駆けつけた、例の婚礼の夜以来だ。結局あの時の怪異騒ぎはすぐに鎮まり、連れ戻された結連は屋敷に軟禁されて今日まで出仕することができなかった。

その屋敷軟禁令を出した張本人は今、同じ部屋にいる。

右手の席に座った白髪の老人に向き直り、結連は静かに一礼した。

「お久しぶりでございます。お祖父様」

声が緊張するのを隠せない。祖父に会うのもまた、あの婚礼の夜以来だった。

煌国一といっても過言ではない大商家の当主——豊諭迅がゆっくりと目を向ける。

「……おまえには屋敷で謹慎を命じていたはずだが。ここで何をしている？」

「太子殿下のお召しにより、ご所望の品をお届けにまいりました」

冷え冷えとした声に胸を貫かれたような心地になったが、結連は姿勢を崩さず答えた。

「所望の品。わざわざおまえにか。どのようなものか興味をそそられるな」

「豊老公、とぼけるのはやめたらどうだ。結連が来ることを聞きつけてここへ来たのだろう」

琮成が眉を寄せて口をはさむ。諭迅は表情を変えずに御座へ向き直った。

「なんのことでしょうかな、殿下」

「よく言う。妃たちまで追い出しておきながら」

そういえば、と結連は思う。先ほどは随分と都合よく妃たちが登場したと思ったら、太子のもとから追い出されてきたところだったのか。



「ではお聞かせ願いましょうか。どちらの菓子屋の品をご所望であられたのか」
「そら見ろ、知っているではないか。――結蓮、品を」
結蓮は「はっ」とかしこまって膝で一歩前へ出た。しかしすぐに動きを止め、太刀に手をかける。
「殿下、おそれながら抜刀のご許可をいただきたく存じます」
早口での奏上に、琮成が眉をひそめる。だが何も聞きかえすことなく一言返した。
「許す」
瞬間、すばやく太刀を抜き、結蓮は壇上の琮成に向かって床を蹴った。
勢いよく太刀を振り下ろす。琮成の座る椅子の真後ろ、帳のかかった壁に切っ先が突き刺さった。背後で諭迅と秦少傅が息を呑む。
「――一体何事だ？」
突然の立ち回りにも表情すら変えず振り向いた琮成に、結蓮は一つ息をついて答えた。
「蠍です。仕留めましたのでご安心を」
美しい帳の布に毒々しい色の蠍が太刀で縫い止められている。かすかに動いたところを見ると直前まで生きていたのは間違いない。
「なるほど。妖術の効かない結界内にも毒虫なら入れるというわけか」
ふんと鼻を鳴らし、琮成が目線を転じる。
「私は無事だ。少傅、今日この殿舎に出入りした者と荷をすべて調べてこい」

「御意にございます」

蒼白な顔をした秦少傅が急いで部屋を出て行った。結蓮は太刀を収め、その場に膝をついて検分する。

「おそらくは西方の砂漠にいる蠍と思われます。種の中でも毒性の弱いものです」

「よく知っているな」

「殿下に何かあってからでは遅いと思い、『毒虫大全』を取り寄せて読んだことがあるのです」

「相変わらずおかしな書物ばかり読んでいるのか。――しかし、私にそんなものをけしかけて得をする者がいるとは思えないが。とすると、豊老公に対する伝言か？」

琮成がちらりと諭迅を見る。結蓮はぐっと拳を握りしめた。

太子琮成の生母、豊皇后はとある宮夫人の侍女として後宮へあがったところを皇帝に見初められ、男子を二人産んだ。そのうちの次男が碧眼の持ち主だったため彼女は皇后に立てられた。煌朝では碧眼の太子を産んだ者が皇后にのぼるのが慣例である。

国で唯一の存在を産んだ皇后の威光は尋常なものではない。実家である豊家は一族こぞって高官に取り立てられ、今も朝廷で活躍している。加えて、豊家というのはもともと国でも有数の大商家だ。富も権力も最高のものを手に入れてこの世の春を謳歌する一族は、人々の妬みをどうしても買ってしまう。それで時々、表立って反抗できない者がこうして卑怯な嫌がらせをしてくることがあった。

「なんという不届き千万な輩……！」

怒りのあまり結蓮は傍にあった何かを握りしめた。すぐにバリンと音をたてて砕け散る。
「おい……それ私の杯……」
「断じて許せぬ！」
さらに握りしめた欠片が押しつぶされ、さらさらと砂粒状になって手からこぼれていく。それでも怒りが収まらずにいる結蓮に、琮成がため息をついた。
「怪力なやつめ。それ以上暑苦しくするなら放り出すぞ」
はた、と結蓮は我に返る。太子と同じ御座の中にいると気づいて仰天して飛び退った。
「ご無礼つかまつりましたっ！」
椅子に座りなおした琮成は少し呆れているようだった。
「いいかげん、私のことになると必要以上にむきになるのはやめろ」
「申し訳ございません……。畏れ多くも殿下を敬愛したてまつりすぎていて」
「それをよせと言っている」
むすりとした顔で言いつつも、琮成はまんざらでもなさそうだ。しかし平伏した結蓮がそれを見ることはなかった。――同族の誼と幼なじみという思い出があっても、今の二人の間には主従の壁が歴然とたちはだかっている。
「春明殿の警備を厚くするよう、蔡太傅に進言いたします。太子殿下は煌国唯一の御方、害を加えようとする者がいるとは思えませぬが、このようなことが続けば示しがつきませぬ」
重々しく宣言した諭迅の顔には深い皺が刻まれている。一臣下としても豊家の当主としても

太子の祖父という立場からしても、彼が怒るのは当然のことだろう。
結蓮は同意をこめて深くうなずき、ふと思い出して琮成を見た。
「太傅といえば、こちらへ参る時に偶然お会いしました。あの時に知っていれば申し上げたのですが」
「そういえば随分来るのが遅かったな。また説教でもされていたのか。今度は何を言われた」
「任務における修繕費の件です。東宮府が破産の危機だと言われましたが、やめるわけにはまいりませんし……」
琮成の命令で結蓮が行っている任務。それは妖怪退治だった。
悪鬼妖怪が跋扈する世の中、苦しむ民からの奏上に琮成が心を痛めているのを知る結蓮は、国中に出向いては太刀一本で退治して回っていた。龍神の末裔である太子は市井の人々にとって一種の信仰の対象となっている。その信仰心を壊してはいけないという一心からだ。
しかしその任務に大反対している祖父は、いっそう厳しい顔つきになった。
「太子殿下。金輪際、結蓮に任務をお与えになりませぬよう、重ねてお願いいたしまする。この結蓮はわしが決めた相手に嫁入りすることが決まっております。任務とやらで傷がついては困るのでございます」
何か言いたげに結蓮を見ていた琮成が、じろりと諭迅に目を向ける。
「だが結蓮は嫁入りなどしたくないようだぞ。豊老公」
「だからといって、婚礼当日に宮城で騒ぎを起こされるのは感心いたしませぬな。殿下」

「……なんのことだ」

琮成が眉を寄せる。眼光が鋭くなったが、諭迅のほうもそれは同じだった。

「結蓮の婚礼の夜にかぎって、殿下は宮城で怪異に遭われておられまする。おかげで結蓮は花嫁の立場も忘れ、初夜を放棄して殿下のもとに駆けつける始末。そのようなことがこれまでに三度も起こっておるのですが……この老いぼれの思い違いでしょうかな」

「お祖父様っ、殿下に対してそのような仰りようは――」

「黙らぬか。先日の縁談が破談になった一件、よもや忘れてはおらぬだろう。またしてもわしの顔に泥を塗ってくれおって、この不孝者が。おまえには豊家の娘という自覚がないのか」

低く響く声で制され、結蓮の胸がずきりと痛んだ。思わず口をつぐんでしまう。

「太子舎人の職を辞めろとは言わぬ。ただし、わしの決めた相手と結婚するのが第一の条件だ。おまえが舎人拝命の折にもそう言ったな？」

「……はい」

「わかっているならよい。次の相手を探してきた。今日はそれを告げにきたのだ」

はっとして結蓮は顔をあげた。破談になったのはほんの一月前のことだというのに、もう次の結婚話を持ってきたなんて。

「豊老公」

「殿下。結蓮をご案じくださるのは、まことに有り難きことです。しかしこれは豊家の問題にございます。お気持ちだけちょうだいしておきますので、どうかお許しを」

鋭く口を挟んだ琮成に、慇懃に礼をして論迅が立ち上がる。わざわざこの場で四度目の縁談の話を切り出したのは琮成に対する牽制の意味もあったようだ。

通り過ぎざま、論迅は視線もくれずに続けた。

「結蓮。おまえに祖父はおらぬ。何度言えばわかるのだ」

冷ややかな声で咎められ、結蓮は自分がはしゃぎすぎたことを悟った。

権門豊氏の娘で、皇后の妹で、太子の同年の叔母。――それは表の顔だ。

本当の結蓮は、論迅の孫で、皇后の姪で、太子の従妹。そして、未婚の母を持つゆえの一族のつまはじき者――。

「申し訳ありません。……お父様」

華麗なる一族におけるほぼ唯一といっていい汚点、醜聞になりうる自身の存在を、朝廷にいる間はけして忘れてはいけないのだ。

琮成が案じるように目を向けたが、うつむいた結蓮が気づくことはなかった。

出仕復帰から一日。

「――おはようございます」

いつものように一礼して結蓮が演習場へ入ると、先に来ていた同僚の武官たちの会話が一

瞬ぴたりと止まった。

やがてさざなみのようにひそひそと会話が再開される。三度目の婚礼も破談になり久しぶりに出仕してきた女武官のことだ、山ほど噂話が飛んでいるのだろう。

「あの人も柚梨軍の武官ですか？　随分と毛色が違いますけど……」

新入りの若い武官が釘付けになっているのに気づき、先輩武官らが苦笑する。

「惚れかけてるんならやめておけよ。ああ見えて柚梨軍じゃ五本の指に入ると言われる腕前だ。おまえの手には負えないぜ」

「そうそう。禁軍五将のうち、西将軍と南将軍に立ち合いで勝ったこともあるんだぞ。生まれ育ちは深窓の令嬢だが、今じゃ姫将軍ってあだ名までついてるくらいだ」

「そんなに強いんですか。全然そうは見えませんね……」

なおも見とれている新入り武官に、先輩武官らは面白そうに顔を寄せて続ける。

「何しろ、三度も結婚が破談になってるだろ。実は男だから婿に逃げられたんじゃないかっていう噂もあるんだぜ」

「えっ!?」

「真夏でもきっちりと帷子や武具をつけて、絶対に脱ごうとしないしな。それについては、肌に呪いの経文が刻まれてるのを見られたくないからって説もある」

「他にも不気味な噂が絶えないんだ。あの美貌に魅せられて言い寄っていた者たちは、豊家の屋敷に入ったまま一人も帰ってこなかったとか。夜な夜な鬼火に囲まれて奇妙な宴を開いてい

るらしいとか……」

「厳しく当たったり嫌がらせをしたりすると必ず不幸が降りかかるらしいぞ。これは噂じゃなく事実だ。現についこの前も、打ち負かそうと闇討ちしたやつらが後で河に浮かんでたらしい。あの娘は祟るんだ。かかわらないほうが賢明だぜ」

「わ……わかりました。自分、豊舎人には絶対に近づきません！」

口々に噂を吹き込まれ、新入り武官はみるみる青ざめた。

一方、そんな不名誉な噂話を囁かれているのも構わず、結蓮は演習場の隅へ行くと武器の確認に取りかかった。遠巻きにされるのは以前からのことだから別に気にならない。

（出仕するのは一月ぶりくらいだけど、やっぱり変わらないのね）

自分がどんなふうに噂されているのかは知っている。これが太子に関わることならば黙ってはいないが、自分のことならどうでもいいというのが正直なところだった。

禁軍の一、太子近衛である柚梨軍。十四歳で武官登用試験に合格して以降、ここが結蓮の所属先だ。

煌の軍には女性も登用されている。建国の逸話にある、太祖を助けてよく仕えたという強弓使いの女将軍の故事によるものだ。しかし名門の姫が武官になるという例はなかなか珍しいため、結蓮は常に噂話の的だった。おかげでそれを聞き流す技も年々磨きがかかっている。

だから今日も、初めのうちは飛び交う会話も耳に入ってこなかったのだが――。

「そういえば、聞いたか？　皇后様の快癒祈願が近いらしいな」

「ああ、それで。僧侶があんなに集められてるのか」
「それだけじゃない。在野の呪禁師にも募集があったそうだぞ」
近くにいた一団の会話を聞きつけ、結蓮は思わず手を止めた。
（快癒祈願……？）
皇后は今、ある場所で療養している。不慮の事件で傷を負い、長らく生死の境をさまよっていたのだ。結蓮も琮成も口にこそ出さなかったが、回復はいつになるのかとずっと気にかけていた。婚礼のため出仕を控えていたここしばらくの間にそんな話があったとは。
（……でも、そうか。もう五年も経つのね）
そんなに長い月日が過ぎたのが信じられない。後宮に招かれ、綺麗な襦裙を着せられて、珍しい菓子を食べながら母の思い出話を聞いた楽しい日々。つい昨日のことのように思い出せる。
『本当に、美しい娘だったのよ――』
母のことを語るとき、皇后はいつも愛しげな、どこか憧れるような眼差しをしていた。
『我ながら、本当にあたくしと血のつながった妹なのかしらと何度思ったかわからないわ。ひょっとしたら人の世に迷い込んだ仙女様なのかもしれないと、真剣に考えたものですよ……』
つやを含み、水滴をはじくほどにみずみずしく、肩に背中に流れる黒髪。
目を伏せれば、長く豊かな睫毛の影が、えもいわれぬ憂愁の色を頬に落とす。
目をあげれば、まるで女神が藤の花波をかきわけて現れたかのように艶麗であった。
凛としていながら笑みをもたたえているかのような瞳は、光によって色味が変わって見え、

その不可思議な魅力にとりつかれる者は後を絶たなかったという。
触れればとけてしまいそうだと錯覚を覚えるほどに、はかない白雪のような頬。
おかしがたい完璧さで、冷たく拒絶するかのような鼻梁の線。
うるわしい果実のごとき、甘美な色と微笑を乗せた唇――。
『そうしていくら言葉を尽くして褒め称えても、その賛辞の一つ一つが、あの子の美しさの前では色褪せてしまったの』
絶世の佳人などという表現では生やさしい。人とは思えぬ、凄絶ともいえる美貌の持ち主。
それが結蓮の母という人だったらしい。だが結蓮には母の記憶があまり残っていなかった。
『まさかあんなに早くにいなくなってしまうなんて。父上もとてもお悲しみだったわ――』
祖父には三人の夫人がいた。同時にいたわけではなく、妻が早世したために一人ずつ娶ったそうで、現夫人は三人目だ。皇后は一人目の妻の子、結蓮の母は二人目の妻の子だった。
男の兄弟が多い中で二人はたいそう仲がよかったらしい。母に群がる求婚者らを片っ端から撃退してやったものだと、伯母はいつも誇らしげに語っていた。
けれどもそれも伯母が後宮にあがるまでのこと。その後、未婚のまま結蓮を産んだ母は数年もたたないうちに姿を消した。伯母は一人残された結蓮を後宮にたびたび呼んでは母の代わりに慈しんでくれた。
『そなたはあの子に生き写しですよ。そのうちに鬱陶しい求婚者が山のようにやってくることでしょう。ああ、いまいまし。あたくしの権力で蹴散らす準備をしておかなければ！』

まだ小さかった結蓮は、本気の目をして息巻く伯母の様子からしてそれが大変なことなのだと思いいたり、一度訊いてみたことがある。

『求婚者をお断りする方法は、ないのですか？　難しいのですか？』

『いいえ、簡単ですよ。相手が用意できないほどの高価な物品や支度金を要求してやればよいのです』

伯母は晴れやかな顔でそう言った。

『でも、皇后さま。それだと、相手の方がかわいそうです』

『あらあら、可愛い子。可哀相も何も、そなたの母上が考案して行使しまくった手ですよ？〝わたくしと結婚したければ何某のお宝を持ってきなさい〟、とね。たいていの男はそこで諦めるかボロを出します。そなたも面倒な男に言い寄られたら遠慮なくそうやって撃退なさい』

『けれど、相手の方がほんとうにそのお宝をもっていらしたら……？』

『案ずることはありませんよ、結蓮。そんなことはありえません。我が豊家よりも財のある氏族など、大煌広しといえど存在していないのですもの。おーほほほほ……』

華麗な高笑いが脳裏によみがえり、結蓮は思わずくすりと笑う。

美貌と才気を兼ね備え、国母である誇りと自信に満ちていつも堂々としていた伯母。結蓮に女人としての生き方を教えてくれて、一族の誹謗から守ってくれた。大好きだったのに、今もまだ目覚めない――。

「――豊結蓮はいるか！」

突如名を呼ばれ、物思いに沈んでいた結蓮ははっとして顔をあげた。
見れば、演習場に入ってきたのは柚梨軍の副将軍だ。傍には孔東宮少保もいる。
「はっ！　豊結蓮、ここにおります！」
きびきびと駆け寄った結蓮に、副将軍がいかめしい顔つきで言い放った。
「大将軍閣下からの命令を伝える。――貴様は今日から封陰省に出向だ」
「……出向!?」
繰り返すなり結蓮は絶句した。予想外にもほどがある言葉だったのだ。
周りにいた同僚たちも驚いた様子で、「何かへまでもやらかしたのか」と囁きあっている。武試に合格し皇帝臨御の選抜を経て柚梨軍に入った武官に、出向命令が出るなど例のないことだ。それが豊家の者であればなおさらだろう。
（しかも、封陰省ですって……!?）
龍神の末裔である皇帝を守護するため設立された官府であり、所属するのは呪禁師と呼ばれる術師ばかりである。およそ武官の結蓮が務められるような場所ではないはずだ。
「お言葉ですが。封陰省に出向いて、小官は何をすればよいのでしょうか。門番や警備くらいしかお役にたてそうにありませんが」
丁寧な態度はくずさず、けれども腹立ちを抑えきれずに結蓮は力強く副将軍を見据えた。普段はこんなふうに食ってかかることはしないが、さすがにこれは我慢ならなかった。
「それは向こうで聞くことだ。私は聞いていない」

「これは左遷でしょうか。小官に落ち度があれば、まずそれをお聞かせいただきたく存じます。でなければ殿下のお傍を離れることに納得がいきません！」

「口を慎みなさい、豊舎人。これは上意でございますぞ～」

ねばつくような言い回しで孔少保が咎めた。彼が広げて見せた命令書の印に気づき、結運は驚いて口をつぐむ。

上官である柚梨軍長官に命令をくだせるのはただ一人。禁軍を統括する者、つまり皇帝――。

（陛下のご命令……!?　でも、何か不興を買うようなことをした覚えは……）

そもそも、皇后の姪とはいっても皇帝とは接点がない。尊顔を拝したこともほんの数度だけだというのに。

「わかったのなら今すぐに向かえ。あちらも待ちかねているだろう」

副将軍の命令に、それ以上異議を唱えるわけにはいかなかった。

翠の甍が波のようにうねり連なった皇城の東に、封陰省はあった。

離れにある書庫が新しい配属先だと聞き、教えられたように結運は奥のほうへと向かう。

近づくにつれてその古びた建物が目に入り、どんよりとした気分になった。

これも朝廷の官吏として立派な職務なのだから精一杯務めよう。ここへ来るまでの道すがら

そうやって自身に言い聞かせてきたが、やはり気は進まない。

（殿下にもし万一のことがあったら、駆けつけるにも時間がかかってしまうかもしれない。そこは上官どのにご相談して、舎人の職務を優先させていただかなくては）

なんとか自分に折り合いをつけ、気を取り直して扉を開ける。

書庫とはいっても一つの部署であるので、書架が詰まっているだけの部屋というわけではない。手前には広く空間があり、冊子や書類が積み上げられた大きな卓子が置かれていた。

「御免！　柚梨軍から出向でまいりました。どなたかいらっしゃいませんか」

人の姿がなかったため、大声で呼びかける。しかしどこからも応答はない。

もう一度声を張り上げようとして、大卓に紙切れが置かれていることに気付いた。

達筆な字で【御用の方は隣の部屋へどうぞ】と書かれている。

指示通り扉を開けてみると、そこは小さな部屋だった。燭台はすべて明かりが落ちており薄暗い。

見れば、こちらの卓子にも紙切れが置いてあり、今度は【御用の方は起こしてください】と書かれている。

そこで初めて結蓮は、奥に寝台のようなものがあることに気付いた。紗幕の向こうに人が寝ているらしいことにも。

（ひょっとして、ここは封陰官の休憩所？）

皇帝を守る封陰省は朝も夜もなく任務についているはずだから、仮眠をとるような場所があ

るのも不自然ではない。

紗幕をあげて見てみると、寝ているのは若い男だった。着崩れてはいるが封陰官の官服を身につけている。

「もし、すみません。起きていただけますか」

男はすやすやと寝息をたてて眠っている。結蓮はしばし待ってみたが、彼が一向に起きる気配がないため、今度は肩をつかんで強くゆさぶった。うーん、とうなるような声があがる。

「……誰？」

がくがくと首が揺れるほどの勢いにさすがに目が覚めたらしい。瞼をあげた彼はぼんやりした眼差しで結蓮を見た。

「はっ。申し遅れました。私は――」

「六蓮天女？」

寝ぼけたような声で彼はつぶやく。大陸の守護を司る天女の夢を見ていたとは、なんとも縁起の良いことだ。

「いえ、違います。六蓮天女ではありません」

生真面目に訂正する結蓮を、彼は凝視していたが、突然がばっと飛び起きた。

驚く結蓮の手をつかみ、胸に抱え込むようにしながら感動したように一言。

「美人だ……」

「――は？」

「その黒紫水晶みたいな瞳……。綺麗だ……」
ぐいと顔を近づけてきた彼は、ひたすら感心したように結蓮を見つめている。
寝ぼけているのかと面食らいながらも、結蓮はきりっと表情を引き締めて本題に入った。
「お休みのところ失礼します。出向でまいりました、柚梨軍北軍所属、豊結蓮と申します」
はっ、と男が息を呑んだ。
先ほどまでとは違った眼差しで結蓮を凝視すると――次の瞬間、なんといきなり抱きついてきた。
「!?」
「会いたかったよ！　久しぶ――」
「狼藉者ッ!!」
瞬時に体勢を立て直し、結蓮は男を投げ飛ばす。
ぎゃっと悲鳴をあげて床に転がった彼を冷ややかに見下ろした。
「神聖な朝廷内で婦女子に乱暴を働こうとは……！」
「へっ。ち、ちが……ていうか乱暴してんのそっちじゃ」
「朝官ともあろう者が、恥を知るがいい！」
「だから、ちが……ぎゃあああ」
関節技を決められた男の断末魔のごとき絶叫が響き渡る。やがて、がくり、と彼は頭を落とした。

思いがけず不埒者を成敗することになり、結蓮はふうと息をついて縄を取り出したが――。

「――きゃーっっ！　ちょっと、何事なのーっ」

野太い悲鳴が聞こえ、そちらを見れば、小部屋の戸口に三十がらみの男が立ちすくんでいた。官服からして封陰官らしい。結蓮は急いで立ち上がった。

「出向でまいりました、豊結蓮と申します。偶然にも狼藉者と出会いましたのでこれから捕縛するところです。失礼ですが、次官どのでいらっしゃいますか？」

筋肉質のその封陰官は、やたら可愛らしい仕草で両頬に手を当てている。

「ああ豊舎人ね、話は聞いてるわ。……あの、言いにくいんだけど……」

「はい？」

「……あなたの足下で伸びてる狼藉者が、うちの次官なの……」

結蓮は目を瞠って男を見下ろした。

「申し訳ありません!!」

上官とのあらためての顔合わせ。結蓮は床に跪いて第一声を繰り出した。

誤解したとはいえ上官を投げ飛ばして失神させたなんて免職ものだ。多少のことは恐れない結蓮もさすがに冷や汗をかいていた。

「いいのよぉ。どうせ季ちゃんが変なことしようとしたんでしょー？　いきなり押し倒したり



とか唇を奪ったりとか。困った人よねえ」

「おいおい。俺の印象がさらに落ちるような嘘をつくんじゃねーよ」

上座にある寝椅子に陣取った次官どのが扇子であおぎながら眉をひそめる。格闘した時の名残かそれとも寝癖なのか髪の毛がはねまくっている彼を、結蓮はそっと見つめた。

少しつり目がちで冷たそうに見えるが、端整な面立ちの美丈夫といっていいだろう。半端な長さの髪は結わずにそのまま遊ばせているし、だらしなく着崩した袍がやけにさまになっているあたりも、朝廷の官吏というよりはどこぞの遊び人の公子という感じだ。

（随分お若く見えるけれど……。本当にこの人が次官どのなのかしら）

封陰省次官といえばまぎれもない朝廷の高官の一人なのだが、目の前にいる彼からはとてもそんな威厳は感じられない。見た目も、態度も、口調もだ。

「豊舎人、ほんとに気にしなくていいのよ？　あれくらいでぶち切れるような心の狭い男じゃないから。ね、季ちゃん？」

見た目に合わぬ女性じみた言葉遣いでとりなす彼に、湯呑みを傾けていた次官どのがこちらを見る。いやに真剣な顔つきだ。

「当たり前だろ。女の子に足蹴にされるのは俺の趣味だ。もっとやってほしかったのに、博士が邪魔するから」

「いやーん。相変わらず変態ねー」

「……」

なんだかおかしなところに迷い込んでしまった気がする。
やはり左遷かと思い悩む結蓮をよそに、次官どのは一転して愛想良く笑みを向けてきた。
「ま、そういうことだから、ほんとに気にしないでいいから。お役目熱心な子が来てくれて俺は嬉しいよ、うん！」
上機嫌でうなずくと、それじゃあらためて、と彼は軽く会釈する。
「封陰省次官、橘季隆です。――ははは、まあそんなキッネに騙されたみたいな顔しないで。一月前に任命されたばっかりだけど一応本物だよ。ほら、身分証」
彼の示した玉牌はまさしくそのとおりの位階を表している。結蓮はなおも半信半疑ながら急いで礼をとった。
「――失礼ですが、次官どのは璉国のご出身ですか」
名前の読みが煌と違うことに気付いて訊ねると、彼は少し目を細めて微笑んだ。
「そうだよ。俺だけじゃなくこの書庫づきの封陰官はみんな留学生だ。今は俺たち二人しかいないけどね。で、こちらがその貴重な一人、劉博士。文献の研究や薬品の管理を担当してる」
「よろしくねー」
劉博士が小首をかしげて手を振る。その仕草は本当に可愛らしいのだが、見た目はやはり堂々たる男性だ。
「あー大丈夫、この人ちょっと中身が乙女なだけだから。こんなんだけど可愛い嫁さん持ちだからね。――で、これは俺の従者の翡翠丸」

湯呑みを盆に載せて運んできた少年が、ぺこりと頭をさげる。十四、五歳ほどだろうか、綺麗な顔立ちだがいやに無表情だ。

「以上がこれから君の同僚になる面々だ。って言っても翡翠丸は書庫から出ないし、劉博士は後方支援担当、つまり事務方だから、実質ここで今動けるのは俺だけなんだ。それでなくても封陰省は人手不足で助っ人を呼べない。そこで君に来てもらったってわけなんだよ」

真面目な顔で話を進めつつも、季隆の手は団子を取り分けるのに忙しい。

「あ、この前の任務先でお礼にってもらってさ。君も食べる？」

「……いえ、結構です」

「そう？　甘ったるくて最高に美味いんだけどね～」

「……あの、話を進めてもよろしいでしょうか」

どうにもこののんびりとした雰囲気に慣れず、結蓮は当惑しながら申し出た。軍規でがちがちに縛られていた柚梨軍とは天と地ほども差がある。

「助っ人……と仰いましたが、封陰省とは無縁の柚梨軍から私が選ばれたのはなぜなのでしょう？　それに、封陰省は大きな官府のはずです。人手不足といっても一人も余裕がないものですか？　一体、私がここへ呼ばれたのはどういう理由があるのです？」

回りくどいことは言ってほしくなかった。左遷なら左遷で理由が知りたいし、そうだとしたらそれなりに心を決めて務めを果たさなければならない。失礼ながらこの部署は、表の官界からすべり落ちた人の落ち着き先のような――そんなうらぶれた印象があるのだ。

ふふっ、と季隆が笑みをこぼす。少しつり目がちなせいか、本人にその気はないのだろうがちょっと意地悪な笑顔に見えた。

「不満そうだね」

結蓮は軽く拳を握る。彼自身には不満も恨みもないが、不本意なのは事実だった。

「……私の職務は太子殿下の近衛です。それを離れることについてはまったく納得していませんから」

「ふーん。真面目なんだな。――おっと、そんな怖い顔しないで。褒め言葉だ」

軽く手をあげて制すと、季隆は竹串を皿に置いた。

「質問に答えるよ。まず一つ目。君は太子殿下のご命令で妖怪退治に出てるだろ？　それも一定の成果をあげてる。ま、借金もすごいみたいだけど――その豪腕を見込んでってとこだね」

言いながら彼は劉博士に手で合図を出す。彼がすばやく巻物を広げた。

「二つ目。封陰省は確かに大きな官府だし、所属の術師も大勢いる。ただし、今はほぼ全員がとある任務についていて出払ってるんだ」

「そんなに大規模な任務が？」

「うん。実は――」

季隆は深刻な顔で言いかけ、ふいにがくっとうなだれた。

「ちょ……劉博士、代わりに説明してやって。久々に真面目なことしゃべったら疲れたわ」

「もう、どんだけひ弱なのよっ」

寝椅子にだらりともたれこむ季隆を見て結蓮は目を見開いたが、劉博士は慣れているのか「しょうがないわねえ」と言って後を継いだ。

「任務っていうのは、皇后陛下の快癒祈願のことなの」

はっと結蓮は息を呑む。その話は先ほど演習場で耳にしたばかりだ。

「実はね、これはただの快癒祈願じゃないの。皇后陛下の結界を解く術式なのよ。封陰省が施した結界の中で傷を癒しておられたんだけど、その結界を解く期日が迫ってきてね」

それは公式に発表されているものとはまったく異なる告白だった。皇后は五年前から療養中ということに表向きはなっている。

「驚かないのね。知ってたの？」

意外そうな顔で訊かれ、結蓮は首を振る。

「いえ……でもそういうことではないかと想像していました。あのお怪我は療養したくらいで癒せるものではありませんから。特殊な術でもかけなければ……」

――一度は冥府へ下りかけた人の魂を、この世に留めることはできなかっただろう。

「……そうか。君も五年前の現場にいたんだもんな」

黙っていた季隆がふいにつぶやいた。ちらりと彼を見た劉博士が、気を取り直したように続ける。

「じゃあ話は早いわね。皇后陛下の結界を解く術式は大がかりな上に難しいものなの。長官をはじめ封陰省の術師が大勢駆り出されてるのよ。そのうえ、所属術師の二割を占めてる留学生

が次々に故国へ帰ってしまったの」
「何かあったのですか？」
「国に変事ありって報せが来たんだけど、詳細はわからないわ。で、残ったのはわたしたちだけってわけ。なのに大変なことがわかってねえ、困ってたのよ」
「つまり……、皇后さまの快癒祈願で手薄になる封陰省において、別の任務をお手伝いするわけですね。どういった任務でしょうか」
妖怪退治の実績を見込まれてということは、そういう類の任務だろうか。
広げた巻物を劉博士の指がトントンと叩く。
「つい最近だけど、禁軍の武器庫で盗難騒ぎがあったの。盗まれたのは四本の太刀、名だたる宝刀名刀よ。犯人はまだ捕まってないわ。ところが」
自分が三度目の婚礼で休暇を取っている間にそんなことがあったのかと驚く結蓮に、彼は表情を変えずに続けた。
「――現場から業焔の残滓が発見されたのよ」
ぎくり、と胸が大きく鳴った気がした。
「業焔……。それは、あの業焔ですか」
「そう。五年前、後宮を襲撃したあの業焔よ」
結蓮は愕然とした。思わず膝で拳を握る。そうしなければ震えてしまいそうだった。
それは、あってはならない大事件だった。

本来宮城には悪鬼妖怪の侵入を防ぐため強力な結界が張られている。だが、それは突如として現れた。

居合わせた女官らの命を奪い、皇后と太子に重傷を負わせたのは、業焔と呼ばれる妖怪だった。身丈は大柄な成人男性ほど。虎に似た頭部と毛並みの長い猿のような体軀を持ち、人のように知略を用い、炎を操るといわれている。

封陰省の者は誰一人として襲撃を察知することができず、そればかりか現場に駆けつけてもこなかった。最初に助けに現れたのは、当時他部署の官吏をしていた現・封陰省長官の相京。彼の働きで業焔は退散し、皇后と太子は一命を取り留めたと言われている。

ただ、それが事実と少し違うことを結蓮は知っている。その時現場にいたからだ。

真っ先に駆けつけ、妖怪と対峙して戦ったのは別の人だった。術によって業焔の片腕を焼き切り、それがきっかけで、かの妖怪は退散したのだ。

だが命の恩人であるその人が一体何者なのかは結蓮にもわからない。なにぶん当時は混乱の極致にあったし、後で自分なりに調べてみたが結局行方はつかめなかった。

気づけば一緒にいた人たちは皆、血溜まりの中に伏しており、結蓮だけが大した怪我もなく無事だった。一族の人々はそんな娘を気味悪がり、祖父は外に出してくれなくなったのだが、それはまた別の話だ。

「……それは、確かなのですか」

震えそうになるのを堪えて声を押し出す。この五年の間、もっとも恐れ、もっとも再会を焦

がれた相手と言ってもいいかもしれない――憎い仇が現れた。
「業焔が残していった片腕と武器庫に残っていた痕跡の気配が一致したし、間違いないわ」
「では、皇城にいるのですか？　業焔が、本当に」
「たぶん片腕を取り戻しにきたんでしょう。なくした身体の一部を奪い返そうとするのは妖怪の本能だからね。おそらくこれまでは結界のせいで侵入できなかったんでしょうけど、今は入り込めているということは、隠形してるんでしょうね」
「隠形……」
「人の皮をかぶるか、もしくは人に乗り移ってるってこと」
結蓮は息を呑んだ。朝廷には何千何万という人がいる。その中にまぎれ込まれたら捜し出すのは不可能に近い。
「ですが、なぜ今になって？　この五年、業焔はまるで気配を見せなかったはずです」
「皇后陛下の快癒祈願に乗じてってところでしょうね。業焔の片腕も結界に封じられているから。痕跡は他の場所でも見つかってるし、あちこち捜しまわってるようね」
眉をひそめた劉博士の言葉に、さぁっと血の気が引いていく。
彼は明言しなかったが、業焔の目的は腕だけではあるまい。五年前と同じように太子の命を狙っているはずだ。龍神の末裔である琮成は、妖怪にとってもっとも甘美な獲物でもあるのだから。――それが皇城を自由に動き回っていたなんて。
（業焔がいる。この皇城に……！）

知っていれば、指名されなくとも名乗りをあげたことだろう。大好きな皇后と太子を傷つけ、仲良しだった女官たちの命を奪った妖怪を、今度こそこの手で屠ってみせる。

「わかりました。微力ながらお手伝いさせていただきます」

自分が選ばれた理由がようやくわかって胸が熱くざわめいていた。

出向の理由は妖怪退治。——望むところだ。

思い詰めた顔で宣言した結蓮を、寝椅子でごろごろしていた季隆が何か言いたそうにじっと見つめる。が、結蓮が気付く前に彼は笑顔になって身体を起こした。

「助かるよ。これからは俺たち二人で動くことになるから。よろしくね、お嬢ちゃん」

(……お嬢ちゃん?)

結蓮は訝しげに彼を見た。先ほど名乗ったのに、彼は聞いていなかったのだろうか。

「あの、橘次官。私の名は豊結蓮と——」

「あ、そうそう、外回りの時は橘次官って呼ぶの禁止ね。いろいろやりづらいから」

「……承知しました。ではなんとお呼びすればよろしいですか?」

「好きに呼んでいいよ。季隆でも季さまでも季ちゃんでも」

「……」

上官相手にそんな軽い呼び方をしてもいいものだろうか。柚梨軍なら即除籍なのだが……と悩んでいると、劉博士が苦笑しながら割って入ってきた。

「やりづらいでしょーこの人。つい最近まで山に籠もって修行してたから浮世離れしてんのよ

ねー。おかげで煌ことばにも慣れてなくて、たまにちんぴらみたいなしゃべり方するけど、気にしないでやってね」

「修行……そうなのですか」

「こら、誰がちんぴらだ」

不満げに突っ込む季隆を結蓮は感心して見た。そういえば次官に任命されたのも一月前だと言っていた。

「それに、璉国ではごく親しい者同士しか名を呼ばないっていう習慣があるそうなの。家族や恋人や友人とか……。まだその癖が抜けないみたいなのよ」

「なるほど……」

結蓮は今日会ったばかりだ。最初から劉博士たちと同じ扱いをされるはずがない。

「煌と真逆ですね。煌では自分が認めた相手なら誰であろうと名を呼びますし」

「ええ。国が違えば文化も違うというわけねー。あっ、安心して。ごらんの通りのお調子者だけど腕は確かだから。これでも故国に帰れば呪禁の大家の御曹司なの」

「御曹司？　どういう意味ですか？」

煌では聞かない表現に結蓮が首をかしげると、劉博士も同じようにして思案する。

「そうねえ……若様とか、お坊ちゃまとか、そういう感じかしら」

「やめてくれ。いい歳してそんな呼ばれ方されたら恥ずかしくて街を歩けねーよ」

くずした煌ことばでぼやくように言った季隆は、片手には扇子、片手には棒状の菓子をつま

んでいる。そんな行儀の悪いことをしながらも彼の所作は不思議と優雅だった。生まれながらにしみついたものらしい。なるほど、若様と呼ばれるにふさわしい人のようだ。

「では私は、御曹司どのとお呼びします」

かしこまって申し出ると、その場が静まりかえった。

最初に噴き出したのは劉博士だった。翡翠丸も無表情のまま口を押さえている。季隆はといえば微妙な笑顔だ。

「……えーと。皮肉、じゃないよな？　真面目すぎて天然なの？　それともやっぱり上官いじめ？」

「は？」

怪訝な顔の結蓮と見比べてくすくす笑いながら、劉博士が季隆を肘でつつく。

「ちょうどいいじゃない。『お嬢ちゃん』に『お坊ちゃま』で」

「……俺はそういう意味で言ってるんじゃないんだけどな……」

髪をかきあげつつ季隆がぼやく。なんだか少しがっかりしたような、複雑そうな顔だ。

結蓮は不思議に思ったが、何気なく話を続けた。

「留学生組は、この書庫付きの方で全員ですか？」

一瞬、奇妙な間が流れた。

劉博士が気まずげな顔をしたのに気づき、結蓮は首をかしげる。

「あの……？」

「お嬢ちゃん」
突然、季隆が立ち上がった。そのまま長袍の裾をひるがえして足早に書庫を出ていく。
「大変なこと思い出した。今すぐつきあってくれ」
「……！　はっ！」
この緊迫感はただごとではない。さっそく捜査かと、結蓮は気を引き締めて彼を追った。

国都桃霞は、皇宮から都の大門までを貫く玉天大街と呼ばれる大通りを軸にして、碁盤の目のように大路小路が走っている。小路で区切られた居住区を〝同〟といい、同職種の店が固まって街ができていた。それとは別に、月に二度の市が開かれ、城外からも人が集まり賑わいを見せる。
――封陰省を出てから一鐘後。
東市の真ん中で、結蓮は両手に大根と蕪が山盛り入った籠を抱えて呆然としていた。
あたりではあちらこちらで壮絶なる戦いが繰り広げられている。
「あっ、ちょっ、その葱は俺が先に目をつけてたんだけど！」
「フハハハ！　甘いね、若いの！　ここは弱肉強食の世界！　でかい獲物が欲しけりゃ早いもの勝ちなのさ！」

「くそっ……！　強すぎる……やっぱりおばちゃんには勝てない！」

戦いに敗れた季隆が悔しげに葱の束を籠に入れる。彼の持つ籠ももう満杯だ。しかし戦意を喪失したわけではないらしく、きりっと次の目的地に目を向ける。

「よし、んじゃ次は芋だ。量り売りなんだけど一人当たりの数量が決まってるんだ。君も加勢してくれ」

「……あの、御曹司どの」

「やばい、もう始まる！　急げ、お嬢ちゃん！」

「あの、すみません！　お訊ねしたいことがあるのですが」

駆け出そうとした季隆を結蓮は無理やり引き留めた。この状況が一体なんなのか、いまだに理解できていないのだ。

「大変なことって……、まさかこの市のことなのですか？」

やけに深刻な様子で駆けつけたかと思えば、そこに広がっていたのは見渡す限りの菜っ葉や根菜の山々。そして殺気だった目をした城下の主婦の集団だった。季隆が慣れた様子でそこに参戦してしまったため、結蓮は荷物持ちとして問答無用で連れ回されてしまったのである。

何を今さら、という顔つきで彼は振り返った。

「そうだけど、それがどうかした？」

「業焔捜しの任務ではないのですか？」

「それはそれ、これはこれだ。月に二回の大安売りなんだよ。これを見逃すなんて人生損して

る。この催しがどれだけ俺の生活を支えてるのか君にわかるか？」
　そんなに切々と訴えられても困ってしまう。
「大家の若様なのでしょう？　どうして大安売りに繰り出す必要が」
「生まれは大家でも、今は独立してるからね。日々の食い扶持は自分で稼がなきゃ……って、うわ、始まった！　行くぞお嬢ちゃん！」
　話の途中にもかかわらず季隆は芋争奪戦に飛び込んでいってしまった。
　仕方なく自分もそちらに向かいながら、結蓮は失望のようなものを感じて唇をかむ。
（やっぱり、この人も封陰省の人だったということなのかしら……）
　少なくともこれまでは、若くして次官にまでのぼっている彼のことを敬う気持ちがあった。だが朝廷を揺るがした大妖怪が再び現れたというこの非常時に、自分の食べ物優先なのかと思うと腹だたしくなってくる。
（浮世離れしていると劉博士どのは仰っていたけれど、そういう問題じゃないわ。……これだから嫌いなのよ。封陰省というのは――）
　苦い過去を思い出し悔しさをかみしめながらも、結蓮は芋争奪戦に勝利して籠に詰め込んだ。
「いやー、危なかった。なんとか品切れ前に間に合ったよ。協力してくれてありがとね、お嬢ちゃん」
　季隆もほくほくした様子で籠に盛った芋を持ち帰ってきた。木陰で待っていた結蓮は一つため息をつくと、まっすぐ彼を見据えた。

「まさか、本当にこれだけのために私を連れ出したのですか？」
上官がこんな調子なら、せめて自分がしっかり動かなければ。もう遠慮してはいられない。
冷たさを帯びた声と視線に気づいたのか、季隆が軽く目を細めてこちらを見る。
「これも大事な仕事なんだけどな。――でもま、実を言うと、みんなの前じゃできない話をしたかったんだ」
「何か個人的なお話ですか？」
「うん。すごく個人的」
「……？　なんなのです？」
眉をひそめる結蓮に、季隆はにっこり笑って告げた。
「俺と結婚してください」
――どさっ、と結蓮の手から籠が落ちた。

第二章　神憑きの太刀

おそらく、しばし時が止まったと思われる。
市の喧噪が徐々に耳に戻ってきて――。
予想外の発言に目を瞠って彼を見返していた結蓮は、やがて冷ややかな半眼になった。
「……なんなのですか、あなた。豊家の財産目当てですか？」
「失敬だなぁ。家族を養うくらいの甲斐性はあるよ」
ついさっきまで大安売りに命をかけていた男が何を言うか。ますます信用ならないと結蓮は身構えたが、季隆は堂々とした様子だ。
「あれ、本人には話が行ってないのかな。ぜひとも我が孫娘を嫁にもらってくだされって、君のお祖父様に土下座する勢いで懇願されたんだけど」
「お祖父様……って」
朝廷では〝父〟で通っている祖父が事実を明かしたとなると、これは冗談ではありえない。
結蓮が論迅の娘ではなく孫だというのは絶対の秘密なのだから。
「では、あなたが四人目の!?」

「正解」
ひらひら扇子であおぎながら季隆が微笑む。
確かに彼は官位だけなら図抜けて高いし、この若さで抜擢されたということは有能なのだろう。祖父はそこに目をつけたに違いない。
だがあまりにも突然すぎる。結蓮は動揺してしまった。
「そんな……、断ってください」
「冗談。朝廷から手当をもらってる身で、朝廷の実力者に逆らえるわけないだろ。まだ追い出されたくないし」
「では私のほうから断ります」
「で、お祖父様がまた縁談を持ってくるのを待つってわけか」
痛いところをつかれて、ぐっと言葉に詰まる。彼の言うとおり祖父はまたすぐに次の相手を探してくるに違いない。そしてそれを拒む権利は自分にはないのだ。
本来なら『断ってくれ』などと口にすることすら許されない。大人しく言われるまま結婚するしか道はない、けれど――。
ぱちん、と乾いた音を立てて季隆が扇子を閉じる。
「悩んでるんなら、俺と取り引きしようよ」
「取り引き……？」
うん、と彼はうなずく。意外にも思慮深げな目をしていた。

「俺はこれからも朝廷にいたい。そのためには君の一族ににらまれるわけにはいかない。つまり、この縁談を断るなんて論外ってわけだよ。君もおそらくは太子舎人の仕事をやめたくないんだろ？　でも結婚したらそういうわけにはいかないのも自覚してるはずだ。これまでの縁談相手だって、結婚したら屋敷の奥に入れと言ってきたんじゃないか？」

「それは……」

その通りだった。結婚しても官吏を続けている女性はたくさんいるが、結蓮の縁談相手はいずれも名家の出で、妻が勤めに出るなど言語道断という常識の持ち主ばかりだったのだ。

にっこりと笑って彼は続ける。

「俺はそんなこと言わないから安心していいよ。というわけで手を結ぼう。簡単さ。大人しく縁談を受け入れたふりをすればいい」

「ふり……って、でもあなたには結婚の意思はないのでしょう？　いつまでも嘘をつき通せるとは思えません。祖父はこのまま婚礼まで進めるはずです」

「その時はその時だ。人生はなるようにしかならない」

今度は妙に達観したようなことを言ってうなずいている。黙り込む結蓮を見て、にこりと彼はまた笑った。

「契約成立でいいかな？　今日から俺たちは世をあざむく偽りの許嫁同士だ。よろしくね」

笑顔のまま軽く拱手して小首をかしげてみせるのを、結蓮は戸惑いながら見つめた。

軽佻浮薄を絵に描いたような男だと思っていたが、彼は若くして封陰省次官を拝命している

ほどの優秀な官吏なのだ。わざわざ遠い国から留学してきたところからしても、己の道に希望と夢を抱いていたに違いない。それなのに祖父に目をつけられたばかりに、異国の地で自分のような鬼娘と結婚させられるはめになってしまった——。

「あの……、申し訳ありません、御曹司どの。私の事情に巻き込んでしまって……」

自責の念がこみあげてきて、たまらず頭をさげる。

季隆は笑ってそれを受け止めてくれた。

「君が謝ることじゃないって。ていうかやっぱりその呼び方でいくの？」

「でも、どうしてそうまでして……？　璉からいらしたあなたに、そこまで豊家の機嫌を取る必要はないと思うのですが」

「言っただろ。どうしても煌に残りたいんだ。捜し物が見つからなくってね」

（捜し物……？）

ちらりと怪訝に思ったものの、訊ねるより先に季隆がにこやかに続ける。

「それに、たとえふりでも君のような美女と許嫁になれるんだから、文句なんて言えないよ。もしも君が俺を好きになってくれたなら本当に結婚してもいいんだけどな。ハハハ」

「……」

やっぱり、うさんくさい。

再び半眼になる結蓮をよそに、彼は意味ありげに笑んで顔を近づけてくる。

「しかし、煌に来てよかったとこんなに心から思ったことはないな。煌の女の子って美人が多

いとは感じてたけど、君に敵う人はいないよ。後宮の百花繚乱なんて目じゃないね」
「……。では早速ですが、業焔捜査の段取りはどのようになっていますか？」
「ちょっとちょっと。褒めてるのに、なんなのその仏頂面は」
「私にとっては褒め言葉にあたりませんので。それで、捜査の件ですが」
「冷たっ。なんで俺の発言を逐一流すの。上官のボケを殺しちゃだめでしょうが」
（……。本当にやりづらい……）
この軽薄な調子にこれからずっと付き合っていかなければならないのかと思うと、なんだか頭痛がしてきた。
「君さあ。俺に必要以上に敵意を持ってない？」
不満げに指摘され、結蓮はため息をつく。
「別にあなた個人がどうというわけではなく――封陰省に良い印象を持っていないだけです」
「……ひょっとして、五年前の一件のせいか」
すぐ察したところをみると頭の回転は速いらしい。結蓮は硬い表情でうなずいた。
「封陰省は皇帝陛下とそのご一族を守るための官府です。にもかかわらず、あの時封陰省の術師は誰一人として異変に気づかなかった。そのために皇后様や太子殿下は大怪我を負われました。……とても許せることではありません」
龍神の末裔である皇帝には、人ならざる力と国を治めていくための天の加護がある。
それは人々から崇められるとともに、悪鬼妖怪の類にとっては恰好の狙いの的でもあった。

彼らの世界では、より力の強いものを吸収して己の力にするという本能があるからだ。
そのため皇帝と一族を守護する封陰省が設けられ、煌国有数の呪禁師が集められた。その歴史は遠く建国の頃からと言われている。
しかし月日の流れは非情というべきか、それとも人の心が弱すぎるのか。皇帝を護るために作られたはずの官府にさえも汚職や腐敗が進行してしまったのだ。
五年前の事件当時の封陰官らは、罪を問われるのを恐れて姿を消してしまった。失態の上にそんな恥知らずな行動を起こした彼らのことを思うと、今でもはらわたが煮えくり返りそうになる。今いる封陰官らはそれとは無関係だとわかっているのだが、なかなか割り切れない。
「まあなー。初めて封陰省に来た時は俺も驚いたよ。所属の呪禁師はみーんな、私腹を肥やす阿呆官吏に成り下がってたもんな。正直、あのときは失望したね」
大げさな調子でため息をついた季隆だが、その顔には憂いが浮かんでいる。結蓮は少し意外な思いでそれを見た。
彼の故国である璉は煌の東にある国だ。広大な中海と峻険な山脈によって大陸から遮断されており、文化も言語も独自のものが息づいていると聞く。荒ぶる龍神に支配された中海を越える難しさは煌国でも有名だ。それだけに璉からの留学生は意志強固で優秀な者が多い。
（そういう挫折を経験したから、こんな軽薄な感じになってしまったのかしら……？）
失礼なことを考えつつも、少し同情してしまう。
「御曹司どのは、五年前にはもう煌にいらしたのですか？」

「うん。例の襲撃事件の時は桃霞を離れてたけどね。ちゃんと呪禁師として仕事しろって上官に楯突いて、地方に飛ばされちゃったから」

何気なさそうに言うと、季隆はひょいと籠を抱え直して踵を返す。

「んじゃ、次の仕事行くよー。こっちこっち」

「――はっ！」

そんなことをするなんて、見た目によらず気骨のある人なのだろうか？

ちょっとだけ見直しながら、地面に落としたままだった籠を急いで拾い上げると、結蓮は器用に人波をすり抜けて歩いていく彼を追った。

連れていかれたのは、市の立つ広場の奥にある土地神の廟だった。

門をくぐると、両脇には魔をはらう柚と橘の木。奥には色鮮やかな柱と屋根瓦の建物が三つ並び、あたりには香の匂いがただよっている。

そのうちの二つの廟には酒や食べ物が山ほど供えられており、花と蠟燭でこれでもかと彩られていた。一つは蓮女廟といって、天帝が大陸の守護を命じて遣わしたという六人の天女が祀られている。もう一つは真君廟といって煌の民に篤く信仰されている仙を祀ったものだ。六百年の昔、煌の太祖が建国する折、彼女を導いたといわれている聖仙である。どちらも詣でる人々の列が絶えない。

「――御曹司どの？」

結蓮はごく自然に手を合わせたが、季隆のほうは真君廟を素通りし三つ目の廟へとすたすた入っていく。こちらは人気がなく、供え物もほんの申し訳程度にしか置いていなかった。

「んじゃ並べようか。右から大根、蕪、葱、白菜、芋、人参の順でよろしく」

言うなり自ら籠の中のものを祭壇に供えていく彼を、結蓮は驚いて見つめた。

「供物にするのですか？　全部？」

「そうだよ。誰もお供えしてくれないんじゃ、土地神様がへそを曲げちゃうだろ。ぐれて悪神にでもなられちゃたまらないからね」

「……まさか、大安売りに参加したのは供物を調達するためですか？」

振り返った季隆は、悪戯っぽくにやりと笑った。

「俺が一人で全部食べると思った？」

「……、いいえ……」

封陰官の職務は皇帝の守護と皇城の鎮護。城下の土地神の機嫌を損ねないよう供物を捧げるのも立派な仕事だ。市の立つ日は城隍廟を浄める日、つまり土地神を祀る日である。子どもでも知っていることなのに、気づけなかった――。

「お嬢ちゃーん。手が止まってるよ。俺ひ弱だからちょっと手伝ってくれない」

季隆は飄々とした様子で籠から白菜を取り出している。結蓮は「はっ、ただいま！」と急いで駆け寄った。

供物を並べ終えると、二人は並んで御神体のある社を見上げた。扉が閉じているため中までは見ることができない。

「よーし。それじゃ最後の仕上げ」

「――!?」

季隆が躊躇いもなく祭壇によじのぼったのを見て、さすがに結蓮は仰天した。しかも彼は社の扉を開け、中に手を伸ばしたのだ。

「な……！」

絶句する結蓮の前で、季隆が御神体を取りだす。

それは、一振りの太刀だった。

淡い蒼の石が象眼された白銀の鞘を払い、彼は神妙な顔つきで刃を検分している。

「早く、元に戻してください。誰かに見咎められでもしたら投獄されますよ！」

「ハハハ。真面目だねー君は」

「真面目云々の問題ではありません！」

「大丈夫大丈夫。これも仕事だし」

「仕事ですって？　まさか――」

そんな罰当たりなことまで封陰官の職務に含まれるのかと、気が気でなく結蓮は周囲を見やる。他に誰もいないからよかったものの、人目に触れれば大騒ぎになったはずだ。

「ほんとだって。神様が留守にしてないか、ちゃんと封じられてるかどうか、定期的に確認し

なきゃいけないんだよ」

「は……？」

太刀をつかんだまま軽やかに下りてくると、季隆は結運の前にそれをかざした。慌てる結運を見て面白がっているのか口元には笑みが浮かんでいた。

「――古来、太刀には神聖な力が宿ると言われている」

刃が放つ冷たい光が彼の瞳に灯り、別人のような印象を醸し出す。

「その中でも特別に鍛え上げた太刀を器にして、悪神や妖怪を封じ込める術式があるんだ。この場合の悪神っていうのは、なんらかの理由で魔性に落ちた土地神のこと。そうやって封神した太刀を〈神憑きの太刀〉という」

「神憑き……？」

初めて耳にする言葉だった。鈍く光る刃に目が吸い寄せられる。

「数十年前の戦乱時代、〈神憑きの太刀〉はたくさん存在していた。それに宿る神や妖怪を使役して、兵器として戦に用いたんだ。停戦中の今、悪用を防ぐためにも一つでも多く捜し出して回収しなきゃならない。――俺の実家はその役目を負う捜神士っていう術師の集団でね。煌へ来たのもその役目のためなんだ」

流暢な煌ことばで説明する季隆と、彼の持つ太刀を結運は見比べる。祖父の諭迅が刀剣蒐集家であるためこれまで多くの太刀を目にしてきたが、そんな話は聞いたことがなかった。

「では、この太刀にも神が……？」

「記録によれば封じられたのは二十年くらい前らしい。土地神が去った土地は荒れる。ちょうど同じ頃に都で病が流行って大勢亡くなったそうだよ。捜し出して封神して祀り直したらぴたりと止んだらしいけどね」

「……本当に、神を封じることなどできるのですか？」

「できるやつがやれば、神だけじゃなく妖怪だってなんだって封じられるよ。それを飼い慣らして使役する者もいる。まあ俺のことだけど」

そう言って太刀を鞘におさめると、季隆は表情をあらためた。

「前置きが長くなったけど――、五年前の業焔もそうだったんじゃないかな」

「業焔が、ですか？」

「都に戻ってきてあらためて五年前の件を調べてみたら、いくつか疑問に思うことがあってね。当時の封陰省が腐ってたとはいっても、皇城の結界はちゃんと張られていた。並の妖怪には破れないものだ。――じゃあ業焔は一体どこから後宮に入ったのか？」

祭壇に寄りかかり、彼は芝居じみた調子で閉じた扇子を軽く結蓮の鼻先に突きつける。

「実はもとから宮城にいたんじゃないのかな。それも太刀に封じられた状態でね。それを何者かが解神した。そう考えれば、突然後宮に現れたのも説明がつくだろ？　当時朝廷には〈神憑きの太刀〉が多数保管されていたし、可能性は大いにある」

結蓮は思わず胸を押さえた。彼の推論を聞いて、何か凝っていたものが氷解したような心地になったのだ。

（そういえば……どこから入ってきたのかなんて、考えたことがなかった……）

確かにあの時業焔は突然現れた。なんの前触れもなく襲いかかってきて、結蓮の幸せな日常を壊していった。他に覚えているのは、突如響き渡った凄まじい悲鳴と、赤い血の色が目の前に舞ったこと――。

「大丈夫か？」

はたと我に返れば、すぐ目の前に季隆の顔があった。手が震えてしまうのを気づかれないよう、結蓮は急いで冷静な顔を取り繕った。

「その仮説が正しいとして――、誰がなんのためにそんなことをするというのです？　それではまるで故意に襲わせたような……」

自分で言いかけた言葉に、ぞくりとしたものが走る。

そんな恐ろしいことがあっていいわけがない。あの場にいた誰を標的にしたとしても許されないことだ。口にしたことを後悔した。

「……それに、その解神というのは誰にでもできるものなのですか？　あなたの仮説でいくと、封じられていた業焔を誰かが解き放たなければならないわけでしょう？」

「そこなんだよ」

待ってましたとばかりに季隆が身を乗り出してきた。反射的に結蓮は少し後ずさる。

「君の言ったとおり、解神は誰にでもできるわけじゃない。俺たちみたいな術師か、もしくは生まれつき異能の力を持った者にしかできないんだ。となると対象は限られてくるよね」

「つまり……当時の封陰官の誰か、ですか？」
もしそうだとしたら、封陰官が一人も駆けつけてこなかった理由の裏付けにもなるのではと結蓮は思ったのだが、季隆は首を振った。
「調べた限りじゃそれはなさそうだ。逃げちゃってるから本人たちの言質はとれないけど」
「ですが、他に対象になるような人なんて……」
「いるよ。君も知ってる人だ」
結蓮は訝しげに彼を見つめた。心当たりはない――。
「龍神の末裔である皇子様方は、生まれながらに神通力をお持ちだ。そうだよね？」
「え……それは、そうですが……」
一瞬何を言われたのかわからずぼんやりとして答える。だがすぐに理解すると、驚きのあまり呆然となった。
「あなた……、皇子様方のどなたかが、業焔を操って襲撃させたとでも思っているの？」
「他にそれらしい人がいないからねー。動機もなくはなさそうだし」
あっさりと肯定した季隆は唇に笑みさえたたえている。結蓮はそれをにらみつけた。
「信じられない……！　なんという恐ろしい、不敬千万なことを考えるのですか！」
「ああ、やっぱり怒っちゃった」
「なっ……」
さらに言いつのろうとした結蓮の鼻先に、ぱっと扇子が広げられる。

「落ち着きなさいって。別に決めつけてるわけじゃない。可能性の問題を言ってるだけだよ」
「そのようなことを口にするだけでも罪です！」
「……そんなに頭の固いことで、業焔を捕まえられるかな」
引いた扇子を閉じながら季隆がつぶやく。結運は思わず声を呑みこんだ。
「俺たちの仕事は業焔を見つけ出すことだろ？　それを成し遂げた後で、いくらでも俺を責めたり詰ったりすればいい」
「……」
「今一番大事なことは何かな？」
じっと見つめられ、結運は悔しさを押し殺す。彼を見直したりしたことを全部撤回したい気分だった。飄々として軽薄で、――とんでもなく無礼な曲者だ。
「……わかりました。私があなたの仮説を覆してみせます」
「よーし。それじゃ戻って作戦会議といこうか」
満足げに目を細めて季隆が踵を返す。太刀を収めて戻ってきた彼を、結運はきゅっと唇を引き結んで追いかけた。

朝廷へ戻った二人は、業焔の残滓が見つかったという武器庫へ向かった。もう何も痕跡はな

いと言う彼に、現場を見ておきたいからと無理を言って立ち寄らせてもらったのだ。
禁軍の武器庫は内宮と外宮の両方に置かれている。業焔が入ったと思われるのは内宮のほうの武器庫だった。
「こんなに奥まで入り込んでいるなんて……」
「でもこれで捜索範囲は少し狭まっただろ？　ここへ入れる人間は限られてるし」
武器庫内には奥まで棚がそなえつけられ、無数の箱がおさめられていた。実戦用の大型武器などはなく、どうやら戦勝の報酬として召し上げたものや周辺国からの貢ぎ物の宝物ばかりのようだ。それらを横目に見ながら二人は奥へと進む。
「限られているとはいえ、へたをすれば何百という人間が出入りできる場所ですよ。それに、内宮には東宮御殿もあります。距離があるとはいってもいつでも近づける範囲に業焔が来ているというのに、そんなに呑気に構えていられません」
琮成のことを思うと息苦しいほどの焦燥が胸にこみあげる。
高く吹き抜けになった天井を見上げながら季隆が言った。
「太子殿下のことなら心配いらないよ。何重にも結界を張ってるから」
「ですが！」
「ほんとだってー。皇城全体にも新しく結界をいくつも張り直してるし。人間じゃないやつには相当つらいはずだ。動いてるだけでもやっとだろうなあ」
気のなさそうな調子で言った彼を、結蓮は凝視した。

なるほど、人に化けても中身は妖怪だ。これも一つの手がかりになる。
「……体調を崩している官吏がいないか調べてみます」
「それがいいね」
にっこりと季隆は笑う。いまいち頼りなさそうな印象のある彼だが、捜査に前向きな気持ちにさせてくれたのは感謝するべきだろう。
そう思って足を速めた時だった。異質な気配に気づき、結蓮はざっとそちらに向き直った。
「――何者！」
武器庫の奥、手燭の明かりが届かない暗がりから、ゆっくりと影が近づいてくる。
鋭い誰何に姿を現したのは一人の男だった。
裾の長い袍で長身を包み、黄色の巾で髪を括ったその男は、二人を見ると一礼した。
「驚かせてしまい、申し訳ありません。しかしながら武官様がいらっしゃるより先にこちらへお邪魔していただけのこと、けしてあやしい者ではございませんので」
訥々とした穏やかな声で述べ、微笑んで手形を示す。それは朝廷高官の許しを得てここへ来ていることをしめしていた。
「わたしは坦国からまいりました、猩紅と申す呪禁師です。范東宮太保のもとに身を寄せておりますので、身元のご確認などはそちらにお願いします」
太刀の柄に手をかけていた結蓮は、一つ息をつき、姿勢をただした。
「東宮太保のお客人とは知らず、失礼をいたしました。こちらに何かご用がおありですか？」

「いえ、用というわけでは。刀剣に興味があるものですから、なんとなく来てみたのです」
猩紅は人の好さそうな顔で微笑んだ。その額には紅玉の飾りがきらめいている。
後ろでやりとりを眺めていた季隆が、不思議そうに口をはさんだ。
「朝廷へいらしたのは皇后陛下の快癒祈願のためですか？　それにしては坦は遠いですけど」
西方にある坦は茫漠たる砂漠が広がる国で、煌とはあまり国交はない。術師が集められているとはいえそんな遠国からも来ているのは確かに不自然だ。
季隆の封陰官服に気付いたらしく、術者同士の気安さもあったようで猩紅は頓着した様子もなく答えた。
「諸国をめぐって見聞しているうちに、気になる噂を耳にしまして。それで桃霞に立ち寄ったのです。縁あって范太保に招かれましたので、快癒祈願には及ばずながらご協力しようと思っておりますが」
「噂というと？」
猩紅はちらりと笑みを浮かべる。
「――桃霞に〈龍神の太刀〉があるらしい、と」
「まさか。あれは伝説上のもので……」
「その伝説の宝刀を一目見たくて諸国を放浪している無頼の者なのですよ」
猩紅は穏やかに微笑み、結蓮に目を細めてみせた。
「その太刀は龍宮に伝わる天下の秘宝で、封じられているのは龍王とも龍族一の悪神とも言わ

れています。それを手に入れれば呼び出した龍王を従えることができ、なんでも願いがかなうと。天下を治める神の位も、不老不死の身体も、世界中の財宝が集まると言われる水晶宮の玉座さえも手に入ると――」

まるで美しい詩歌を口ずさむかのように、すらすらと彼は述べる。年齢不詳の面立ちが一瞬熱を帯びたように見えた。

「龍神の宿る太刀……。先ほどお聞きした〈神憑きの太刀〉の一種でしょうか」

「そういうことだね。でもまあ、お伽噺みたいなもんだよ。本当に存在してるなら俺も見てみたいけど」

肩をすくめる季隆に、猩紅は笑ってうなずいた。

「わたしも半分は道楽のようなものですよ。ただ、刀剣に興味があるのは本当でして。先ほどから武官様の太刀が気になって仕方がありません」

「私の？」

左腰に視線を感じ、面食らって柄に手をやる。

結蓮にとっては母の形見である大事なものだが、意匠自体はごくありふれたものだ。柄に嵌った瑠璃玉が深い色の存在感を放っている以外、特に飾り気はない。

細い目を見開くようにして見入っていた猩紅が、やがて満足げに息を吐いた。

「素晴らしい……。凄艶な光を感じます。あなたによくお似合いです」

中身を見たわけでもないのに陶然としたような目をしている。よほどの愛好家らしい。

「ところで、お二人はこちらで何をされていたのですか？」
ついでのように猩紅が訊ねてきたので、季隆が簡単に事情を話す。術者同士というのはこうして情報交換をするのが普通らしい。
「朝廷に妖怪が……。そうでしたか。では、何かわかりましたらお知らせしましょう」
「ええ、よろしく」
猩紅は丁寧に拱手一礼すると踵を返して去っていった。情報は交換しても深くは立ち入らないのが術者の決まりのようだ。
その時、
「……？」
何か獣のような臭いを嗅いだ気がして結蓮は振り返った。
しかし棚が続いているだけで、それらしきものは何も見当たらない。
（気のせい……？）
「お嬢ちゃん、ここだよ」
一瞬不審に思ったが、季隆の呼ぶ声に、そのことはすぐに頭から抜けてしまった。
彼が指さしているのはある棚の前だった。一ヶ所だけぽっかりと空いている。そこに収めてあった箱から太刀が盗まれ、そのことによって業焔の存在が発覚したのだという。
箱は封陰省が回収したとのことで痕跡は何も残っていない。棚や床、近くの箱を結蓮は食い入るように見つめた。

（ここにいたのね。あの業焔が……）

そっと指でなぞってみる。触れたのはただの木の板だけなのに、五年前と同じように悲鳴が聞こえてくる気がして思わず目をつぶった。

克服したはずの恐怖が足下から這いのぼってきて、胸が締めつけられるように痛む。

――ガリゴリゴリ、と壮絶な音が沈黙をやぶった。

何事かと結蓮が振り向くと、季隆が棚に腰掛けて寛いでいる。

「……何をしていらっしゃるのですか？」

「何って、糖分補給だけど」

当然のように答えが返ってきた。小さな袋を掲げられ、結蓮は眉を寄せる。

「先ほどのガリガリという大きな音は、あなたの糖分補給によって生じた音なのですか？」

「あ、そんなにうるさかった？　ごめんごめん、この飴玉すげー硬いんだよね。君もどう？」

へらへらと勧められ、その呑気ぶりに結蓮は一気に脱力した。

なんて緊迫感のない人なのだろう。一人で過去を思い出して震えていた自分が馬鹿みたいだ。

飴玉を砕く音に救われたなんて――。

「……」

「ん？　もう用事終わったの？　じゃ帰ろっか」

他人事のような顔で笑うと、彼はさっさと先に立って歩いていく。

結蓮はその背中をじっと見た。

――もしや彼は、異変に気付いてわざと大きな音を立ててくれたのだろうか？
（……まさかね）
さすがにそれは都合が良すぎるか。あっさり打ち消すと、結蓮は急いで彼を追った。

内宮の武器庫から外宮にある封陰省へ戻る道沿いに、一際広大な桃花園がある。
園を蛇行して貫く小径を急いでいると、季隆が急に立ち止まった。
「蕾がほころんできたね。もう少し暖かくなると一斉に咲くんだろうな」
軽く目を細めて咲き初めの桃花を見ている彼は、半端な長さの髪が風にあおられ、なかなかさまになっていた。これで酒杯でも持っていれば完全に遊び人の公子様というところだ。
「桃花より今は業焔の件が大事です」
「そっけないなぁ。ほんとに君は真面目だよね」
「真面目云々の問題ではありません。事実を述べたまでです。さ、まいりましょう」
え～、と不満げな声をあげる季隆を結蓮は半ば強引に促す。のらりくらりとして緊張感のない上官にめげている暇はない。高官相手だろうと遠慮している時ではないのだ。
（勤務態度を咎められるようなことがあれば、その時はその時だわ）
これまでは常識として官府の序列に従ってきたが、今はある程度開き直らざるをえない。
「きっちりしてるよなぁ。きっちりしすぎてる。そもそもその完全装備はなんなの。今から戦

にでも行くつもり？」

鎧に肩当て、籠手、脛当て、革の長靴、手袋に、首もとは分厚い巾を結んでいるさまは、暑苦しいととられても仕方ない恰好である。説明するのが面倒だったので結運はいつものようにごまかした。

「冷え性なので」

「そうなの？　だめだよ、女の子が身体冷やしちゃ。温まるものを食べなさいね」

本気かどうか彼は眉をひそめてそんなことを言う。結運はそれを流して促した。

「それはともかく、しっかり歩いてください」

「なんだよー、ちょっとくらい風流な夢を見させてくれてもいいだろー」

「歩きたくないのなら担ぎますよ」

「担ぐのかよ！」

ごねる彼の服を引っ張って格闘まがいのことをしていると、奥のほうから思いがけない人の声がした。

「――結運？　そこで何をしている？」

はっとして振り向いて見れば、小径をやってきたのはなんと太子琮成だった。もつれあっている二人を眉をひそめて見ている彼の傍には、祖父の諭迅や秦少傅もいる。結運は急いでその場に膝をついた。

「任務の最中にございます。太子殿下」

「立つがいい。――任務とは封陰省のほうのか」
琮成はすでに事情を知っているようだった。促されて立ち上がった結蓮に、じっと思慮深げな眼差しをそそぐ。
「秦少傅に聞いた。……大変だろうが、腐らずに励め」
「はっ。ありがたいお言葉です。殿下の御ために励んでまいります」
結蓮は深々と拱手一礼する。
本当は少し寂しいし、気がかりもあるので傍を離れたくない。だが業焔を放っておけばいずれ必ず琮成に害を及ぼすと思うと、この任務をおろそかにはできないのだ。
「皇后陛下のお見舞いに参ってきたところなんですよ」
秦少傅が控えめに教えてくれたので、結蓮は納得してうなずいた。
皇后がこの内宮のどこかで眠りについていることは承知している。ただ結蓮の身分では見舞いにいくことは許されないため、場所までは知らなかった。
「……で。結蓮。その男は誰だ」
琮成の目がかすかに胡乱な色を浮かべる。彼の視線の先にいるのは季隆だ。封陰官の官服姿だから同僚というのは気付いたはずだが、それ以外にも何か感じるところがあったらしい。
季隆が頓着したふうでもなく一礼して切り出した。
「封陰省次官、橘季隆と申します。豊結蓮嬢とは職務においての同輩、そして親の定めた許嫁でございます」

「なんだと？」
琮成が啞然とつぶやき、結蓮もぎょっとして顔をあげた。なぜ今それを言うのか――。
「どういうことだ？　まさか昨日の、豊老公が言っていた話か」
すぐに察したのだろう、琮成の声が硬くなる。
結蓮は仕方なく説明しようとしたが、それより早く諭迅が口をはさんだ。
「さようにございます、殿下。こちらが結蓮の縁談のお相手、橘どのです。璉国からの留学生でありながら将来を嘱望された封陰官でございます。――さっそく娘と親しくしていただけているようですな、婿どの」
（婿どの!?）
もうすっかりその気のようだ。満足げにうなずいている祖父に内心冷や汗をかく結蓮の隣で、季隆がにっこりと笑顔で応じる。
「はい。睦まじくやっております、義父上」
（義父上!?）
悪乗りしすぎだ。婚約ではなくただの契約なのに、本当に婚礼まであげるはめになったらどうするのかと結蓮は目で訴えたが、季隆は知らん顔をしている。
そんな二人の様子に琮成は絶句したようだったが、それも少しの間だけだった。「そうか」とうなずくと、やや冷たい眼差しになった。
「結蓮は私の大事な叔母だ。橘季隆とやら、くれぐれも丁重な扱いで頼むぞ」

「御意に」
「……一度、個人的に話をしてみたい。近いうちに春明殿へまいれ」
太子の鋭い視線に、季隆が無言の笑みで首肯する。
結蓮は二人がかわした視線のやりとりに気付かなかった。そのまま去っていく琮成たちの背中に深々と一礼する。
（殿下の御ために、必ずや業焔を捕らえてごらんにいれます……！）
胸の内はただその思いでいっぱいだった。

封陰省に戻ると、あらためて業焔捜索の会議が開かれた。
「盗まれた四本の太刀の中に、〈神憑き〉があったわ」
古びた巻物を広げ、劉博士が真剣な顔で指さす。
「文献が古すぎる上に、管理がずさんで封陰省から禁軍にまぎれこんでたらしいの。ほら、ここ。『今は亡き晏国から召し上げた太刀に、古の妖怪炯炯が封じられていた』ってあるわ」
「炯炯か……。なるほど、盗難騒ぎを起こした目的はそれか」
寝椅子でごろごろしながら季隆がつぶやく。どういうことだと結蓮が見ると、博士が代わりに答えた。
「おそらく業焔はこの太刀を盗み、炯炯を解神した。吸収して自身の力にしたのよ」

「……？　なぜそんなことを――」

言いかけて、結蓮は息を呑んだ。

先ほど説明を聞いたばかりだ。〈神憑きの太刀〉には悪神や妖怪が封じられているのだと。そして妖怪には、己よりも力が強大なものを吸収しようとする本能がある――。

季隆がふと唇をゆるめて視線をくれた。

「予想がついたみたいだね。――業焔が俺の仮説通り〈神憑き〉に封じられていた妖怪だったとしたら、他の〈神憑き〉の気配を知ることができたはずだ。人と同じように知略を用いると言われてるし、それぐらいはやってのけるだろうな」

「しかも隠形して内宮にまで入り込んでるんだもんねー。って、そうそう、それについても報告なんだけど。業焔が隠形してるのは東宮官か近衛軍の誰かじゃないかと思うの」

劉博士が別の巻物を広げる。それは皇城と宮城の官府配置図だった。

「赤い印が付いてるのが残滓の見つかった場所よ。圧倒的に内宮が多いでしょ？　それも東宮と西宮周辺。後宮に入ってないのは、おそらく後宮だと目立ちやすい外見だから。つまり、業焔が化けているのは男の可能性大ね」

「外宮の官吏だって内宮には入れるだろ？」

「まあね。ただ、東宮官だけが持ってる玉牌でしか入れない場所で複数残滓が見つかってるの。そして見たかぎり、業焔は忍びこんだり無理に押し入ったりしてる気配がないのよ。堂々と官吏としてあちこちに出向いてるの」

「一貫して人として行動してるってわけか……。目立たないように確実に動いてるなんて、本当に人間並みの知能を持ってるな」

二人の会話を聞きながら結蓮は半ば呆然としていた。配置図に印された赤い印が多すぎることに衝撃を受けていたのだ。

「こんなに動き回っているなんて……」

自分が婚礼の準備で休暇を取っていた間に、こんなにも危険な状態になっていたのか。それが悔しくて、恐ろしかった。

業焔は腕を取り戻そうとしている。その腕は皇后が眠る結界の近くに封じられているという。結界を解く術式が業焔に邪魔されるようなことになればどうなるのだろう。伯母は目覚める機会を失ってしまうのではないだろうか。

水分補給と称して甘酒を飲んでいた季隆が、にやりと笑って身体を起こした。

「けどこれは好機だよ、お嬢ちゃん。業焔が本当に炯炯を解神してたとしたら、一発で見つける方法がある」

「――!?　それは一体！」

「解神した者には身体に印が現れるんだ。術式は天帝との契約っていう態だから、その契約の印が刻まれるんだよ。――こんなふうに」

彼は長袍の留め具をはずすと、中の着物をゆるめ、胸元をはだけた。

鳩尾のあたりに赤い花びらのような痣がある。結蓮は真剣な顔でそれをのぞきこんだ。

「確かに特徴的な印ですね。蓮の花のような……」

蓮花は天帝の象徴のようなものだ。そのため様々な意匠に縁起物として用いられるが、こんなところにも蓮が現れるとは知らなかった。

結蓮はじっくりと眺めていたが、ふと思い出して眉をひそめる。

(そういえば、私も似たような痣があるけれど……)

箇所は違うが、確かに似ている。ただの偶然だろうが――。

「でも季ちゃん、好機って言うけど、どうやって服を脱がせるのかっていう問題があるわよ」

「そこはなんとかうまく……うひょほ!」

急に季隆が奇声をあげた。観察に没頭するあまり結蓮が無意識につつっと指を肌にすべらせたのだ。

「少し皮膚が盛り上がっていますね。描かれたという感じではない……」

「お……おい」

「なるほど、これも特徴ですね。……匂いはあるのでしょうか」

「ちょっ……、おいおいおい!?」

顔を寄せてくんくんと匂いを嗅いだら、仰天したような声が降ってきた。

「――失礼しました。印自体は無臭のようですね」

急いで離れて一礼した結蓮を季隆は呆然として見ている。信じられないものを見たという顔つきだ。

「なんなのこの子……!?」
「御曹司どの。では私はさっそく業焔捜しに行ってまいります」
「ちょ、待った！　どうやるつもり？」
慌てたように止める彼を、結蓮はきりりと顔を引き締めて振り返った。
「私にお任せを。考えがあります」

「脱衣試合がしたいだと？」
いかめしい顔をさらに険しくして訊ね返した隊長に、結蓮はかしこまってうなずいた。
「はっ。昨今は時候の変わり目にあたります。心身を鍛えるためにも緊迫感のある訓練をするべきではないかと考えました」
「なるほど。それで脱衣試合か。ふざけとるのか？」
「はっ。ふざけておりません！」
封陰省を飛び出した結蓮は、かつての所属先である柚梨軍の演習場へ来ていた。
禁軍の中でも太子近衛である柚梨軍は舎人として東宮府に詰めている。警備と称してどこにでも入ることができるし、例の武器庫から〈神憑きの太刀〉を持ち出すのも容易だったはずだ。
業焔が潜伏先に選ぶ可能性は高い。

元所属先ということもあって勝手はわかっている。探るならまずここだ。

「おぬし、わかっとるのか。脱衣試合ということは、負けたほうが服を脱ぐのだぞ。おぬしもやるというのか？」

「はっ。無論です」

演習を受け持つ隊長は、厳しいが洒落がわかる人だ。鍛錬という名目であればある程度の融通は利かせるはず――そうにらんでいた。

世にも珍しい出向を命じられた女武官が戻ってきたとあって、同僚たちも興味津々といった様子で遠巻きにしている。話を聞きつけたのか、「脱衣試合だってよ」「豊舎人もやるのか？」などひそひそ囁き合っているのが聞こえた。

「……おぬしが衣を脱ぐところを衆目に晒したと知れたら、わしの首が飛ぶ」

「ご心配なく。そのようなことにはけっしてなりません。隊長どのの名誉をかけて臨みます」

きびきびと答える結蓮に、隊長は一つ深く息をつくと、だんっと傍らの小卓をたたいた。

「――全員集まれ！　これより立ち合いを行う！」

結蓮は内心ほっとしながら、「ありがとうございます！」と礼をとった。

隊長から試合の概要が説明されると、当然ながら演習場はざわめいた。隊長は以前から様々なやり方で演習をやらせる人だが、さすがに脱衣試合は初めてだ。

彼の説明が終わると、結蓮は手をあげて前へ出た。

「一つ決まり事を追加していただけないでしょうか。この試合、総当たり戦ではなく私を相手

にした勝ち抜き戦にしていただきたいのです」
「……どういうことだ？」
「端的に申しますと、私が全員のお相手をいたすということです」
隊長をはじめ、武官たちがそろってぽかんとした。
「全員だと？　今日だけでも百人はいるんだぞ？」
「はっ。承知しております」
「一人で相手をするなど、いくらおぬしでも……」
「僭越ながら、負けるつもりは毛頭ありません」
きっぱりとした宣言に、どよっと不穏な空気が揺れた。――挑発は成功のようだ。
柚梨軍はそれほど大きな軍ではない。東宮府で勤務中の者や休暇中の者をのぞけば、他はすべて今日ここに来ているはずだ。そのすべてを半裸にすることができる絶好の機会を逃すわけにはいかない。
気迫が伝わったのかどうか、隊長は渋い顔で武官たちを見渡した。
「では、魏舎人！　準備をせよ」
指名された若い武官が肩をいからせて前へ出る。上背がある上にごつごつとした体格の彼は、結蓮と向き合うと凄みをきかせてにらんできた。
「……あまり調子に乗るなよ。オレは豊家なんざ怖くねえ」
「……お願いします」

こちらにだけ聞こえる低い声での脅しに、あくまで礼儀正しい挨拶を返す。
「始めッ」
隊長の合図とともに、魏舎人はうなり声をあげて突進してきた。
振り下ろされた木刀をかわすと、耳元でびゅっと凄まじい音がした。当たっていれば威力は大変なものだっただろう。
（けれど、はずれれば意味はない！）
くるりとすばやく向き直ると、結蓮は彼のうなじへと鋭く木刀を突き立てた。
一撃目の体勢から戻ってもいなかった彼は、ぐっとうめいて振り返る。信じられない、とその目が言っていた。
「それまでッ」
あっという間についた勝負に、演習場がしばし静まりかえる。
魏舎人の動きが鈍いのではない。結蓮が速すぎて、誰もが皆、一瞬見えていなかったのだ。
半ば呆然としている魏舎人を、結蓮は油断なく見据える。
「では、魏舎人。お約束どおり衣を脱いでいただきましょうか」
「いえ、まだです」
魏舎人が舌打ちして鎧をはずす。中の衣を無造作に脱ぎ捨て、「ほらよ」とそれを放った。
「あ？」
「その下のもお願いします」



中の着物まで脱がなければ肌の印を確認できない。それでは試合の意味がないのだ。
「ああ？　どんだけ男を虚仮にするつもりだ？」
魏舎人が凄んだが、結運は構わず彼に近寄った。
「虚仮になどしていません。あなたの裸が見たいだけです」
「……!?　な、何言い出すんだっ!?」
「御免！」
目をむく彼の着物の紐に問答無用で手をかける。
「なあっ!?　や、やめろや！」
「脱ぐのが面倒なら私が脱がせてさしあげます。大人しくなさってください」
「ひっ……、て、てめえ、人前で何しやがる！　恥ずかしいから脱がせんな！　つうか帰れや！」
「あなたの裸を見ないうちは絶対に帰りません！」
二人のやりとりを他の武官たちは呆然と見ている。一見するとごつい大男が妙齢の美女に衣を剝かれているという、世にも珍妙な光景なのだ。
格闘に勝利したのは結運だった。着物の胸元を開くなり頭上から「ああっ」と情けない声が降ってきたが、気にせずに中をのぞきこむ。
（ない……）
蓮の紋様はなかった。結運は肩を落としたが、すぐに気を取り直して彼から離れた。深々と

一礼する。
「素晴らしい筋肉をお持ちですね。見せていただきありがとうございました」
「くっ……、これで勝ったと思うなよ！」
胸元をかきあわせ、魏舎人は捨て台詞を残してそそくさと戻っていった。その頬が赤くなっているのは怒りよりも動揺のほうが大きいようだ。
放り出していた木刀を拾い上げ、結蓮は同僚たちのほうを振り返る。
「――このような感じで進めていきたいと思います。無理強いするのは心が痛みますので、ぜひご協力をよろしくお願いします」

結局それから一日がかりで全員を半裸にすることができたものの、該当者はいなかった。
（はずれか……）
最後の一人を確認し、結蓮は落胆してため息をついた。丸一日使って手がかり無しは痛い。しかし柚梨軍はこれで全員ではない。気持ちを切り替え、同僚たちに一礼する。
「本日は大変良いものを見せていただき、ありがとうございました。また機会があればよろしくお願いします」
丁寧に挨拶して踵を返す。落ち込んでいる暇はない。業焔捜しはまだ始まったばかりだ。
「良いものって……何だよ……」

毅然と帰って行く結蓮の背中を、半裸にされた武官たちはどきどきしながら見送った。

次に結蓮は、東宮府の官吏の調査にとりかかった。

今回使うのは劉博士が開発した神気炎という薬だ。その薬が肌に直接当たると、普通の者には反応せず、神気に触れた者にだけ色が付くらしい。炯炯を解神したと思われる業焔はその際にたっぷり神気を浴びているはずだ。土地神の廟にお参りした程度でも印は現れるらしいが、それでもだいぶ対象は絞られるだろうとのことだった。

（けれど、どうやって薬を肌に振りかけようかしら。今度は脱衣試合なんてできないし）

薬包とにらめっこしながら考え込んでいるところに、ちょうど回廊の向こうから若い官吏が歩いてきた。結蓮はすばやく頭の中をめぐらせ、彼の前に飛び出した。

「――失礼します。少しお時間をいただけませんか」

え、と相手が訝しげに立ち止まる。東宮府に勤める者すべて合わせれば何百人という数になる。一人一人に時間をかけてはいられない。

（仕方ない。ここは正面から勝負をかける！）

キッと表情をひきしめると、おもむろに申し出た。

「すみませんが、手を握らせてください」

「えっ」
驚く彼の手をすかさず握って引き寄せる。もちろん自分の手には件の薬を塗りつけ済みだ。
「な、何をするんですかいきなり!?」
「申し訳ありません……もう少し、このままでいさせてください」
知らない者が聞けば睦言のようにも思える言葉を吐きながら、結蓮は彼の手をきゅっと握った。袖口のたっぷりとした官服から手を引き寄せようとすれば、自然とこうなってしまうのだ。
「やっ、こんなところで、困ります……！」
突然回廊の真ん中で若い娘に手を握られた官吏は真っ赤になって動揺している。見た目だけならあやしいほどの美女にぐいぐい迫られているのだから、まあ無理もない。
「すみません。あと少しだけ……」
「あ……っ」
とうとう官吏が身もだえ始めたところで、結蓮はようやく手を離した。
触れていたところを確かめてみる。薬自体の色は黒いが、彼の掌には色はついていない。
（――シロか）
素早く確認すると、きびきびと一礼した。
「大変参考になりました。ありがとうございます」
「え」
呆然としている彼をよそに、急いで傍をすりぬける。次の対象が前方から来るのが見えたか

らだ。その中年の官吏に駆け寄ると、結蓮は彼の前にたちふさがった。
「失礼します。突然申し訳ありませんが、手を握らせてください」
「な!?　な、何事だね、急に……あっ」
目をむく彼の手をつかんで引き寄せる。頬を染めた中年官吏に構わず、きゅっと握って薬の粉をすりつけた。
「ややややめないかっ、私には妻も子もいるんだっ、君の気持ちは嬉しいが応えられないっ」
なぜか異様に慌てふためく彼の手を見てみれば、じんわりと赤い色が浮き出ていた。薬が神気と反応して変色したのだ。結蓮の目に緊張が走る。
「すみませんが、お名前を教えていただけますか。後ほどお話をうかがいにまいります」
「……!?　なんの話だねっ、そもそも私と君とでは年齢が離れすぎて――」
「お名前を。お願いします」
ずい、と身を乗り出し、結蓮は油断のない目つきで繰り返す。印が現れた者は身元を確認し、後で季隆が業焔か否かを調べることになっていた。
最後まで何か勘違いをしていた中年官吏から名前と所属を聞き出すと、結蓮は「では、御免」と颯爽とその場を離れる。
まだまだ手を握らなければならない人間があと数百人もいるのだ――。

翌日にはすでに、東宮府は『豊舎人乱心か!?』という噂でもちきりとなった。
「いやー。すごいな、うちの切り込み隊長」
名前の書かれた紙切れを手に、季隆が呆れとも感心ともつかない顔でぼやく。
「手段はめちゃくちゃなんだけど不思議とあざやかなんだよなぁ。俺の出番なんか全然なかったし」
一応調査時には同行していた彼だが、「自分に任せてほしい」という結蓮に動かせてくれたのだ。官吏らがいきなり手を握られて呆然としていた時、彼も少し離れた物陰で結蓮のやり口に呆然としていたのである。
「でもいいの？　変な噂が立っちゃって、困らない？」
劉博士が心配そうに眉をひそめたが、結蓮は静かに首を振った。
「変な噂は元からのことですし、別に気になりません。それに職務が第一ですから」
結蓮が印の有無を調べ、それを季隆が確認に行くという方式で進めている捜査だが、今のところ柚梨軍にも東宮官にも業焔とおぼしき者は見つかっていない。早く見つけ出さなければそのことしか頭になかった。
季隆がにやりと笑って肩に手を回してくる。

「人の噂なんかどうでもいいよなー？　俺の嫁になるんだし」
「……ああ、そうですね」
「ちょ、何その心のこもらない返事」
「では本日の調査に行ってまいります」
「もー、また流したー！」
上の空での返答が気に入らなかったらしく、季隆が嘆きながら寝椅子に倒れ込む。
結蓮は構わずその脇をすりぬけようとしたが、途端、行く手を腕で遮られた。
むっとして見下ろせば、いつもの呑気な顔で彼が見上げてくる。
「青白い顔してるね。ひょっとして、どこか具合でも悪いの？」
「いえ、どこも問題なく健康体ですが」
「ほんとかな。言っとくけど、上官に嘘ついたらおしおきだよ」
からかうように笑う彼に、結蓮は冷たい視線を返した。
「行ってまいります」
いつまでも彼のおふざけに付き合っていられない。足早に寝椅子の傍をすりぬける。
と、書庫を出ようとしたところで、ふいに目眩のようなものを感じた。思わず足が止まる。
（こんな時に貧血なんて……！）
くらくらする頭を押さえ、結蓮は浅く息を吐いた。すぐに治まるだろうと、軽く目をつぶる。
「豊舎人、大丈夫!?」

気付いたのか劉博士が慌てたようにのぞきこんできたので、結運は無理やり瞼をあげた。
「……大丈夫です。なんでもありませんので」
「顔が真っ青よ！　ちょっと横になったほうがいいんじゃない？　隣に休むところもあるし」
彼は心配そうに言ってくれたが、結運は頑なに首を振った。こんな時にゆっくり休めるわけがない。
「そういうわけにはいきません。本当に、大丈夫ですから」
止めようとする彼を振り切り、歩き出そうとした時だった。
「――豊結運、止まれ！」
背後で季隆が叫び、結運はびくりとして動きを止めた。
（……？　何？　これ……）
足が動かない。いや、足だけでなく身体全部が固まってしまったようだった。彼の大きな声と命令口調に驚いたから、というわけではけっしてない。動きたくても動けないのだ。懸命に動かそうとしていると、いきなり後ろからひょいと担ぎ上げられた。
「――!?」
見れば、担いでいるのは珍しく真面目な顔をした季隆だ。
「全然大丈夫な顔してないくせに、意地を張るなよ」
「……っ」
結運を担いだまま彼はすたすたと隣の小部屋へ入っていく。

寝台に結運を放り込むと、季隆はおもむろに長袍を脱いだ。さらには懐から細長い紐のようなものを取り出す。瞳がいつになく鋭いのを見上げ、結運はごくりと喉を鳴らして身構えた。

（一体、何をする気――）

危険を感じて逃げようにも身体が言うことをきかない。声も出ないから助けを呼ぶこともできない。こめかみを汗が伝っていく。

「そういう不健康そうな顔を見てると、むらむらするんだよ……」

不穏な顔つきでそう言うと、彼は持っていた紐を両手でぴんと張った。まさかそれで縛る気かと結運は目を瞠ったが――。

「今から俺が精の付くもの山ほど食わせてやる。それまでそこで大人しくしてろ！」

びしっ、と指を突きつけて宣言すると、すばやく紐をたすきがけにしながら彼は部屋を出ていった。

（え……何……？）

結運が呆然としていると、彼と入れ替わりに劉博士が入ってきた。苦笑を浮かべている。

「逃げないように一応見張っておけ、ですって」

「……」

「大丈夫よ、すぐに解ける術だから。禁呪っていってね、相手の行動を制限する術なの。口で言うより術をかけて止めるなんて、ほんとに怠け者よねえ」

劉博士はやれやれといったように扉のほうを見て、それから笑った。

「わたしは古書の読み直しするから、あなたもちょっと休んだら？　心配しなくても業焔は逃げやしないわ」

結蓮はカッと目を瞠った。何を悠長なことを言っているのか。逃げやしないと言うのなら、余計に急がなければならないのに。もし太子の身に何かあったらどうするのだ。

そんな嵐のような思いが通じたのか、劉博士は「大丈夫よ」と繰り返した。

「東宮府には入れても、春明殿までは業焔は入れないわ。季ちゃんが毎日結界を張ってるから」

（……あの人が？）

「あはは、そりゃ、普段の彼を見てたら信じられないわよね。けど本当よ。長官が皇后陛下のほうにかかりきりになってる今、季ちゃんは皇帝陛下と太子殿下の守護を一人で引き受けてるの。ああ見えて一応毎日仕事してるのよ？」

おかしそうに笑う劉博士を、結蓮は半信半疑で見上げていた。

言われてみれば、官府配置図に記されていた赤い印は東宮御殿の中には一つもなかった。春明殿に施された結界は季隆が張ったものだったのか。彼はそんなこと、一言も言わなかったけれど――。

（あの人も殿下を守ってくれていたのね。……でも、殿下のことは、私が守らないと……）

頑なに張り詰めていた気持ちが一瞬ゆるんだのを、結蓮は急いで引き締めた。

しばらくして術が解かれた結蓮を待っていたのは、大量の饅頭だった。
大皿に見上げるほど盛られたそれは、ふかしたてなのかほかほかと湯気をあげている。
「これは……？」
「今日の昼飯」
前掛けをはずして放り出しながら、季隆が先ほどの不機嫌な顔から一転して笑顔で見つめてきた。
「だいぶ顔色よくなったな」
「！」
ふいに額に手を当てられ、結蓮はびくりとした。触られて驚いたのもあるが、前髪をあげられて顔をあらわにされたことに怯んでしまったのだ。
そんな反応に気付いたのかどうか、彼はにっこり笑って大卓に手招きする。
「いっぱい作ったからねー。お腹はち切れちゃうくらい食べな。あ、翡翠丸、どんどん運んできちゃって」
「へい」
彼に指示されるより早く、翡翠丸は饅頭が載った皿を両手に持って次々と運んできている。
どうやら近くに厨房があるようだ。
ぽかんとして見ていると、いきなり横から劉博士が体当たりしてきた。

「んもー！　心配しちゃったじゃないっ。女の子なんだからちゃんと食べなきゃダメよぉ」
うるうるした目で見つめられ、本心からの言葉だとわかって、結蓮はおずおずと口を開く。
「……はい。ご心配をおかけしまして――」
「おーい。俺の許嫁に勝手に抱きつくな」
今度は逆側からぐいっと引き戻された。肩に手を回してきたのが季隆だと気付いて、結蓮はぎょっとした。冗談めかしてあっさりと彼は言ったが――。
「まさか、例の件を話されたのですか？」
婚約話は方便なのだ。それなのに言いふらしてどうする、と目で訴えるが、彼はあまり気にした様子もない。
「黙ってたっていつか知られるって。何せ我が婚約者殿は超有名人だし」
ぐ、と一瞬詰まる。それは確かにそうだ。
「いーから食べなよ。君のために作ったんだからさ」
「そぉよー。遠慮しなくていいのよ。しっかり食べて元気になってからまたお仕事しましょ」
口々に促され、椅子に座らされる。目の前の取り皿には湯気をたてる饅頭が盛られていた。
「……ありがとうございます」
促されるまま、皆を真似ておずおずと饅頭にかぶりつく。つるりとして光沢のある白い皮はやわらかく、ほのかに甘い。一口食べるなり結蓮は頬を染めた。
「おいしい……」

中には刻んだ蔬菜とごく少量の肉を味付けしたものがぎっしりと入っている。薄味なのに不思議と食が進んだ。

ひそかに感動する結蓮を見て、季隆が満足げに目を細める。

「そりゃよかった。作った甲斐があったよ」

「……？　御曹司どのがこれを？」

「そうだよ」

なんでもないことのようにうなずく彼を結蓮は驚いて見つめた。そういえば彼はそんな捨て台詞を吐いて出ていったが――。

「つましい生活送ってるもんだから、やりくり上手っていうか節約料理にはまっちゃったんだって。そのくせお腹空かせてる子を見たらほっとけないのよ。お母さんみたいよねー」

「誰がお母さんだ」

抗議する季隆の目は怒っていない。意外なところもあるものだと、結蓮は感心した。

「こんなにおいしいもの、初めて食べました。うちの従者たちにも食べさせてあげたい……」

「従者？」

「はい。子どもの頃から仕えてくれている者たちで……兄弟のようなもので」

温かい饅頭を両手で持ち、湯気ののぼるそれを見つめてつぶやく。

今はいない母が、娘を守れと命じて残していったという従者たち。この饅頭を持ち帰って与えたら、きっと狂喜乱舞することだろう。

「……優しい顔するんだね」

はたと我に返って顔をあげると、季隆が頬杖をついてこちらを見ていた。

そう言った彼のほうがよほど優しい目をしているのに気づき、結運は思わずどきりとする。

初めて見る表情だからだろうか。

「奥様、おかわりは？」

翡翠丸が無表情のまま訊いてきたので、結運ははっとして季隆から目をそらした。

「いただきます」

それにしても、奥様と呼ばれているということは翡翠丸も知っているのか。結運は小さくため息をつき、季隆だけに聞こえるよう声をひそめた。

「必要以上に私との結婚のことを言わないほうがいいのでは？」

「なんで？　別に隠すことじゃないだろ」

「あなたの心配をしているのです。豊家との縁談が破談になったと知れたら生活に支障をきたすのではと思って」

「ふーん。今までそういう例があったわけだ」

結運が言葉に詰まると、季隆はひそひそ話をする気は微塵もない様子で続けた。

「聞くところによると、君の祝言の夜になぜか必ず太子殿下が怪異騒ぎに遭われるらしいね。それで君は新婿をほっぽって宮城に駆けつけ、結果、破談になると。祝言の日くらいお役目を免除してもらえばいいのに」

ちょっと、と劉博士がたしなめるように口を挟む。だがこれには結蓮は堂々と答えた。
「そういうわけにはいきません。太子殿下より優先すべきことなどありませんから」
「豊家の体面より？」
またもや痛いところを突かれる。しかし、すぐに「そうです」とうなずいた。空気を読まずに翡翠丸が饅頭の皿を置いてくれたので、礼を言って手に取る。
「私だって、豊家の娘として一族の役に立ちたいという思いは持っています。持ち込まれた縁談を拒むつもりもありません。……でも時々、ここにいてはいけないような気がするのです。それで迷っているうちに婚礼の日を迎えてしまって……」
「で、太子殿下の怪異騒ぎが起こるってわけか。――君がお願いして起こしてもらってるわけじゃないんだよね？」
好奇心からの質問という感じで訊く彼を、結蓮はじろりと見やり、小さく息をついた。
「殿下は私を心配してくださっているだけです。畏れ多いことですが」
ふむ、と季隆は饅頭にかぶりつきながら相槌をうつ。何か考え込むように黙り込んだ。
「奥様、おかわりは？」
「いただきます」
翡翠丸が黙々と饅頭を取り皿に補充してくれる。季隆は饅頭をもぐもぐとやりながらそれを見ていたが、ふと目線を戻した。
「結婚をためらうのは、ほんとにそれだけが理由？」

「どういう意味でしょうか」
「いや、ひょっとして好きな男でもいるのかと思って」
結蓮は目を泳がせた。ずばり訊かれてみるみる頬に熱がのぼっていく。
「え……まさか、ほんとにいるの？」
「そ、そういうわけでは、ないのですが」
「うわ、照れてる……。ちょっと、お兄さんに聞かせてみなよ」
驚きとたじろぎの半々のような顔で季隆が身を乗り出す。劉博士も興味津々の様子だ。
結蓮は饅頭を手にしたままもじもじしていたが、観念して口を開いた。
「そうではなくて――憧れている恩人様です。お弟子にしてもらう約束をしているのですが、まだお迎えがこないので嫁いでしまうのが躊躇われるというか」
「恩人……？」
「はい。五年前、業焔に襲われた時に助けてくださった方で……。お名前も知らないのですが、まだお若いのに素晴らしい術師様でした。別れ際に飴玉だと冗談を仰って、練り辛子を山ほどくださって……。あの激辛の練り辛子の味は今でも覚えています」
「……」
「いつかお弟子としてお仕えするために呪禁道の勉強もしました。武の道もきわめようと修行にも行きました。虎の巣に入って戦ったり隣国まで山中を踏破したりという程度ですが……」
――室内には奇妙な沈黙が落ちていた。

劉博士と翡翠丸がそろりそろりと季隆に視線をやる。当の季隆はといえば饅頭片手に固まっていた。しかし照れ隠しに饅頭を食べまくる結蓮はそれに気付かない。

やがて、季隆がふっと息をはいた。

「……どこの馬の骨かもわからないやつを待ってるってこと？　五年も？」

「いけませんか」

「名前も知らないんだろ？　どんなやつかもわからないじゃないか。君を助けたのだってただの気まぐれで、本当はあくどい、ちんけなダメ術師かもしれないよ。恩人だなんて崇める価値があるのかな」

いつになく皮肉な色をにじませた彼の言葉に、結蓮は目を瞠った。

尊敬する憧れの人を貶されてカッと頭に血が上る。

「あの方のことを悪く言わないでください！」

思わず立ち上がっていた。目を丸くした季隆をにらみつける。

「あの時あの方に助けていただいたおかげで、私はこうして生きて殿下にお仕えできているのです。言葉に尽くせないくらいの恩人です。素晴らしい方に決まっています！」

あの人との約束をよすがにして生きてきた。いつか会える日まで己を磨いて待っていようと――伯母がいなくなり、太子と会う機会もなくなり、屋敷に閉じこめられるようになった日々の中でそれだけが希望だったのだ。

呆気にとられた顔をしていた季隆が、ふと苦笑をこぼした。

「はは……。ありがとね、お嬢ちゃん」
「――？　なぜあなたがお礼を？」
彼はごまかすように咳払いした。
「……じゃあさ、今その人に会えたらどうする？」
思いがけない問いに、饅頭を口に運ぼうとしていた結蓮は手を止める。
（もし、会えたら……？）
その日を何度夢見たことだろう。あの時のお礼も言いたいし話したいこともたくさんある。なぜか、どうしても彼の顔が思い出せないのだ。あの時確かに目に焼き付けたはずなのに、結蓮の恩人は思い出の中でぼんやりとした輪郭だけの存在になってしまった。
それでも好きなことには変わりはない。実際に会えたら感動のあまり何も言えないかもしれない。今だって、想像しただけでこんなにも胸が詰まって苦しい――。
「ど、どうしたっ」
季隆が驚いたように腰を浮かせる。彼の視線から、結蓮は自分が涙を浮かべていたことに気づいた。急いでぬぐい、表情を消す。
「……すみません。感極まってしまいました」
「奥様、おかわりは」
「いただきます」
「ちょ――何個目だそれ!?」

季隆が目をむいて叫んだので、結蓮はきょとんとして自分の取り皿を見おろした。うずたかく山になっている饅頭は、せいぜい十個ほどだろうか。

「ここにある分は十個程度のようですが、四度ほど補充しましたので――」

「四十個!?　どんな胃袋してんだ！」

「はっ。胃袋の強度は人並みだと自負しておりますが」

「どこがだよ!?　ちょ、やめてっ、さっきの冗談だから！　はち切れるくらい食べろって言ったの、あれ上官命令とかじゃないから！」

慌てふためく季隆の取り皿には、まだ一皿目の饅頭が残っている。結蓮ははっとして頭をさげた。

「申し訳ありません！　上官どのの分まで食してしまうなんて、なんとお詫びをすればいいか……！」

「いや怒ってないから。超絶びっくりしてるだけだからね！　ていうか、大丈夫なの？　そんだけ食って平然としてるけど……」

呆然とした顔で見つめられ、結蓮はあらためて自身の取り皿を見やる。そういえばこんなに食べたのは久しぶりだった。ここ数日、ほとんど食べ物を受け付けなかったのを思い出し、かしこまって一礼する。

「はっ。御曹司どののお饅頭が大変美味でしたので、手が止まりませんでした」

「……あ、そう……」

喜んでいいのかどうかと彼は微妙な顔つきで黙り込む。
脇の卓子から次の饅頭の山を運んできた翡翠丸が、冷めた目つきのまま口をはさんだ。
「奥様、大丈夫っすよ。若さんはこれくらいでカリカリするお人じゃないっすから。そもそもその恩人というのが若さんで――むぐ」
いきなり饅頭を口に突っ込まれ、翡翠丸が無表情のまま固まった。季隆がさりげなく腰をあげる。
「まったくおまえは、急いで食うから喉に詰まらせるんだよ。どれ、水を持ってきてやろう」
「いえ、それならば私が」
上官を動かすわけにはいかない。結蓮はすかさず立ち上がると、急いで封陰省の本庁のほうへと走った。
――しかし、季隆が無理やり饅頭を突っ込んだように見えたのは気のせいだろうか？

結蓮が出ていくのを見送ると、劉博士は怪訝そうに視線を戻した。
「なんで言わないの？　名乗ってあげたらいいじゃない」
はあ、と季隆はため息をつく。その表情は少々やつれていた。
「言えるわけないだろ。俺はあの子が夢見てるような聖人様じゃないっての」
「……まあ、夢を壊しても可哀相だしね……」

憐れみを浮かべた劉博士の言葉は、はたしてどちらに同情しているのだろう。

「けど――言えないのはほんとにそれだけが理由？」

たしなめるような目つきで訊かれ、季隆はしばし沈黙したが、「さあな」とはぐらかした。翡翠丸の口に詰まった饅頭を取ってやり、扉のほうへ目をやる。

久々の再会を懐かしく思っていたし、名乗ろうと思わなかったわけではない。しかし再会時にあんな態度をとられ、以降白い目でたびたび見られるようになってはとても言い出せなくなってしまったのだ。しかも彼女のほうはてんでこちらのことを忘れているようだったのに。

（……あの子、そんなふうに思ってたのか……）

上官である自分に従いつつも、時折冷たい視線やそっけない言葉を投げてくる彼女。なのに一方では、泣きそうなほど恩人を慕っているらしい――。

（間違えて練り辛子渡したのに……あれ食べちゃったのかよ……）

そんなところでも責任を感じ、こめかみを冷や汗がつたっていく。

季隆は奇しくも当の部下と同じことをつぶやいた。

「なんか、やりづらくなってきたぞ……」

昼食を終えると、結蓮は季隆を引っ張って東宮府へと向かった。もちろん例の捜査続行のた

めだ。
「もうちょっと休ませてよ～。飯食ったら眠くなってきちゃったよ」
うだうだとぐずっている上官を結蓮はキッとにらみつける。
「何を悠長なことを仰っているのですか！　朝官たるもの、御上の危機には寝食を返上して励むのが当然の姿勢です」
「……いや、君はさっき寝食を満喫してたけど、俺は休んでないからね。君のために一心不乱に饅頭作ってたから」
恨めしげに言われ、結蓮は軽く眉をひそめる。しきりにあくびを連発する彼はどうやら本当に疲れているようだ。
「わかりました。では今日の捜査は私一人だけで行ってきます」
そこまで言うなら、と思って申し出たのだが、なぜか季隆は急に真面目な顔になった。
「一人はだめだ。俺も行くよ」
「でもお疲れなのでしょう？」
「封陰官は二人一組行動が原則だ。これからも絶対に一人で動くなよ。いいね」
その真摯な様子に、結蓮は面食らいながらもうなずく。上官にそこまで言われては固辞する理由はない。
内宮門をくぐって石畳の道を進む。まもなく桃花の季節ということで、近くの桃花園には気の早い見物客がちらほら見えていた。内宮と外宮の合間にあるこの桃花園は仕事の間をぬって

往来しやすいところなのだ。

そのまま東宮府へ向かおうとして、結蓮は見知った官吏の一行がやってくるのに気付いた。貴人と行き会った時は端へ下がって控えるのが鉄則だ。さっと礼をとる。

「誰だい？」

「范東宮太保ですよ」

高官同士なのに知らないのかと思ったが、彼は都に戻ったばかりだし、内宮と外宮は離れているから無理もないのかもしれない。

「ああ、あの人が。――この前の術師もいるな」

見れば、先日武器庫で出会った猩紅という呪禁師の姿がある。彼もこちらに気づいたらしく目を細めて会釈してきた。范太保と何か言葉をかわしているようだったが、やがて一行はぞろぞろとこちらにやってきた。

「豊舎人。こんなところで会うとは珍しいな。太子殿下の御用かね」

歌うような抑揚で言われ、結蓮はかしこまって答えた。

「はっ。封陰省の任務中です」

「ああ、そうそう。なんでも柚梨軍から出向になったそうだが……貴女にかぎって失策でもないだろうに、気の毒なことだ」

范太保の知的な面立ちに薄い笑みが浮かぶ。今思い出したようなそぶりだが、東宮府の人事を司っている彼が知らなかったわけがない。だが結蓮は素知らぬ顔でそれを受け流した。彼が

皮肉屋なのも、自分に好感情を持っていないのも知っている。
「このようなことでは豊老公もお嘆きだろう。ただでさえ何度も縁談が破れているというのに。一日も早く柚梨軍に戻れるとよいな」
「さっすっが、范太保～！　一武官にすぎない豊舎人の身をそこまで案じておいでとは、なんという懐の深い御方でありましょうかっ。いやまったく、高官たるものこうでなくては～！」
今日も腰巾着――もとい孔少保は騒々しい。結蓮は気にせず一礼した。
「おそれいります、范太保。――今日は何か西宮に御用でいらっしゃいましたか」
何気なく訊ねたのは、彼らが西宮のほうから歩いてきたのがわかったからだった。
西宮は東宮と対の場所にあるが、こちらと違って寂しいところだ。現在住んでいるのは太子の兄である琇有だけだし、范太保がわざわざ彼に会いにいくとも思えない。ただ見事な桃花園があるから早めの花見にでも行ったのだろうかと、世間話のつもりだった。
「ああ……、いや、特に用はないのだが――」
「太保、そろそろ参りませんと」
従者らしき男が口をはさむ。やけに恰幅のよい男で、そのせいかやたら汗をかいていた。
「見苦しい。顔を拭わぬか、史平」
范太保は顰め面で叱咤すると、こちらには悠然と笑みを向けて踵を返す。一行の最後にいた猩紅が軽く拱手して彼らに続いた。
面を伏せてそれを見送っていた結蓮は、ふと顔をあげる。

（また、あの臭い……）

だがその瞬間、臭いは消えてしまった。風に流されてしまったのか、それともやはり気のせいか――。

「言い返さないんだね」

季隆の声に、結蓮は我に返った。気を取り直して石畳を歩き出す。

「何がですか？　范太保はお優しい言葉をかけてくださっただけですよ」

「明らかに嫌味だろ、さっきの」

「心の声まで読み取って噛みつくほど暇ではありませんから」

皮肉や嫌味や世辞をいちいち気にしていたらきりがない。聞き流すにかぎる。

ふうん、と感心したようにつぶやく季隆に構わず、結蓮は先を急いだ。

その日は各官舎をまわって体調不良の者がいないかを調べ、ついでに例の手つなぎ捜査を行って一日が終わった。官吏は午後には家路についてしまうため、それと同時に結蓮たちの捜査も止まってしまうのだ。

細かい調べものをして東宮府を出ると、あたりはもう夕暮れ時だった。

「あ～、しんどいわ。早く帰って甘酒と砂糖菓子食べまくってごろごろしたい」

げんなりした様子でだらだら歩く季隆を、結蓮はきりっと振り返る。

「そんな暇はありません。ここまで業焔の気配がつかめない以上、こちらから仕掛けるべきです。夜通し皇城を巡回したり――」
「無理無理無理！　そんなんしたら俺過労死するって。なんなの、なんでそんなに元気なの」
「元気云々の問題ではありません。朝官たるもの、死に瀕してでも御上のために働くのが当然のことです」
「熱いなぁほんとに……どんだけ戦闘態勢整えてんの。いつも完全装備だし……」
呆れたような顔で季隆は言い、ふと結蓮の腰の太刀に目をやった。
「……そういえばその太刀、猩紅も言ってたけど立派だよね。お祖父様にもらったの？」
「いえ、母の形見です」
「形見？　それ任務に使っちゃっていいのか」
結蓮は思わず太刀の柄に手をそえる。
「以前に使っていたものは――祖父に贈られたものですが、壊れてしまったので」
「壊れた？」
季隆が頓狂な声をあげた。何事かと不思議に思って見ると、彼はごまかすように少し笑って太刀に視線を戻した。
「人を斬ったことは？」
何気ないふうの問いに、結蓮も表情を消して答える。
「あります。時々、春明殿に狼藉者が出没しますから」

——初めて斬った日の夜は、眠れなかった。

狼藉者を誅したことはまったく後悔していない。同じことが起きれば迷いなく賊を斬り伏せるだろうし、それが当然の義務だと思っている。けれどあの衝撃はきっとずっと忘れることはないだろうとも思う。感触も悲鳴も、はっきりと思い出せる。

と、ふいにぽんと頭を叩かれ、結蓮は驚いて顔をあげた。

誰かにこんなことをされるなんて油断した、と思いながら見上げると、別人のように静かな目をして季隆がじっと見つめていた。

「そうか。頑張ってるんだな。——嫌なこと訊いてごめんね」

「……いえ」

短く答え、結蓮はさりげなく彼の手から逃れた。のらりくらりした言動に冷たい視線を向けていたところだというのに、急にこんなことをされては反応に困ってしまう。

いつもの顔に戻った季隆が、軽く眉をひそめて扇子であおぐ。

「けどさ、そんなに強くなったところで、今の職務じゃ東宮府の警備がせいぜいだろ？　もう虎の巣穴修行はやめときなよ。嫁入り前なんだし」

「いえ、続けます」

「なんで⁉」

「もっと強くならなければ、大将軍の位を拝命できません。それでは殿下のことも国のことも守れませんから」

煌国禁軍の大将軍は五人のみ。武官に男女の差別はないとはいえ、今の結蓮では猛者ぞろいの彼らにはとても敵わないのが現実だ。かといってその下の将軍位で妥協することはできない。（それではだめだわ。殿下に立てた誓いを守るためには――）

「へえ、大将軍か。女の子なのにすごいな」

季隆のつぶやきに、結蓮ははたと我に返る。そしてすぐさま後悔した。

つい無意識のうちに訊かれるまま話してしまった。笑われるのがわかっているのに、どうして打ち明けてしまったのだろう。

「ん？　どうした？」

季隆が不思議そうに瞬く。思わず凝視してしまった結蓮は、戸惑いながら口を開いた。

「……笑わないのですか？　女将軍を目指しているだなんて」

これまで何人の同僚に笑い飛ばされたことか。祖父に打ち明けた時はにべもなく却下されたし、琮成だって良い顔はしなかった。それなのに――。

きょとんとしていた季隆が、愉快そうに笑みを浮かべる。

「なんで？　恰好いいじゃん。君に合ってると思うけど」

「……」

――それなのに、どうして彼はこんなに素直に賛辞を送ってくれるのだろう？　なぜそんなにごく当たり前に話を聞いてくれるのだろうか。

お嬢ちゃん呼ばわりされて、一人前には見られていないのかと思っていた。だからこそ意外

すぎて——胸が熱くなった。

「でもさ、恩人の弟子になるとか言ってたよね。なのに女将軍も目指してるの？　それはちょっと矛盾してないか？」

怪訝そうな顔で訊かれ、結蓮は急いで浮ついた気持ちを顔から追い出した。

「いえ、矛盾はしていません。お弟子になった上で大将軍を目指しますから」

「……けど、その恩人が朝廷をやめて自分についてこいとか言い出したらどうするの。どっちか選ばなきゃいけないだろ？」

「あの方はそんな無体なことは仰いません。第一、私があの方に弟子入りしたいのは強くなりたいからです。殿下をお守りする術を学びたいのであって、双方の目指すところは同じです。つまり矛盾もないということです」

ふーん、と季隆が心なしか面白くなさそうにぼやいた。

「なるほどね。……恩人様は太子殿下にちょっと負けてるのか」

赤く焼けていた空に徐々に夜の帳が降り始める。東の空はすでに紺碧に変わり、星がきらめいていた。足下すら薄暗く沈んでよく見えないほどの、夕闇。

「……逢魔が時だな」

ぽつりと季隆がつぶやく。

朝廷はその名のごとく早朝から動き始め、午後には機能が止まる。もちろん例外はあるが、ほとんどの官府は夜には門を閉ざしてしまう。当然この時間はどこの建物も明かりはなく、

黒々とした影が暮れていく空に浮かび上がっていた。
しんと静まりかえる中、ざり、ざり、と石畳を歩く音だけが響く。宮城の中やその周辺であれば夜通し篝火が焚かれ武官らが行き交っているのだが、この官街には二人以外に人影はなく、完全に眠りについていた。
――そんな中で忍ぶようについてくる足音に、気づかないわけがない。
二人は軽く視線をかわした。そのまま知らぬふりをして石畳を進む。つけてくるのが何者かはわからないが、発している殺気は痛いほど感じる。
官府の間に作られた庭園へと出た時、それは一気に暴発した。ひそめていた気配を解き放ち、足音も荒く二人を取り囲んだのは、黒い頭巾で顔を隠した男たちだった。
「――何者か！」
太刀に手をやり、身構えながら結蓮は一喝した。目で数えた相手方は十人ほど。手に手に武器を持っているのを見て、こちらも太刀を抜く。
「御曹司どの、私の後ろにいてください！」
どう見ても腕力に乏しそうなのを心配して指示するが、隣からは楽しげな声が返ってきた。
「何言ってんの。妻を一人で戦わせるわけないだろ」
「ですがっ」
まだ妻じゃないという訂正を入れる間もなく、黒頭巾らが一斉に躍りかかってくる。襲いかかる刃を受け流し、季隆の服をつかんで輪の外へ出ると、結蓮は再び構えなおした。そこへ一

人がすかさず斬りかかってくる。

「――！」

受け止めた刃が、ギィン！　と冷たく鳴いた。鍔ぜりあいの力は殺気を宿して凄まじいものがある。だが力だけならこちらも負ける気はない。渾身の力をこめると、相手はずるずると後退していく。そのまま押し切り、相手が体勢を崩したところに斬りつけた。

「ぐっ……！」

腕を斬られた男が呻き声をもらす。その隙に別の男が襲いかかってきたが、今度は組み合うまでもなく、かわして背後から肩に斬り下ろす。悲鳴をあげて後退していくのを見届け、結蓮は暗がりに目を走らせた。

（暗くてよく見えない……！　あの人は!?）

日が完全に落ち闇が支配するこの庭園では、明らかに黒頭巾らが有利だった。どこから攻撃が飛びかかってくるかわからない上、季隆の姿も見当たらない。結蓮の額に汗がにじむ。

その時、突然ボッと音がしてあたりが赤く照らされた。

「――!?」

結蓮だけでなく、黒頭巾らも驚いたように棒立ちになる。

庭園にはいつの間にか大きな篝火が二つ灯り、赤々と炎をくゆらす中、季隆が松の木の下で懐剣を手にしていた。彼の前、空中には燐光を放つ朱色の文字が浮かび上がっている。

「お嬢ちゃん、下がれ！」

声が飛ぶと同時に、結蓮は咄嗟に脇へ走った。彼が何か術をするつもりだと直感的に思ったからだ。

空へと構えた抜き身の懐剣を、季隆はたじろいでいる黒頭巾たちのほうへと振り下ろす。

「参上せよ！　天峰山十二坊翠少将――翡翠丸!!」

カッとまばゆい閃光が走った。

突風が巻き起こり、咲いたばかりの桃の花びらを散らす。

「――お呼びでしょうか。若さん」

透きとおった、どこか無感動な声が響く。

月がのぼった天空に浮かぶ人影を、結蓮は呆然と見上げた。

（え……翡翠丸どの？）

見慣れた従者の少年は、しかし煌とは様式の異なる衣服を身につけており、その背中からは黒い大きな翼が生えている。明らかに人ではありえなかった。

結蓮の反応を見て少し笑い、季隆が嬉々として命じる。

「あの黒いやつらを懲らしめてやれ！」

「御意」

彼はこくりとうなずき、翼をはためかせる。壮絶な突風が巻き起こった。竜巻のようなそれは黒頭巾らを容赦なく取り込み、悲鳴とともに上空へと巻き上げていく。

やがて声は遠くなり、あたりは静かになった。

「すごい……」

結蓮は思わずつぶやいた。使い魔の威力も、それを軽々と呼び出した季隆も。

呆然としたまま松の木を見れば、季隆がにこっと笑みを返してくる。

（あれが〈神憑きの太刀〉……？　この人、実はすごい人なの――？）

そう思った時、彼がはっと顔を強ばらせたのが見えた。

「後ろだ！」

背後から殺気がほとばしる。結蓮は振り返りざま、なんとか相手の斬撃を受け止めた。だが体勢が崩れていたせいでわずかに押し負ける。砂を掻いた靴の裏が、ざりりっと鳴った。

（一人残っていたか！）

篝火に照らされた男の腕は黒く濡れている。最初に斬りつけた男のようだ。戦意を喪失するどころか憎しみを倍増させたかのような気配を感じる。

「伏せてろ！」

叫びが聞こえると同時に背後から何かが飛んできた。それは結蓮と斬り結んでいた男の顔面に当たり、男が怯んだようにたたらを踏む。季隆が目くらましをしてくれたのだ、と気づいた瞬間――。

「――ッ！」

退いた男に容赦なく腹を蹴りつけられ、結蓮はたまらず身体を折り曲げた。鎧のおかげでさほど痛みはなかったものの、さすがに体勢が崩れる。



だが男はそれ以上攻撃してはこなかった。相当の痛手を負ったらしく、逃げるのを優先したようで、慌ただしい足音が遠ざかっていく。

（……今の……もしかして……）

膝をついたまま、結蓮は懸命に記憶をたどった。以前、これと同じようなことがあった気がする――。

ふっと、篝火が消えた。

驚いて見ると、季隆が松の木の幹にもたれるようにして倒れている。

「御曹司どの！　お怪我を？」

急いで駆け寄って助け起こすと、袖をまくった彼の腕からは血が流れていた。へらへらと笑っているが、その目には力が感じられない。

「違う違う……、術を使う時に、ちょっと、ね。それより、君は大丈夫か？」

「はい。ですが――逃げられました」

今からでも追おうと思えばできるだろう。だが、こんなに蒼白な顔で脂汗まで浮かべている人をとても放ってはいけない。

「翡翠丸、追ってくれ。捕らえなくていい、どこの邸に入ったか見届けてから帰ってこい」

「御曹司どの、苦しいのですか」

命じる声は息も絶え絶えで、今にも死んでしまいそうに見える。急にどうしてしまったのだろうと狼狽する結蓮に、翡翠丸が冷めた顔で言った。

「もともとひ弱で体力がないんすよ。この人坊々なんで。ちょっと無理するとこれですわ」
「余計なこと言うな」
力なく反駁した彼は浅い呼吸をしている。翡翠丸が立ち上がり、翼をはためかせた。
「奥様、若さんをお頼みいたします」
そう言って彼は空へ飛び立っていく。——ひらり、と黒い羽根が舞い落ちてきた。
季隆を抱きかかえたまま、結蓮はそっとそれをつかまえる。
「……烏……？」
黒い翼は、紺碧の夜に溶けてすぐに見えなくなった。

第三章　鬼娘の事情

目が覚めた時、部屋は青白い月光の陰にしずんでいた。
少しかび臭い空気、静まりかえった室内。寝心地は——良くはないが、覚えがある。
（書庫か）
正確には、書庫の『怠け部屋』の寝台だ。
おそらく結蓮が運んでくれたのだろう。起き上がって周囲を見ると、きっちりと設えられた寝床といい、卓子に置かれた水差しと杯といい、細やかな気配りがちりばめられていた。術のために切りつけた腕は丁寧に包帯が巻かれている。季隆は思わず口元をゆるめた。
生真面目で冷静で、でも実は負けん気が強く、太子のことになるとやたら熱くなる。冷たい言葉をあびせられるのもしばしばだが、こういう几帳面な一面を見せられると、本当は優しい娘なのだろうなと思う。それでもって稀に見る美人で、ありえない大食いときた。
「面白すぎるよなぁ……」
ひとしきり一人で笑ってみたが、包帯の巻かれた腕を見ていたら現実を思い出してしまった。
（……笑ってる場合じゃねーか）

寝台を出て窓辺へ寄る。差し込む月光にかざすように掌を広げ、じっと見下ろした。
会得した神通力はやはりかなり落ちている。先刻の戦闘ではそれを思い知らされた。
『おまえの力は復讐のためのものではない――』
いつになく神妙だった師の言葉がよみがえる。
今さら無くなったものを悔やんでも仕方がない。これでやっていくしかないのだ。
気を取り直して窓辺を離れると、隣の書庫に明かりが灯っているのに気付いた。劉博士が残っているのだろうか。封陰省は夜でも人を置いているので、自分の代わりに宿直を務めているのかもしれない。
（あの子は――家に帰ったのかな）
何しろ豊家のご令嬢だ。外泊などもってのほか、というところかもしれない。
勝手にそう納得して、もう一寝入りするかと寝台に戻ろうとした時だった。
かたん、とひそやかな音がして、部屋の扉が開いた。
すべりこむようにして人影が入ってくる。人目を忍ぶように外のほうを見ていた彼女は、扉を閉めて室内に目を戻し、少し驚いた顔をした。
驚いたのは季隆も同じだった。まさか彼女が――結蓮が戻ってくるとは思わなかったのだ。しかも気のせいでなければ酒の匂いがぷんぷんしている。
「――こらこら。旦那様をほっぽって自分だけ夜遊びかい？　悪い子だな」
彼女は無言でこちらを見つめている。冗談半分でたしなめながらも、看病してくれた礼を言

おうとした季隆は、怪訝に思って見つめ返した。

「……？　どうしたの」

いつもは完全武装なのに珍しく鎧の類をはずしている。それに違和感を覚えた時、ふいに彼女が身体を寄せてきた。

近づいてきた顔には嫣然とした笑みが浮かんでいる。赤い唇が妙に艶めかしい。

ぞくりとして目が離せなかった。結運がすがりつくようにして抱きついてきても——つま先立った彼女がそのまま躊躇いもなく唇を重ねてきても、動けなかった。

「……」

呆然とする季隆に、あでやかな笑みを見せて彼女は静かに部屋を出ていく。

しっとりとした甘い香りに包まれ、季隆はその場に立ちつくした。

夜が明けて小部屋へ入った結運は少なからず驚いた。

てっきりまだ爆睡中だろうと思ったのに、寝台にあぐらをかいた季隆は何やら難しい顔で考え込んでいたのだ。

「おはようございます。早起きでいらっしゃるのですね。お加減はいかがですか？」

「……」

季隆がなんともいえない顔つきで、じぃっとこちらを見る。寝ぼけているのかと結蓮が眉をひそめると、彼はおもむろに寝台から下りてきた。

「その――昨夜のことなんだけどさ……」

やけに言いにくそうに切り出したと思ったら、そのことを気にしていたらしい。結蓮は静かにうなずいた。

「看病の件なら礼は不要です。病人や怪我人を助けるのは人として当然のことですから」

「……そうじゃなくて。いや、でも、ありがとね。それで――」

「では、苦情ですか？　確かに本来ならご自宅に運ぶべきだったのでしょうが、あいにく私はあなたのお宅を知りませんし、こちらのほうが近かったので……」

「いや、だから、そっちじゃなくて」

どうにも話がかみ合わない。結蓮は不審に思って季隆を見つめたが、彼のほうも何やら混乱している様子だ。すっと腕を伸ばし、結蓮の背後の壁に手をついて、顔を寄せてきた。

「……御曹司どの？」

このままいけば顔と顔がぶつかってしまうというのに、彼はなおも近づけてくる。

結蓮はすっと目を細めると、すばやく小太刀を抜いて彼の鼻先に突きつけた。ぎょっとしたように目をむいた季隆に冷静に告げる。

「近すぎます。寝ぼけるのも大概にしてください」

「ご……、ごめんなさい」

ひくっと頬が引きつっている。少し乱暴な手口ではあったがようやく目が覚めたらしい。
「東宮府から朝食をいただいてきました。こちらに運んでもよろしいですか？」
「……お願いします……」
結蓮はうなずき、小太刀を収めて踵を返す。
部屋を出る間際、季隆が「どうなってんだ……」とうめいて頭を抱えたのが見えたが——まだ夢の続きでも見ているのだろうか。

卵粥で朝食をとる頃には、季隆はいつもの様子を取り戻していた。
「今朝方早く、翡翠丸が戻ってきた。例の黒頭巾は汴天同にある屋敷に入っていったらしい」
都の西のはずれにある街だ。確かあまり栄えているところではなかったはず。
「誰の屋敷です？」
「そこまではあいつにもわからないからね。これから調べないといけない。ただ気になるのは、その屋敷で額に紅玉の印をつけた長身の男を見たって言うんだよ」
結蓮は匙を止めた。その特徴のある男に、つい最近出会っている。
「あの呪禁師ですか？　武器庫で会った……確か、猩紅でしたか。昨夜の件に関係しているのでしょうか？」
「無関係ではないだろうな。襲撃したやつらと同じ屋敷にいたわけだから」

一つあくびをすると、眠そうな顔で季隆は粥をすすった。緊張感のない彼をよそに結蓮は椀を持ったまま考え込む。

思い出したのはあの獣の臭いだ。気のせいだろうかと思っていたが、そういえばあれを嗅いだ二度とも、猩紅がその場にいた時のことだった。

「隠形している時は、本来の臭いも消せるものなのでしょうか」

「……っていうと？」

結蓮が猩紅と例の臭いについて話すと、季隆は興味深そうな顔つきになった。

「臭いか……。化けるのが下手なやつならそういうこともあるだろうけど、それだととっくに尻尾を見せててもおかしくないしなぁ。周りの人だって気付くはずだ。それこそ范太保だって変に思うだろうし」

そう、猩紅は范太保の客人としてこの皇城に来ている。あやしい者を内宮へ引き入れるなんて、朝廷高官として許されることではない。それは太保も当然自覚しているはずだし、彼がそんなことをするとは思えない。

「念のため、范太保にお話ししたほうがいいでしょうか」

「いや、慎重にいこう。もし范太保も承知の上だったなら、罠にはまることになる」

「范太保が黒幕だと仰るのですか？　まさか……。太子殿下をお守りする東宮官ですよ」

「何事もまだわからないことだらけだってことさ。正面から行って手がかりを失ったら元も子もないだろ。まずは猩紅を洗おう」

意外に冷静な彼の言葉に、こちらも落ち着きを取り戻す。
「実はもう一つ気になることが。――昨夜の逃げた黒頭巾、身元に心当たりがあります」
「ほんとかい？」
こくりとうなずき、結蓮はそっと腹に手を当てた。
「以前柚梨軍にいた舎人で、胡祝榮という男です。演習の勝負で私に負けたのを逆恨みして、闇討ちをしかけてきたことがあります。昨夜の黒頭巾はその時と同じ手口でした」
「闇討ちって……。さらっと言ったけど、大変なことじゃないか。大丈夫だったの？」
「もともと私に勝てないような腕前です。何人かかってこようと負けはしません。ただ、その憂さ晴らしに酒を飲み歩いて河でおぼれ、それが上層部に知れて柚梨軍を除籍されています。おそらくは私に対する逆恨みがさらに加速しているのでは」
啞然として聞いていた季隆が、はあ、とため息をつく。
「それがあの『河に浮かんでた』っていう噂に繋がってるわけか。まったく、その程度で逆恨みだなんて、君に勝てない理由がよくわかるな」
「私、祝榮を追ってみようと思います。もし猩紅が業焔だったとしたら、彼と一緒にいたというのは気になりますし。柚梨軍で調べれば住所もわかるはずですから」
七杯目の粥を食べ終えたところで、結蓮はあらたまって申し出た。心当たりがある以上放置しておくわけにはいかない。祝榮が自分への恨みで動いているとしたらなおさらだ。
「じゃあ柚梨軍へは劉博士を連れていって。俺はちょっと野暮用があるから。その後で合流し

て胡祝榮の家に行こう」
「わかりました」
そうと決まればのんびりしていられない。食器を片付けて立ち上がる。
彼の野暮用というのが少し気になったが、そこまで突っ込むのは部下の立ち入る範疇を超えたものかもしれないと思い直し、結蓮は急いで小部屋を後にした。

春明殿の一室は、しんと静まりかえっていた。
清涼感のある香が焚かれ、あたりを払うような澄んだ空気がただよう。これも太子を守る結界の一つだ。
「お目にかかれて光栄でございます、太子殿下」
その香を持ち込んだのは例の封陰省次官、橘季隆だった。結蓮の四人目の縁談相手とやらだ。
一礼する彼を壇上から見下ろし、琮成は冷静に命じる。
「面をあげよ。そなたも暇ではないだろうからな。無闇に引き留めるのは気が引ける」
「畏れ多いお言葉です。しかしながら私も殿下と個人的にお話ししたいと思っていましたので」
言われるままに顔をあげ、季隆がにこりと笑う。太子に対してこういうふうにものを言う者

はあまりいない。琮成はむすりとしたまま話を続けた。
「そなた、璉の出だと言ったな。歳はいくつだ」
「今年で二十二でございます」
「その若さで封陰省の次官か。しかし、次官は確か他の者が務めていたはずだが？」
「前任は国元に帰ってしまいましたので、私が急遽任命されました」
笑顔で答えている季隆は、これが身上調査であるとわかっているのだろうか。どうにもつかみどころのない態度に少々苛立ちながら、琮成は質問を続ける。
故郷を出て煌へ来たのはいつか。封陰省に入って以降、どこでどんな任務をしていたのか。いつごろ都を離れ、いつごろ戻ってきたのか――。
一通り質問を終え、経歴や人となりを見たところ、出世欲や権力欲に固まっているという感じはしなかった。しかしこちらの本題に入る前にもう少し相手の出方を見ておきたい。そう考え、さりげなさを装って促してやる。
「それで、個人的に話したかったこととはなんだ？」
すると季隆は待ってましたとばかりに口を開いた。
「では、おそれながら申し上げます。龍神の加護を受けておられる殿下には、生まれついての異能力がおありだと聞きましたが、それはどういったものなのでございましょう」
「微弱なものだ。そなたら呪禁師のように悪鬼妖怪を退治できるような力ではない。せいぜいが〝随身〟を使うくらいのものだ」

そう言った琮成の後ろから、まったく同じ姿をした若者がすっと現れる。季隆が感嘆したようにそれを見た。

「これは素晴らしい。どういった幻術なのです？」

「さあな」

そっけなく一蹴し、琮成は軽く手を振った。分身が音もなく姿を消す。

「聞きたいのはそれだけか？　そもそもなぜそんなことを訊く」

「封陰官として興味がありまして。――異能力は皇族の皆様もお持ちだとか？」

「程度の差はあるがな。だいたい二十歳をすぎる頃から薄れていくが」

「では、ここ五年ほどの間で特に能力が高かった方はどなたでしょうか？」

季隆は笑顔のまま矢継ぎ早に問いを繰り出してくる。一見すると人当たりの好さそうな笑みだったが、琮成はかすかに不審を覚えた。

「……特に高かったといえば、琇有兄上と崇怜兄上か」

「琇有様と仰いますと、太子殿下の同母の兄君でいらっしゃいますね」

「ああ。昔は呪禁師になるため修行をしていたほどだ」

「呪禁師に……？　それはまた、お珍しいと言いますか……」

驚いた顔をした季隆に、琮成は軽く鼻を鳴らして一瞥した。

「太子以外の皇子の行く末など決まっているからな。崇怜兄上のように王に封ぜられて地方の所領を治めるしかない。その点、琇有兄上は変わり種だったが、それも一つの生き方だろう。

能力を生かせるのだから悪くない選択だった」

「さようでございますね。確かに」

微笑んでうなずく季隆を琮成はじっと見下ろす。もしや、彼のほうも身上調査をしているのか。そうであるならなぜ兄たちのことを訊きたがるのか。

「話はそれで終わりか？」

「ではもう一つ。――結蓮嬢のことについてお訊ねします」

琮成は無表情を装って視線を返す。――先に相手のほうが本題に入ったか。

「申してみよ」

「では申し上げます。結蓮嬢の婚礼を毎回阻止されているのは、どのような意図あってのことなのでしょうか？」

「なんのことだ」

「おや、これは私の勘違いだったのでしょうか。殿下は結蓮嬢を望まない結婚から救うために御自ら怪異騒ぎを起こしておいでだと思っていましたが」

季隆は唇に薄く笑みを浮かべている。琮成は彼のことを心得違いをしていたと気付いた。ただの空気が読めない留学生ではない、こいつはかなりの曲者だ。

ならば建前で話すことはないだろう。冷ややかに視線を凍らせて見据える。

「意図など決まっている。結蓮をくだらない男どもにくれてやりたくないからだ。結蓮本人には拒めないから代わりに阻止してやっているだけだ」



良家の娘として生まれたからには親の決めた相手との縁談は当然のこと、というのが世間の常識だ。しかし国一番の権力者と言ってもいい豊家の娘となると、その縁談にはいろいろときな臭い思惑がつきまとってくる。

「なるほど。くだらない男……ですか」

くすりと季隆が笑う。琮成はすっと目を鋭くすると、傍らに置いていた小さな玉をつかみ、中空へと放り投げた。

途端、明るい色彩にいろどられていた奥の間は、真っ黒な暗闇に落ちる。

「そうだ。結蓮を富と権力を得る道具にしか見ていない、強欲で愚かな男どもにな」

やがて暗闇の中から青い燐光が無数に生まれ、おびただしい数の蝶となって飛び立っていく。部屋を埋め尽くすようなそれは、美しいというよりも禍々しさを感じさせるものだった。明らかにこの世のものではない光景だ。

「――おまえもだ、橘季隆とやら。結蓮との縁談を辞退せよ」

驚いたように周囲を見ている彼に、琮成は冷ややかに命じた。

蝶の照らす燐光の下で、今度は季隆の座っている床が端からがらがらと崩れていく。奈落の底へ引きずり込まれるような、見ているだけでも恐ろしい光景だ。

興味深げに見回した季隆は、帯に差していた扇子をおもむろに抜くと、ぱちんと鳴らした。

その瞬間、まぼろしはかき消え、元の奥の間の風景に戻ってしまう。

（何……!?）

いともあっさりと幻術を破られて愕然とする琮成に、彼は不思議な笑みをたたえたまま見つめてきた。

「そんなにお好きなら、もっと別の方法で庇ってさしあげたらいかがです。殿下」

「……なんだと」

「おそれながら殿下も豊老公も、結蓮嬢が武官を続けることには反対のご様子。そのわりに妖怪退治の任務を与えておいでのようですが」

「あれは本意ではない。私のためだと言っているが、やめさせるつもりだ。これ以上危険なことは――」

「武官を続けるのも花嫁になるのもご不満でいらっしゃる――彼女が選ぶことのできる道は多くないというのに、殿下のなさりようは酷だとお思いになりませんか」

一瞬、琮成は詰まった。自分の行動が――酷だと？

「彼女の望む道を否定し、ご自分の望む在り方を押しつけようとなさっている。武官である彼女に危険なことをするなと求めるのは、そういうことでは？」

口元に笑みをたたえて静かに指摘した季隆を、琮成は唖然として見つめ返す。無礼だと怒るよりもまず、驚きに圧倒されていた。

（危険に遭わせたくないと思うのは当然ではないか。望まぬ結婚を阻止してやることも、何が悪いのだ？　結蓮には静かで安穏とした生活を送ってほしいと望むのが、なぜいけない……）

そこまで考えて、はっと息を呑む。

静かで安穏とした生活、それは結蓮の望むこととは違う。彼女の望みは太子のため国のために身命を賭して仕えることだ。もう耳にたこができるほど何度も聞いている。

（こいつ……！）

琮成は季隆をにらみつけた。自分のほうが結蓮をわかっているとでも言いたいのか。許嫁面して一丁前に太子に説教とは、いい度胸だ。

内心歯噛みしているのがわかったのかどうか、季隆は軽く目を細めて笑った。

「四度目の婚礼の夜は邪魔をしないでくださいますよう。お願いいたします、殿下」

颯爽と客人が帰っていった後。随分と長い間黙り込んでいた太子がようやく口を開いた。

「――秦少傅」

「はい、殿下」

「あの術師……どうにかして懲らしめてやりたいが、手段を思いつかない」

仏頂面でつぶやく太子に、秦少傅は苦笑をもらした。

「懲らしめるも何も、彼は罪を犯したわけではございませんよ」

「わかっている。だが気にくわないんだ」

「殿下――」

「あんなへらへらした頼りなさそうなやつに結蓮を任せられるか。絶対に阻止してやる」

知的な目見をしかめ、琮成はぶつぶつとつぶやいている。生まれながらの皇太子として重責を負って育ってきた彼は大人びたところがあったが、幼い頃から知る秦少傅にはこういう一面も見せることがあった。

「阻止すると仰せになられても、またすぐに豊老公は次の婿がねを探してこられるのではございませんか？　これまでの方々に比べれば、ご気性は良いように私は思いますよ」

秦少傅の言葉に、琮成はますます不機嫌な顔になった。実は自身でも思うところがあったのかもしれない。ふんと鼻を鳴らした。

「腹が空いた。先日結蓮が買ってきた菓子を持ってまいれ」

ふてくされたように命じる若き主に、秦少傅は「かしこまりました」と微笑んで一礼した。

太子の機嫌を茶菓子でなだめると、秦少傅は所用を済ませるため東宮府へと向かった。

東宮府の三次官の一人でもある彼は、こちらに専用の執務室を持っている。中庭を囲む回廊形式の官舎で、部下も数人いるのだが、普段は太子の傍についているのであまり使っていない。

今日は上官である蔡東宮太傅のもとへ呼ばれて行くことになっていた。同じように東宮三師も専用官舎を持っており、そちらに来るよう言われていたのだ。

廊を歩いていた官吏らが端へ寄って道を譲ってくれる。何気なくそれを見やりながら通り過

ぎた秦少傅は、ふと眉を寄せた。

（今のは……？）

しばらく歩いてから振り向いてみると、控えていた官吏たちがそれぞれまた歩き出したのが見えた。そのうちの一人が自分と同じほうへ歩いてくるのを見て、咄嗟に前に向き直る。

（彼は確か、豊舎人に夜襲をかけた咎で罷免されたはず……）

さりげなく近くの官舎に入った。後ろからきた彼が廊を通り過ぎていくのを確認し、再び自身も廊に出る。

思い出した。名前は確か——胡祝榮だ。

（他人のそら似だろうか？　それにしてもよく似ている）

元東宮近衛とはいえ、豊家の娘を襲った罪で首になった男が気軽に東宮府を歩けるわけがない。疑念が浮かび、秦少傅はひそかに彼の後を追った。

男は周りを気にした様子でとある官舎に入っていく。誰でもが入れるわけではない、高官の官舎だ。驚きながらもさらに後をつけた秦少傅は、男が奥の執務室へ入っていくのを見て息を呑んだ。

（どういうことだ？　まさか、あの方が——）

その時、いきなり背後から肩をつかまれた。

びくりと震えて振り向けば、そこにいたのは孔少保だった。

いつも揉み手しながら追従ばかり言っている彼が、細面に薄笑いを浮かべて見ている。

「……あまり、出過ぎないほうがよろしいですぞ？　秦少傅」
脅しのような言葉を吐くと、彼はすぐ踵を返して去っていった。
腰巾着でない時の彼は、なかなか迫力のある目つきをする人だったらしい。立ちすくんだまま見送った秦少傅のこめかみを冷や汗が伝う。
深入りせずに立ち去るべきか、少し迷う。しかし太子への忠誠と豊家への恩が足を先に進ませた。人の姿がないのを確認し、扉の傍に身を潜める。
「――ここへは来るなと言ったはずだぞ。人目についたらどうするのだ」
執務室の中からもれてくる声は苛立っていた。
「申し訳ありません。しかし、お話を聞いていただきたくて――例の豊結蓮のことで」
「帰れ。今は忙しいのだ。頼みのあやつも消えてしまって、おまえに構っているどころではない。しくじっておいてよくもおめおめと顔を出せたものだな」
そんな、と言いかける男に冷ややかな声がかぶさる。
「今夕、いつもの屋敷に来い。くれぐれもつけられるでないぞ。それまでは東宮府のどこかに隠れていろ。よいな」
ごくり、と秦少傅は喉を鳴らす。間違いない、彼があの男を飼っているのだ。しかも結蓮のことで何か密談をするつもりらしい。『しくじっておいて』という言葉が不穏なものを連想させる。
確かめてみるべきだろうか。もしなんでもないことであれば笑い話にできる。だが、そうで

なかったら。

結蓮は太子にとって大切な人であるとともに、秦少傅にとっても幼い頃から知る主家の娘である。とても看過することはできない。

逡巡の末、一つ息をつくと扉を押し開いた。——東宮高官としての彼の良心を信じて。

それぞれ用を済ませて合流した結蓮と季隆は、調べた住所を訪ねるべく城下へおりた。

胡祝榮は現在、花街で用心棒のようなことをしているらしい。妓楼近くの借家で仲間数人と暮らしているとのことだった。

「花街に連れてきたなんて知れたら、さすがに君のお祖父様に張り倒されるだろうなー」

目抜き通りをぶらぶら歩きながら季隆がぼやく。昼間の花街は静かだったが、時折、路面にずらりと並ぶ妓楼の二階の花窓から妓女の甘く誘う声が落ちてくる。

「なぜですか？」

「だってここ、許嫁同伴でうろうろする場所じゃないだろ」

「私は別に気にしません。任務ですから」

結蓮はきびきびと答える。そんなことより胡祝榮の件で頭がいっぱいなのだ。

「いやー、俺は気にするよ。夫として君に責任があるし」

「まだ夫ではありません。そもそも本当に結婚するわけではないでしょう。契約なのですから」

「君がその気ならほんとに結婚してもいいんだけど？」

にやりと笑って肩に手を回してくる季隆を、ため息をついて見上げる。よくもそんな心にもない言葉がすらすら出てくるものだ。

（お祖父様はどうしてこんな人をお相手に選んだのかしら）

彼は明らかにこれまでの縁談相手とは違う。前の三人は三人とも、名家の出にふさわしい立派な身なりと態度をしていた。間違っても彼のようにだらしない恰好でふらふら人前に出たりはしなかった。

けれど一番違うのは実は中身なのかもしれない。結蓮を通して豊家の権力を見ていた三人の婚約者たちと違って、彼は「豊家ににらまれたくないから」とは言いつつも、ちゃんと結蓮自身を見てくれている――ような気がする。

（……さすがに、それは都合よく考えすぎかもしれないけれど……）

肩に回された彼の手をさっと払いつつも、そんなことを思ってしまう。

『恰好いいじゃん。君に合ってると思うけど』

そう言った時の彼の笑顔が頭から離れないのは、あの言葉がよほど嬉しかったからなのだろうか。それとも、嘘のない笑顔が珍しかったからか。――よくわからない。

突如、女のけたたましい声が響いたのはその時だった。

「あらっ、季さまじゃない!?」

道の向こうから若い女の集団がこちらを見ている。笑顔で駆けてきた彼女たちを何事かと結蓮が見ていると、隣で季隆が「ん？」と驚いたように声をあげた。

「おー、誰かと思ったら。紅鈴も紅雲も紅珠も紅琴も紅月も、みんな元気そうだな」

元気よぉー、と甘ったるい声が合唱する。すらすらと全員の名を呼んだ彼を結蓮は目を瞠って見た。どうやら馴染みの妓女たちらしいが――。

「ねえ季さま、またあのお札をくださいな」

「ずるーい、あたしも！」

「あたしにもくださいな、季さま」

「はいはい、みんなにあげるから。喧嘩しないでちゃんと並んでー」

妓女たちに取り囲まれた季隆が懐から取り出した霊符を配りはじめたので、結蓮はさらに驚いた。封陰省で作る霊符はそう簡単に売りさばいてはいけないはずだ。

「御曹司どの！　それは職務に反する行為では？」

「いーのいーの、困ってる人に渡るのが一番いいんだって」

代金をもらって上機嫌な季隆に、妓女たちは「季さま優しーい！」ときゃっきゃしながらまつわりついている。その光景はまさに、花街で華やかに遊ぶどこぞの若君様だ。

呆然としていた結蓮の目が、すっと冷ややかな光を帯びた。

「……お忙しそうなので、私は先に行きます。では」

「えっ。何その冷たい眼差し」
「それだけ女性のお名前を覚えられるのなら、そろそろ私の名も覚えていただきたいですね」
はからずも嫌みのような捨て台詞を投げると、ぽかんとする季隆を残して結蓮は足早に歩き出した。

「季さまー、あの方、誰なの？」
すごい勢いで歩いて行ってしまった結蓮を見送っていた季隆は、甘ったるい声に我に返る。腕にすがりついて見上げている妓女に笑みを返した。
「俺の許嫁だよ」
「まあ、ほんとう？　いやん、紅鈴妬いちゃう」
彼女は大げさに身をくねらせたが、ふと冷やかすような顔をした。
「でもいいの？　あの方にちゃんと言ったほうがいいんじゃない？　妓楼で遊び回ってるわけじゃなくて、霊障を見てやってるだけだって」
すかさず、他の妓女たちも我先にと割り込んでくる。
「いつもありがとー、季さま」
「姐さんたちもお礼言ってたわ」
「たまには遊んで帰ればいいのにー。いっぱいお礼しちゃうわよ？」

「何言ってんの、だめよ。許嫁様がいるんだもの。ねえ、なんならあたしが許嫁様にほんとのこと言ってあげましょうか？　誤解されて季さま可哀相」

かしましさに季隆は軽く苦笑した。

「いやー、けどそれ言っちゃうと逆に嘘くさいしなぁ。俺そんないい人だって思われてないし。言い訳にしか聞こえないだろ」

髪をかきあげてぼやく。それを伝えた時の結蓮のしらけた顔が目に浮かぶようだ。

「言い訳でも言わなくちゃだめよぉ。だってあの方、あたしたちにやきもち焼いてたじゃない。お気の毒よぉ」

「……は？　やきもちって……誰が？」

きょとんとする季隆に、妓女が痛烈な肘鉄を入れる。

「もぉ、鈍いのね。あの方が最後に言ったこと、あれって完全に拗ねてる発言だったでしょ～」

季隆を置き去りにした結蓮は、一人で胡祝榮の住所を訪ねた。しかしそこには誰もおらず、近所にも聞き込みをしてみたが手がかりはなかった。

（逃げられた……？　それとも隠れ家か何かを持っているのかしら）

祝榮らしき黒頭巾が昨夜入っていったという汴天同の屋敷は、今朝方、軍に依頼して調べに行ってもらった。しかしすでにもぬけの殻だったそうだ。

ならば猩紅のほうを探ろうと范太保に協力を頼んでいるが、まだ返答はない。

落胆しながら来た道を戻っていると、途中で土地神の廟を見つけた。

門をくぐると、真君廟と土地神廟の二つが並んでいる。ただ一人香をあげていた老婆が結蓮に気付き、頭をさげて出ていった。会釈を返した結蓮は、老婆が進香していたのが真君廟だけだと気付くと、足早に土地神廟に向かった。

社は閉じられ、中を見ることができない。結蓮は神妙に手を合わせた。

（ここの御神体も太刀なのかしら）

神を宿した太刀。その威力と神々しさは、昨夜の襲撃時にこの目でしっかりと見た。

季隆の言っていたように、業焔は太刀に封じられていた妖怪だったのだろうか。そして、己と同じように封じられていた妖怪を解神し、吸収してしまっているのだろうか。

ぎゅっと拳を握る。早く見つけ出さなければと気が焦るばかりで、実際には何もつかめていない。不安と焦りがこみあげてくる。

（業焔は必ず殿下をまた狙うはず。五年前と同じように……！）

今もどこかで虎視眈々と狙っているはずだ。龍神の末裔である琮成を吸収しようと――。

そんな恐ろしいことを考えていたからだろうか。それは突然やってきた。

「……っ！」

貧血のような立ちくらみ。堪えているうちに街の喧噪が遠のいていき、あたりに白い靄がたちこめていく。

やがてゆらぐようにして現れたのは幻想の世界だ。

翡翠と翠玉でできた木々や、黄玉や紅玉の花々。足下で揺れる青玉と瑠璃と紫水晶はまるで透きとおった水たまりのようだ。天から降る優しい光に照らされて、きらきらと輝いている。雲が敷き詰められたような白い世界。浮島を渡る橋までもが純白で、そこだけ月光が差している。はるか下を流れる水はどこまでも蒼く、吸い込まれそうなほど深い。

本当に吸い込まれてしまいそうだ。流れを見つめているうちにぐるりと視界が回る。

「――おや、これはいけない……」

近くのような遠くのような場所から声が聞こえた。

「お気を付けなさい。このままではあなたの世界に連れていかれてしまいますよ」

軽く後ろから肘を引かれる。途端、白い世界は霧散し――結蓮は足下から崩れ落ちた。

一方、妓女たちに別れを告げた季隆は、首をひねりながら小路を進んでいた。

（あの子が拗ねてる……？　拗ねてたのか、あれって？）

確かに機嫌は少々よろしくなかったようだが、単に妓女たちと戯れていることに白い目を向けているだけだと思っていた。

「……いや。ないな。ないないない」

拗ねられるほど懐かれていた覚えはないし、好かれることをした記憶もない。もちろん、できれば好かれたいとは思っているが、あの生真面目な娘にしてみれば自分のような男は軽蔑の対象だろう。

「恩人様とは真逆の人間だもんなぁ……」

そういうふうに仕向けたのは自分なのでまあ仕方がないのだが——などと思いながら何気なく小路沿いの土地神廟に目をやって、はっと息を呑んだ。

倒れている髪の長い武官——結蓮だ。その傍に立つ男が誰か気づき、季隆は顔色を変えた。

「おい！　そこで何してる！」

男が振り返る。額の紅玉がきらりと光った。

（猩紅……）

まさかこんなところで会おうとは。会いたかったのは事実だが、こんな場合は想定していなかった。

倒れた結蓮を抱き起こしてみると、ひどく顔色が悪い。脈も少し弱いようだ。

思わず嫌な汗が噴き出す。彼女を一人にした自分の責任だ。

「気を失っているだけですよ。だいぶ身体が弱っておられるようですね」

淡々とした猩紅の言葉に、深く息をつく。遠い記憶と重なって一瞬取り乱してしまった。

（違う。この娘は生きてる。……あの時とは違う）

自分に言い聞かせるようにして少し冷静さを取り戻すと、季隆は顔をあげる。
「あんたが何かしたのか？」
「まさか。たまたま通りかかったら武官様があちらに引き寄せられておられたので、引き戻しただけです」
「……」
「彼女の本性――あなたも知っているのですか？」
猩紅の細い目が興味深げに光を灯す。
季隆は表情を消して見上げていたが、ふっと口端をつりあげた。
「ああ、知ってるよ。こう見えて彼女、ありえない大食い娘なんだ。健康的で可愛いだろ？」
かわされたと気付いたのかどうか、猩紅は何も言わなかった。季隆は構わず彼女を背負いあげる。
一瞬、腕や肩の細さにどきりとした。いつもきびきびと動いて颯爽としているからだろうか、彼女がまだ十七歳の少女であることをつい忘れがちになる。
一応会釈をしてから廟を後にすると、猩紅の目が届かないあたりまで歩いてから季隆は足を止めた。懐剣を取り出し、鞘を払って中空に霊符を描く。
「――来い、翡翠丸！」
璉国で烏天狗と呼ばれる従者を呼び出すと、声を低く落とした。
「そこの真君廟にいる男をつけてくれ。額に紅玉の印があるやつだ」

「へい」
姿を陰に隠し、翡翠丸の気配が離れていく。
季隆は力をこめて結蓮を背負い直し、少し顔を引きつらせて振り向いた。
「お嬢ちゃん……どんだけ鎧着込んでんの。ひ弱な俺には結構きついぜ……」

夢の中で結蓮はあの日の光景を見ていた。
覚えているのは、広がった赤い血。そしてあの人が持っていた光を放つ翠色の玉――。
恐ろしい魔物から守ってくれた恩人〝翠玉の御使い様〟は、震える結蓮を抱いてずっと頭をなでてくれた。強いだけではなく、とても優しい、素晴らしい人。人の血が赤いということをその時まで知らなかった結蓮に、大丈夫だよと何度も言ってくれた。
別れ際、弟子にしてほしいと申し出て名前を尋ねた時も、笑ってうなずいてくれたのだ。
『次に会った時に教えてあげる。それまで元気でいるんだよ』
その約束にどれだけ心が勇気づけられたかわからない。
けれど、御使い様とはそこでお別れで――。
御使い様が踵を返した拍子に桃の花びらがひらひらと落ちてきて、思わず両掌で受け止めたら、顔をあげた時にはもう彼はいなかった。

あの日からずっと、彼は結蓮の心の支えだった。
なのに、どうしてもあの人の顔を思い出すことができない。
「……御使い様……」
悲しくて恋しくて、思わず名を呼ぶと、そっと額に掌がかぶさってきた。
よくわからないまま瞼を開ければ、誰かが優しい顔で見つめている。
「まだ眠っていていいよ」
温かいその声に導かれるように、結蓮はうなずいて瞼を閉じる。
額に当たる冷たい手は、あの日の御使い様のように結蓮を安心させてくれた。

再び閉じた瞼から、涙が一粒、頬をすべり落ちていく。
季隆はそれをぬぐってやると、結蓮が寝入ったのを確認し、静かに腰をあげた。
寝所を出て居室を抜け、回廊を廻って母屋へと入る。屋敷中に最高級品であろう調度や美術品が置かれているが、何か寒々しい空気のただよう豪邸だった。
豊家別宅——結蓮の自宅である。彼女は絢爛豪華な豊家本邸ではなく、こちらに一人で暮らしていた。
いや、正確には一人と数匹だ。
「ちい姫様はまだ眠っておいでですか」

足下からやけに落ち着き払った声がした。
見れば、せいぜい二、三歳ほどの男児が礼儀正しく手を組んで見上げている。まん丸な腹をした幼児体型だというのに大人のようにきちっと袍を着込み、髪も結って冠で留めているから大したものだ。
「えーと、確か、四郎だっけ」
「はい。婿君様」
「四郎、婿などと呼ぶなッ。こやつはちい姫を攫いにきた人攫いかもしれんぞ！」
けたたましく叫ぶ声にそちらを見れば、同じく袍を着込んだ幼児が顔を真っ赤にしてにらんでいる。四郎のほうと違う点といえば、なぜか槍を構えて敵意むきだしのところだ。
「んで、こっちは九郎だな」
「馴れ馴れしく呼ぶなッ」
「なんだよーいいだろー。俺も九番弟子で九郎だからさ、なんか親近感わくんだよなー」
「ぬううっ、やめいっ！　よしよしするな！　わしは子どもではないぞ！」
「あはは。短い短い」
ぶんぶんと槍を振り回す九郎だが、腕の長さがいかんせん足りず、季隆まで届いていない。それが悔しいらしくむきになっているのだが、そこがまた子どもっぽくて愛らしい。
彼らは結蓮に仕える家付きの従者だと名乗った。もちろん人間の幼児にそんなことができるわけがない。彼らは人ではないと季隆はすでに看破していた。幼児姿なのは、力が弱いためこ

の状態でしか変化が保てないからしい。

しかし初めはやはり驚いた。何しろ別宅の門をくぐろうとした途端、威勢のいい幼児が槍を構えて突進してきて、中へ入れさせまいと様々な妖術で攻撃してきたのだ。結運を背負っていることに気付いた四郎が止めなかったらどうなっていたことやら、である。

(なるほどね。こいつらがあの子の言ってた従者か)

饅頭を食べさせてやりたいと、優しい目をしてつぶやいていたことを思い出す。きっと良い主従関係なのだろう。

「それにしても……、従者だとか言うわりに全然お世話できてなくないか？」

調度品にはうっすら埃が積もり、繊細な薄玻璃の折れ扉はあちこち破れている。貝殻細工が美しい黒檀の卓子には無造作に物が散乱しているし、水盤に浮かべた生花はとうに萎れてしまっていた。

「なにぶん我々、この身体なもので……」

「爺と婆が湯治にいっとるんじゃ。文句あるか！」

そっと目を伏せた四郎と対照的に九郎はなぜかえらそうだ。どうやらお付きの爺やと婆やが留守にしているということらしい。

「って、ちょっと待てよ。当然厨房にも入れないよな。食事はどうしてるんだ？」

「たまに本家のくそじじいが届けに来ておる。でもちい姫はあまり食べんのじゃ」

「くそじじいって、豊老公か。え、食べないって、なんで」

だから貧血を起こすのではと季隆が眉をひそめると、四郎がため息をついた。
「近頃、食べ物を受け付けなくなってきておられるのです。以前はこんなことはなかったのですが……」
季隆は少し黙ったが、気を取り直して腰を伸ばした。
「しょうがない、食事は後で俺が作ってやろう。その前にちょっと片付けるか」
「それはありがたい。我らもお手伝いします。――皆、出てきなさい」
四郎が呼びかけると、扉の陰や調度品の後ろから幼児がおそるおそる出てきた。どれも皆よちよち歩きで足下もおぼつかないような者ばかり、わらわらと五、六人集まってきたのを見て季隆は苦笑する。なんだか子守りに来たみたいだ。
「しかし、この豪邸に一人で住むなんてどだい無理な話だよなー。侍女もいないんだろ？」
「諭迅殿はあまりここへ他人を近づけたがりませんので」
「ふーん……。でも本宅に置いておくのも嫌なのか。そりゃちょっとあの子が可哀相だよな」
はたきがけしながら季隆はぽつりとつぶやく。
結蓮の母は未婚のまま娘を生んだという。父親の名は最後まで言わなかったらしい。激怒した豊家の一族は、母親が亡くなった後も結蓮につらく当たったというから、そのへんの事情から別宅に移ったのだろう。
「本宅なんぞ出てせいせいしたわい。あいつら、ちい姫を迫害しおるんじゃぞ。罰当たりどもめっ」

「迫害……」

それは、同族の者から受けるような仕打ちだろうか。

足下にうずくまって床を磨いていた四郎が、神妙な顔でうなずく。

「昔からありましたが、ひどくなったのは五年前の事件からです。豊家繁栄の象徴ともいうべき皇后と太子が重傷を負い、一族は大打撃を受けました。それなのに一緒にいたちい姫様だけがほとんど無傷でお戻りになった。そのことで心無い噂の的になられたのです」

「化け物だ、とか言っておったやつもおったの！　薄気味悪いなどとの！」

九郎が腹立ちまぎれのように槍を振り回す。見事に壺を直撃し、バリンと砕け散ったのを見て、季隆は九郎をつまみあげると別の壺に詰め込んだ。

「何をするかー！」

「黙れちびっ子。――それで？」

片手に九郎入りの壺を抱えたまま、片手ではたきがけしつつ徐々に移動していく。四郎も律儀に床磨きしながらついてきた。

「無視するだけならまだしも、暴言を吐いたり嫌がらせしたり……。それがだんだんひどくなり、論迅殿はちい姫様を守るために部屋に閉じこめてしまわれました。皇后の快癒祈願のため生け贄としてちい姫様を差しだそうと言う者が出るほど、ひどい時があったのです」

「呪われればいいんじゃ、あいつらッ！」

壺から顔だけ出した九郎がわめく。これには季隆も同意だった。

結蓮の豊家における立ち位置は思っていたよりもずっと過酷なもののようだ。そんな少女時代を過ごした彼女と、現在の無敵に近い武官姿がいまいち結びつかない。

「――ん？　なんだここ」

回廊に出て隣の部屋の扉を開けると、そこには色鮮やかな色彩があふれていた。天井からは美しい下げ飾りがいくつも吊され、壁面の棚には愛らしい少女の塑像や小動物を模した人形がずらりと並んでいる。年頃の娘が好みそうなものばかりだ。

「ちい姫様の封印部屋です」

「封印部屋？」

はい、と四郎が遠い目をしてうなずく。

「武官を拝命された折、ちい姫様はご自身の蒐集品だった可愛いものをすべてここに封印なさったのです。武官たるもの可愛い品々に心を寄せてはいけないから、と――」

「え……何その思考。すげー可愛いんだけど」

季隆は思わず口を押さえたが、すぐに思い直して室内を見回した。

「……いや、切ないか……」

自らを厳しく戒めて職務に臨んでいるのは見事だと思うが、見事すぎて痛々しくなってくる。

さらに隣の部屋の扉を開けると、今度はどどどっと勢いをなして何かが回廊に流れ出てきた。

「うぉっ!?　――な、なんだ？」

白く折られたそれらはどうやら手紙のようだ。

「ちい姫様が毎日書いておられる恩人宛てのお手紙です」
「恩人って、例の五年前の？」
「はい。宛て先がわからないため溜まる一方なのですが、いつかお会いした時に五年分まとめてお渡しになるそうです」
部屋からあふれそうなほど大量の手紙を、季隆は引きつりながら見渡した。
「これ、全部……？」
「ふはははは！　ざまあみろ！　おまえなんぞちい姫の恩人に対する熱い思いの前では小バエみたいなものじゃ！　くそじじいが決めた許嫁なんぞ、わしは認めんからなー！」
九郎がやかましくわめいたが、季隆は別の意味で複雑な気分になっただけだった。

幼児にまつわりつかれながらなんとか粥を作ると、季隆は寝室へと戻った。
幾重にもなる紗幕の向こうで結蓮はまだ眠っていた。それを確認し、傍の卓子に盆をおいて椅子に腰掛ける。
その寝顔に、五年前卓子の下で目をつぶって震えていた面影はあまりない。
あの少女がこんなにも美しく成長し、武官になって、しかも恩人宛てにずっと手紙を書きためていたとは。あの時には想像もつかなかったことだ。
（一体どこがそんなに良かったんだか……）

どんなに考えても、自分にはさっぱりわからない。単に命を助けただけなのにそこまで慕われるなんて思ってもみなかった。

業焔に襲われてただ一人無事だった少女。その後の行く末が気にならなかったわけではない。だがあの後で自身に起こった出来事のせいで、いつしか彼女のことを忘れてしまっていた。彼女はずっと待っていたというのに。

太子や豊老人を責められない。自分も結局は彼女を置き去りにしていたのだから。

「――ごめんな。一人にして……」

思わずつぶやいてしまうと、それが聞こえたかのように結蓮が小さくうめいた。

瞼を開けた彼女を、季隆は急いで表情を繕ってのぞきこんだ。

「気分はどう？」

「……」

ぼんやりした目つきで結蓮が手を差し伸べてくる。握れということだろうかと思ってそうすると、急に手を引っ張られた。

「ゆ――」

不意を衝かれ季隆は寝台の中に転がり込む。自然、彼女に抱きつく恰好になったが、結蓮は嫌がるどころかそっと身を寄せてきた。

と、なまめかしく唇を近づけようとした結蓮の眉間に、季隆はひたと扇子を当てた。驚いた顔で目をあげた彼女に冷然と告げる。

「その娘から出てこい。――鬼狩姫」

璉ことばでの命令に、結運が目を見開く。やがてその顔に婀娜っぽい笑みが浮かんだ。

「……なぁんだ。ばれてたの」

本物の彼女ならば絶対にしないような物言いと表情だ。季隆は眉を寄せて嘆息する。

「やっぱりそこにいたのか……」

書庫で突然口付けられた時からおかしいと思っていた。捜していた太刀の精霊は結運の身体に取り憑いていたらしい。

実家に伝わる霊刀〈鬼狩姫〉。留学の際に持ち出したそれは煌に到着してまもなく盗まれ、めぐりめぐって豊家当主の蒐集品となっていた。それは孫娘である結運に渡ったというが、彼女はその太刀を壊してしまったらしい。それで器のなくなった鬼狩姫は彼女に憑いてしまったというところか。

「おまえ、その娘の身体を時々乗っ取って遊んでただろう。祟るという噂もおまえの仕業じゃないのか」

「そんなに怖い顔しないでよお。久しぶりに会ったっていうのにさ」

結運は――いや鬼狩姫は、すねたように口を尖らせる。

「そうよ、悪い？　だってこの子、まだるっこしいんだもの。陰口叩かれようが闇討ちかけられようが涼しい顔でかわしちゃって。お家のためにって我慢してんの、あたし知ってるのよ。だから代わりに仕返ししてやったの」

「今すぐ出ろ。そのせいで余計に評判が落ちてるだろうが」
代わりに、と言っても見た目は結蓮なのだから意味がない。
「いやよ。この子の身体、すっごく居心地いいんだもん。ただの人間よりもずーっとね」
「……いいから出ろよ。おまえに訊きたいことがある」
「そんな怖い顔してるけど、昨夜はまんざらでもなかったんでしょ？　もう一度してあげてもいいわよ？」
季隆の首に両手を回し、鬼狩姫は艶めいた目で見つめる。しかし季隆の顔色は変わらない。
「あいにく、色仕掛けに引っかかるほど素直じゃないんでね」
「ふん。あたしには冷たいのね。この子の前では盛大に猫かぶってるくせして」
毒づいた鬼狩姫が、ふっと面白そうに目を細めた。
「ねえ、風守の若様。いいこと教えてあげる。あんた、この子の初恋相手は自分だって思ってるでしょ。でも違うのよ」
「……」
「ふふ、がっかりした？　でも本当なんだから。この子が初恋をささげたのは、最初の縁談相手だったお坊ちゃまなのよ。だけど、相手が――、っ!?」
季隆は咄嗟に相手の口を手でふさいだ。
「おまえの口から聞くことじゃない。あんまり調子に乗るなよ」
鬼狩姫が目を瞠る。頭を振って手から逃れると、彼女は挑むような表情を浮かべた。

「そんなに偉そうな口利いていいの？」
「そっちこそ、消滅させられたくなかったら従え。出てくれば新しい器を用意してやる」
「じゃあその前に、少しだけ楽しみましょ」
にっこりと笑って、鬼狩姫は季隆の頭を抱えるようにして一緒に寝台に倒れ込んだ。
「おまえな……」
懲りないことを、と苦々しい顔で身体を起こした季隆だったが、自分の下で仰向けになっている彼女を見てぎょっとした。
ぱちぱちと瞬いているのは明らかに結蓮のほうだった。
この一瞬を狙って入れ替わったのだ。そしてこの状況はどう考えても季隆に不利だった。誰が見ても寝込みを襲う男の図にしか見えない。
きょとんとしていた結蓮の目が、すっと鋭くなる。
「この――破廉恥者ッ！」
「ぐぶッ！」
当然のごとく、張り倒された。
いつもの凛々しさを取り戻して身体を起こした結蓮が、冷たく宣言する。
「いくら許嫁でも、婚礼前にそれは困ります」
「そ……、そうだよねー……」
軽蔑の眼差しが痛い。季隆は鬼狩姫の狡猾さと己の甘さをひたすら呪った。

身支度を調えて居室へ行くと、着替え終わるのを待っていた季隆が目を丸くした。
「うわ……。すごい飾ったね」
結蓮は首をかしげる。淡い翠の中衣と赤い綾絹の豪奢な袖なし上衣、桃色の裙子に帯は金糸を縫い込んだ黄色。高く結った髪で揺れるのは瑠璃玉と真珠の飾り、そしてあでやかな牡丹の花――。
「普段着ですが？」
「嘘!?」
絶句する彼を見て、着替えを手伝った従者の七娘が嬉しげに頬を染める。物陰から窺っている彼女もやっぱり同じく幼児だ。
四郎がしずしずと薬湯の載った盆をささげて入って来る。貧血で倒れた時に飲む薬だが、季隆がいる前に寝間着では出られない。そのため着替えたのだった。
「なあ、ちい姫。こやつ、ほんとにちい姫の許嫁か？」
膝元に取り付いてきた九郎に、結蓮は「そうよ」とうなずく。
「けど、翠玉の御使いのことはどうするんじゃ？　この際じゃ、ここでこんなやつ追い出してしまえ。恩人に書いた手紙を見つけて、こやつ、呆然としとったからのう～。くふふ」

「えっ……」

思わず頬を押さえる。この五年、思いをずっと綴り続けてきたのを知られてしまったとは。

「いや、あれは別の意味で驚いたんであって……、なんか顔赤くなってない？」

「あの――秘密にしてくださいませんか。人に知られたら、恥ずかしいので……」

結蓮はもじもじとうつむいた。九郎がけたたましく叫ぶ。

「ふはは！　無様じゃのう！　言ったであろ、おまえなんぞお呼びじゃないんじゃ！」

「これ、やめなさい。みんな、あっちに行っていて」

四郎に目配せすると、心得たように彼は九郎を連れて出ていった。

途端に居室は静かになる。いつも軽薄な季隆が黙っているので、結蓮はふと気になって顔をあげた。そういえばまだ礼も言っていない。

「御曹司どの。このたびはわざわざ自宅へ運んでいただき、ありがとうございました」

丁寧に一礼する。上官の手を煩わせるとは情けないことをしてしまった。

「ああいうこと、よくあるの？」

「程度の差はありますが……特にひどくなったのはここ半年ほどでしょうか」

意外にも真面目な顔で訊かれ、結蓮は遠慮がちに答えた。迷惑をかけてしまったし、それに一応は婚約者なのだから病状を伝えておく必要はあるだろうと思ったのだ。

彼は湯呑みを口に運んだまま何か考え込むように黙ってしまった。あまりにも長い沈黙だったので、もしやと思い結蓮は逆に訊いてみることにした。



「私はあまりそういったことが得意ではないので、教えていただきたいのですが」
「ん？」
「偽りの許嫁でも、他の男性のことを想っているのはいけないことでしょうか。腹が立ちますか？」
ぶっと季隆が茶を噴いた。虚をつかれたのか盛大に咳込んでしまう。
「……いや？　別に気にしないから。まあ、君でもそんなふうに照れるんだなってびっくりはしたけど」
ハハハと乾いた声で笑いつつも彼はなぜか微妙に目をそらしている。
そのまましばし黙っていたが、思い直したように視線を戻した。
「……でもやっぱり気になるかな。だから、訊いてもいい？」
「翠玉の御使い様のことですか？」
「そっちじゃなくて。そんなに嬉しそうな顔しないの。……最初の縁談相手のこと」
結蓮は驚いて口をつぐんだ。いつにない言いにくそうな様子からして、誰かにあのことを聞いたのだとわかったのだ。
「九郎はそんなことまで話したのですか。おしゃべりな子……」
「いや、違うんだ。風の噂でちょっと」
少し後ろめたそうなそぶりの彼に、結蓮はため息をつく。別に隠すようなことでもない。
「――最初の許嫁だったのは、李真さまという方です。朝廷高官のご子息で、家同士の取り決

めで婚約していました。私が十五になったら婚礼をあげる予定で……お会いしたことはありませんでしたが、昔はただ婚約者というだけで単純に親しみを持っていました」

あの頃は決められた道に疑問や迷いを持ったことはなかった。それが変わったのは、業焔襲撃事件を経て柚梨軍に入ったころのことだ。

「でも、太子殿下をお守りするために舎人になったのに、李真さまと結婚してしまえばお側を離れることになります。それで悩んだ末にご本人に相談してみようと思いました。ちょうど、婚礼前の両家の顔合わせのような集いがあったものですから」

初めて会った彼は稀に見るような美々しい貴公子で、結蓮にも親しく言葉をかけてくれた。もともと好意を持っていただけに、その優しい態度に幼かった結蓮の心は大いに傾いた。

この人なら話せばわかってくれるかもしれない。その期待と希望で胸を熱くしながら、二人だけで話せる機会を待った。そして、会場を離れて裏庭へ行った彼を追いかけていくと――そこには彼と取り巻きたちがいた。

『許嫁の令嬢、すごい美女でしたね。あれじゃどんな花を用意しても花のほうが霞んでしまいそうだ。婚礼の飾り付けに困りますね』

追従するような取り巻きの言葉にも、李真は別人のような冷たい顔をしていた。

『そうか？　俺は見ていてぞっとしたけどな。花は花でもあれは毒花だ』

まるでいまわしいものを思い出すかのように顔をゆがめ、彼は言った。

『美女だというから期待していたが、あれは麗しいというより禍々しいものを感じる。人間じ

やないみたいだ。妖怪に襲撃されても一人だけ助かったというし、案外、本物の化け物かもな――』

その時まで結蓮は己の美醜を意識したことがなかった。凄絶な美女だったという母に似ていると伯母は言っていたが、当の母を知らないからぴんとこなかったし、お付きの者らが事あるごとに褒めてくれるのは、それが使用人の義務か何かだろうと思っていたのだ。

だからあんなふうに蔑まれるようなことを言われたのは初めてで、淡い憧れを抱いていた相手だっただけに、ひどくこたえた。今でも顔の造りのことを言われるのは苦手だ。

「――私が婚礼をぶちこわしにしてしまって、一時は噂の的になられてお困りだったでしょうけど、でも内心ほっとしていらっしゃったのではと思います。李真さまは私と結婚したくなさそうでしたから」

そう言い結び、結蓮は杯を口に運んだ。渇いた喉を涼香花茶がうるおしていく。

「……太子殿下は、そのことを知って邪魔なさったということ？」

「邪魔だなんて……。でも、そうですね、殿下は何かお気づきだったのかもしれません。それで私を助けてくださったのでしょう」

あの時点で結蓮に選択権はなかった。相手が誰であれ豊家の娘として嫁がなければならなかったし、当主である祖父の意向を覆せる者など豊家にいるはずがない。――太子以外には。

なるほど、と季隆がつぶやく。

「太子が絡んでるとなれば、相手の家も文句は言えないしな。少なくとも表向きは」

それには答えず、軽く首をかしげてごまかす。実際そうして問題は片付いた。最初だけでなく、二度目も、三度目も。

「その男、まだ子どもだったんだよ。初めて会った許嫁があまりに綺麗で、驚いて強がっただけさ。今ごろ後悔してるよ、君がささげた初恋を裏切ったこと」

真面目な顔で季隆が言った。結蓮も真顔で応じる。

「それは違うと思います」

「……落ち着いて鏡を見てみようよ。信じられない美女が映ってるからさ」

「私が初恋をささげたのは翠玉の御使い様ですから」

きっぱりとした訂正に、季隆は椅子からずり落ちそうになった。

「大事なところなので、間違えないでください」

「ご、ごめんなさい……」

面食らったように季隆が顔を引きつらせる。「そっちかよ……」と彼はぼやいたが、結蓮にはなんのことだかわからなかった。

回復して朝廷へ戻ったのは、午後も遅い時刻を廻った頃だった。

封陰省には他部署の官吏が待っていた。それが東宮官であることに驚く間もなく、結蓮はと

んでもない話を聞かされることとなった。

「残念ですが、東宮府では業焔を手引きしたのは秦少傅ではないかという見方が出ております」

にこりともせず続けた東宮官に、結蓮はもちろん季隆も目を見開いた。業焔捜しをしていた中で秦少傅のことは一度も捜査線上にはあがらなかったというのに――。

「知ってるかわからないけど……、五年前の業焔襲撃で、後宮の女官が何人か亡くなっているわよね。その中に秦少傅の許嫁がいたそうなの。蘇玉玲という人だそうよ」

遠慮がちに言った劉博士を結蓮は息を呑んで見つめた。あの頃、皇后に仕えていた女官たちには随分可愛がってもらった。玉玲というのは特に仲良くしてくれた女官だった。

「それがどうして業焔の件とつながるんだよ」

季隆の問いに、東宮官が「あくまで噂ですが」と前置きしてから答えた。

「五年前の業焔の一件は、皇帝陛下の寵姫を葬ろうとした豊家の陰謀だった……そんな噂があったようなのです。しかし手違いで皇后陛下と太子殿下が襲われてしまった――それを知った秦少傅が、復讐のために今回の業焔を手引きしたのでは、と」

それはまさに、青天の霹靂としか言いようがない告白だった。

(豊家の陰謀……!? まさか!)

国一番ともいうべき権力を握っている一族だ、綺麗事ばかりしているわけでないことくらいはわかっている。だが、それはあまりにも恐ろしすぎる愚行だ。

言葉もなく立ちつくす結蓮の隣で、季隆もにわかには信じられないという顔をしている。
「けど、もしそうだったとして、手引きしてどうするつもりなんだ？　秦少傅が殿下を危険にさらすとは思えないけど」
「少傅は太子殿下を目くらましに利用されたのではという意見も出ています。本当の目的である豊家に油断させるために」
「おいおい。朝廷に何人の豊氏官吏がいると思ってんの。だいたい、今まで業焔は朝廷にいたのに手を出してない。おかしいだろ」
「我々も疑いたくはないですがね。ただ、そういう噂がまことしやかに流れているのは事実です。豊家の方々にお話を聞く必要があります」
ちらっと東宮官が結蓮を見る。その視線からして、彼も豊家に対してあまり良い感情は持っていないようだ。
だが結蓮はそんな視線にすら気付かないほど呆然としていた。季隆と東宮官のやりとりが耳を素通りしていく。
捜査の途中で引っかかった、恐ろしい疑惑――誰かが故意に業焔を解神して後宮へ放したのではないかというあの疑念が、ふいに現実味を帯びていく。その誰かというのは豊家の者だったのだろうか。
（嘘……）
唯一無二の太子を産んだ皇后の権力は絶大だ。だが皇帝の寵愛を一身に受けているかといえ

ばそれはまた別問題になる。後宮には他にも美貌と才気で皇帝に気に入られた妃たちが大勢いるからだ。彼女たちの存在に危機感を覚えた豊家が暴走したということなのか。

（そんなふうに、家門を守るために、他の人の命を奪おうとしたの？　私の一族が――）

けれどそれは失敗し、逆に皇后と太子が襲われて大けがを負った。結蓮に優しくしてくれた女官たちは皆死んでしまった。それがどれだけ悲しく恐ろしい出来事だったか。

次に業焔が姿を現した時には必ずこの手で仇をとってやる。今日まで抱えてきたその思いが、彼らに理解できるだろうか。

「……秦少傅はそんな方ではありません」

低くつぶやく。怪訝そうにこちらを見た東宮官に、結蓮は激しい眼差しを向けた。

「少傅は太子殿下がご幼少の頃からずっと仕えておられる方です。たとえ復讐心を抱いていたとしても、殿下の御身を危険にさらすことをされるはずがありません」

「お嬢ちゃん……？」

危ういような雰囲気に気付いて季隆が眉を寄せる。しかし東宮官は皮肉げに目を細めただけだった。

「秦少傅は豊家と懇意であられましたからな。お気持ちはわかります。しかしあなたも当時、現場におられたはずだ。一族の者にけしかけられた妖怪に襲われたとわかれば、復讐したくもなるのではありませんか？」

おい、と季隆が剣呑な声をあげた。しかし結蓮には聞こえていなかった。

脳裏にあの場面がよみがえる。赤い血の色。つい直前まで笑っておしゃべりしていた人たちが血溜まりに倒れている恐怖。その日を境に会えなくなったことへの、ぽっかりと心に空いた喪失感――。

「……ええ。なるわ」

震える声が唇からこぼれた。

武官として、公人として、ずっと抑えてきた想いが一瞬はじけ飛んだ。

「どうして仇を討ちたいと思ってはいけないの。優しくしてくれた人たちなのに……！」

もしも本当に秦少傅の件が事実だったとしても――自分には彼の気持ちがわかる。

結蓮もずっと復讐を志してきた。それを果たそうとして何が悪いのだろう。こらえていたものが涙になってこぼれてしまいそうになる。

「あなたは……ご自分が何を言っているかわかっておいでなのか？」

東宮官がたじろいだように咎めた時だった。

傍にいた季隆が、横からいきなり結蓮を抱きしめたのだ。

唐突な行為に一同がぎょっとする中、彼はにっこりと笑顔を作って東宮官を見た。

「もう帰ってもらえます？　わかるでしょ。取り込み中なんで」

「な――」

「あ、上級官吏命令が聞けない？　こう見えても俺、次官なんだよね。ところでおたくは？」

腰の玉牌に視線を感じたのか、東宮官は怯んだように言葉を呑むと、渋々のように一礼して

書庫を出て行った。

ふうと息をつき、季隆が声を落とす。

「――落ち着け。取り乱せば不利になる。秦少傅も、君もだ」

冷静にたしなめながら彼はなおも力をこめて抱きしめた。その力強さに結蓮の中の熱が少しずつ冷えていく。

彼は事態を攪乱しようとして抱きついたわけではない。東宮官に飛びかかろうとした結蓮を止めてくれたのだ。

「……、すみません、私……」

混乱しているのが自分でもわかる。さっきの発言はまるで矛盾しているではないか。憎い仇である業焔を討ちたいのに、それを手引きしたかもしれない秦少傅に同情するなんて。

抱きしめる腕がゆるんだので急いで離れる。さっと目元を押さえ表情を消した。

「お騒がせして申し訳ありません。すぐに秦少傅を追います」

振り払われた腕をもてあますように戻しながら、季隆が静かに見つめてきた。

「噂に惑わされちゃだめだよ。少傅を信じてるんだろ？」

結蓮は少し迷ったが、思い切って小さくうなずく。同じく太子に仕える者として、少傅の忠誠を疑う気持ちはなかった。

「東宮府へ行って少傅の足取りを追ってみます」

うん、と季隆が笑う。その笑みになぜだかほっとした。

「じゃあ劉博士と一緒に行って。俺は翡翠丸の報せがくるのを待たなきゃいけないから」
「いえ、私一人で大丈夫です。劉博士どのはこちらでの職務を果たされてください。私は知り合いの舎人に協力を要請しますので」
一刻もじっとしていられず、結蓮はきびきびと踵を返す。その背中に声が飛んだ。
「俺はわかるよ」
え？　と振り向くと、季隆が傍にある椅子に目を落としていた。
――大卓に封陰官が集まる時、誰も座ろうとしない席だ。
「……君の気持ち、わかる」
そう言った彼の眼差しは、何か遠いものを見ているかのように切なげだった。

東宮府へ行くと、秦少傅の下官から話を聞くことができた。いわく、秦少傅は蔡太傅に呼ばれて出かけていったという。
さっそく蔡太傅を訪ねたが、あいにく留守だった。秦少傅行方不明の一件で忙しくしているらしい。結蓮は少し考え、太子を訪ねてみることにした。
（きっと不安がっておられるはずだわ。それに何かご存じかもしれない）
秦少傅は普段は太子の傍にほぼ付きっきりという生活を送っている人だ。異変があれば太子が気付いただろう。それに、もし本当に許嫁のことで復讐心を持っていたとしても、あんなに

も裏のない態度で太子に仕えていられるだろうか。

何より不思議なのは、秦少傅が消えたのは今日のことだというのに、こんなにも急激に噂が回っていることだった。何かおかしくはないだろうか？

（誰かが糸を引いている……？）

そもそも先ほどの東宮官も妙だ。業焔の痕跡が現れた件は誰でもが知っているわけではない。東宮府で事情を把握しているのは、高官や一部の関係者だけのはずだ。

（そう考えると、対象者は限られてくるけれど……）

つい今出てきたばかりの蔡太傅の官舎を振り返る。じっと見上げて考え込んだ。

秦少傅が姿を消す直前に会いに行ったという蔡太傅は、この件についてどんな見解を持っているだろう。彼が一件に関係しているとは言えないだろうか。

先ほどの官吏のことをもっと追及しておくべきだった。秦少傅と豊家の話に動揺して、詰めが甘くなってしまったことを今ごろ悔やんでも遅い。

「豊舎人、これからどうなさいますか？」

一緒に東宮府を回ってくれていた舎人が深刻そうに訊ねた。秦少傅の下官である彼は豊家に縁のある者で、結蓮にも親切にしてくれる数少ない一人だ。

「ええ、太子殿下をお訪ねしてみようかと――」

回廊を歩き出しながら言いかけて、結蓮はふと口をつぐむ。何やら隣の官舎が騒がしい。つられてそちらを見た連れの舎人が、ああ、とつぶやく。

「范太保の官舎ですね。先ほど馬車が入ってきたようで。賑やかですね」
（馬車……）
気を引かれたのがどういう理由からだったのか、自分にもわからない。しかし何か胸騒ぎのようなものを感じて、結蓮はそちらへと足を向けていた。
秦少傅失踪の件は当然、太保の耳にも入っているはずだ。とすれば、東宮最高官の彼がこの非常時に呑気に帰宅するわけがない。しかし内宮の奥にある東宮府にまで馬車が入ってくるのは、官吏が通勤に使う時のみだ。
「范太保にはお出かけの予定が？」
「さあ、そこまでは私にも……」
困ったように首をかしげる舎人とともに、結蓮は足早に太保の官舎の門をくぐる。突き動かされるように足は止まらなかった。
猩紅の件で協力要請したのは今朝のこと。けれども范太保からその件で返事が来たという話は聞かなかった。
彼は何か知っているのだろうか。そして何かを隠しているのか。
ふくらむ猜疑心に焦りながら官舎へ入ろうとして、結蓮はその馬車を見つけた。
「――！」
下官が御者と話をしている。行き先について申し渡しをしているようだ。もし范太保がこれから乗るのなら取り次いでもらおうと、急いでそちらに駆け寄った時だった。

「もう出せ。約束に遅れる」

ふいにその声が耳に飛び込んできた。

はっとして振り向くと、若い官吏が官舎から出てきたところだった。それが誰か気づき、結蓮は息を呑む。

（……胡祝榮！）

隠れ家にも自宅にもいないと思ったら、まさかこんなところで会おうとは。これは天の思し召しだろうかと思いながらすばやく物陰に身を潜める。

祝榮は人目を気にするようにきょろきょろしながら馬車に乗り込むと、従者らしき者たちをけしかけて出発させた。透かし彫りの入った小さな引き戸の窓や、ぐるりと屋根の周囲を廻る房飾りなど、一見するとよくある貴人の馬車だ。官舎の門を出て内宮門のほうへと走っていくのを、結蓮は呆然と見送る。

（なぜ彼がここにいるの？　なぜ范太保の馬車に……）

「……」

迷ったのは一瞬だった。一緒にいた舎人に封陰省への伝言を託すと、結蓮は件の馬車を追って駆け出した。

城下へ下りた馬車は、皇城の東の端にある同へと入っていった。

あたりには大きな屋敷が立ち並んでいるが、屋根瓦が落ちていたり、門や壁が崩れ落ちているところもある。寂れたこの一帯は、数年前に謀反の罪で追われた一族が住んでいたところだ。

そのうちの一つの門に馬車が入っていく。少し間を置き、結蓮も注意を払いながら後を追った。門前で立ち止まり、不審な思いで見上げる。

（こんな空き家に、なんの用だろう……）

そっとうかがってみると、彼が入っていった奥のあたりに明かりが揺れている。そろそろ日暮れの時刻、黄昏れ始めた景色の中でそれははっきりと結蓮の目に映った。

門をくぐって屋敷に近づくと、壊れた戸の隙間から話し声が漏れ聞こえてきた。狭い視界には複数の人影と、それに囲まれた男の豪奢な着物だけが見えている。

「――ふざけるな！」

叩きつけるような怒声が響く。結蓮は気配を殺し、声のする部屋の傍に身をひそめた。

「貴様がやれると申したのであろうが！　あんな小娘一人に何をやっているのだ！」

「申し訳ありません！　ですが、一緒にいた呪禁師が恐ろしく手練れで……」

「うつけが！　このままでは私の身が危ういではないかっ！」

パリン、と何かが割れる音がした。癇癪を起こして物を投げたらしい。続いておろおろしたような声がした。

「范太保、お静まりくださいませ。お怒りはごもっともですが」

（――范太保）

ごくっと結蓮は喉を鳴らす。声を聞いた時から彼ではないかと思ってはいたが、あらためてわかると衝撃だった。猩紅があやしい動きを見せている以上、彼を客人として招いた范太保も無関係ではありえないわけだが、信じたくないのが本音だったのだ。しかも彼はどうやら結蓮の暗殺を祝榮に依頼していたようだ。

（なぜ……!?　私を殺したところで、太保になんの得があるというの？）

彼が豊家の隆盛をよく思っていないことは知っている。だがそれなら他の氏族の者だって同じことだ。いくら豊家が疎ましいからといっても、そこまでする理由がわからない。

「皇后の回復祈願はもうまもなく始まるのだぞ。その前に手を打てと申したであろう！」

「まったくです。例の噂で豊家を貶めるのはうまくいっておりましたのに、そちらが失敗されては意味がない」

詰るように言ったのは別の声だった。范太保の協力者だろうか。

（噂……もしや先ほどの？）

五年前の業焔事件の黒幕が豊家であるという噂は、やはり作り話だったのか。少しほっとしたが、しかし現実はそう甘くないはずだ。このまま行けば、皇帝の裁量一つで豊家は無実の罪を着せられるおそれがある。

結蓮が緊迫感に押しつぶされそうになっている間にも、男たちはあれこれと祝榮を責め続けた。それを破ったのは范太保の苛立ったような声だった。

「次こそ必ず殺せ。あの小娘がいると太子殿下はいつまでも他にお心を移されぬ。ただでさえ

すでに三人も妃がおいでだというのに、これでは恵昭の入る余地がないではないか！」

怒声とともに再び物の割れる音が響いた。太保、となだめる声が続く。

「落ち着かれませ。恵昭お嬢様は評判の才媛、必ずや太子殿下のお気に召しましょう」

「他と同じでは困るのだ！　後宮一の寵愛を得なければ！　そのためには豊結蓮は邪魔だ！」

結蓮のこめかみを汗が伝い落ちてゆく。会話の断片を組み立てるうち、陰謀の内容が見えてきた。

「理由はどうあれ、太子はあの小娘を重用しておられる。へたをすれば妃らより寵が深いだろう。もし本当にあの小娘が太子の後宮に入るようなことになれば――！」

ガチャン、と三度目の破壊音が響き渡った。

「――その前に、小娘を消すのだ」

低い声での宣言に、しんと部屋の中は静まりかえった。

碧眼の太子を産んだ者が皇后に立ち、その一族が重用されるのは周知の事実だが、朝廷で力を持つには他にも方法はある。後宮にかぎって言えばもっと単純だ。皇帝、または太子に気に入られ寵愛を受ければいいのだ。そうして愛された妾妃とその一族が取り立てられた例も数多く存在する。それを利用した政争もまた絶えなかった。龍神の末裔を玉座にいただく帝国も、すべてが順風満帆で平和というわけではないのが現実だ。

（范太保……！）

怒りを握りつぶすように拳をかためる。彼は娘を太子の後宮に入れようと企んでいるのだ。

それだけならば責められることではない。だが障害となりそうな結蓮を抹殺しようとしているところからして、豊家を貶めようとしていること、そしてその縁組みが後ろ暗い思惑を隠しているのは明白だった。

（太子殿下に――いや、皇帝陛下に奏上申し上げなければ！）

琮成を権力争いの道具にするのは許せない。そっと後ずさり、回廊から出る。

結蓮が不運だったのは、ここが朽ちかけた廃屋だったということだった。動いた気配がいかに伝わってしまったのかはわからないが、傍に立てかけられていた戸板が音を立てて倒れたのである。

「――誰だッ！」

すぐさま扉が開き、中から人が飛び出してくる。

彼らは結蓮を見ると、そろって顔を強ばらせた。それは范太保も同様だった。

「豊舎人……盗み聞きかね」

いつも怜悧なはずの彼の目には殺気が宿っていた。この状況であっさり見逃してくれるはずもない。結蓮は太刀に手をかけながらにらみ返す。

「そちらこそ、このようなあばら屋で謀略の密議とは。東宮太保の名が穢れますよ」

「謀略？　密議？　なんのことかね」

「とぼけないでください。令嬢を太子殿下の後宮に入れようとなさっているのでしょう」

「それのどこが謀略なのだ？　太子の妃が三人きりでは寂しいばかり、そこにもう一輪花を添

えてさしあげようとしているだけのことではないか。皇帝陛下の後宮を思い出してみるがいい。豊皇后がおられぬ間にもずいぶんと賑わっているではないかね」

「無礼な――！」

ぎりり、とにらみつける結蓮を、范太保は口元をゆがめるようにして見た。

「豊家は少し隆盛が過ぎる。いくら国母の一族とはいえ、権力が偏り過ぎるのは煌国にとってよくないとは思わないか？」

「だからあなたがとって代わろうとでも？　それこそ国を乱す謀略でしょう。私を殺そうと企むあたり、あなたが娘御の輿入れによからぬ思惑を持っている証拠！」

「よからぬ思惑を持って何が悪い。天子の後宮に入る者は皆そうではないか！」

カッと目をむいて范太保が怒鳴る。憎々しげに目が燃えていた。

「豊舎人。謀略はなかったのだ。なぜなら、それを朝廷に報せようとした者は今から死ぬからだ！」

やれ！　と鋭い声が飛び、周りにいた者たちが襲いかかってくる。

結蓮はすばやく太刀を抜き放ち、最初に飛びかかってきた男の足下を振り薙いだ。動きが止まった相手を蹴りたおし、二人目にも同じく斬りつける。相手方は戦闘要員ではないらしく、軽く斬られただけで動揺のあまり動きを止めてしまう。

そこへ、一人だけ武器を持った屈強な男が襲いかかってきた。その刃を受け止めた結蓮は、相手を認めて目を鋭くする。

「胡祝榮……！」

「今日こそはその生意気な面をゆがませてやるぜ――豊結蓮！」

叫んだ祝榮が、太刀で押す力はそのままに結蓮の脇腹へと蹴りを入れてくる。思わぬ攻撃によろけたところを斬り上げられた。なんとか刃先でかわしたが、体勢を整える前に二度目の蹴りが襲いかかる。彼の動きは俊敏で、かわす傍から斬撃や蹴りが繰り出されてきた。

「どうしたどうした！　防戦一方だな、姫将軍！」

祝榮はいたぶるように笑みを浮かべている。結蓮に斬られた腕は完治していないはずなのに、憎しみと興奮で痛みを忘れているかのようだった。

「前とは違うって驚いてるんだろうなあ？　俺はもともと体術が得意なのさ。柚梨軍じゃ披露する機会がなかったけどなぁ！」

「だったら武器を捨てて素手で来たらどうです？　言い訳に長けたところは変わりませんね」

結蓮の冷ややかな言葉に、祝榮の頬に朱がのぼった。

「てめえに合わせてやってんだよ、くそ女あ！」

殺気に満ちた斬撃が振り下ろされる。結蓮はそれを紙一重でかわし、くるりと反転して祝榮の懐に飛び込んだ。すばやく太刀を持ち替え、掌底を顎へ、固めた拳を鳩尾へ、力一杯たたき込む。相手が怯んだところへ最後に手刀で喉を突くと、祝榮が悲惨な声をあげてどうっと昏倒した。

「――体術ができるのが自分だけと思ったら大間違いです」

見下ろしてそう言い置き、大きく息をついて、結蓮はあたりを見回す。
その場に立っているのは自分と范太保だけだった。相手方は全員が失神しているか、足を斬られて動けずにいる。たじろいだように後退る太保に、すかさず太刀の切っ先を向けた。
「動かないでください。范太保、あなたにお訊ねしたいことがあります」
すでに日は沈み、月がのぼっていた。はかない月光の下、何一つ見逃すまいとするように結蓮は太保を見据える。
「五年前の業焔の事件――豊家が黒幕というのはあなたの作り話ですね。本当はあなたが糸を引いておられたのですか？」
范太保は神経質そうに頬をひくつかせた。
「馬鹿な！　なぜ私が妖怪の手引きなど」
「では、今現在、業焔を飼っていらっしゃるということは？」
じりじりと間合いを詰められ、范太保はさらに後退る。
「業焔を飼うだと？　一体なんのことだ。あれほどの化け物が近くにいれば気付かないわけがないだろう」
その名を口にした時の彼は怪訝そうな顔で、とてもとぼけているようには見えなかった。
（業焔の件とは無関係ということ……？）
そう思った瞬間――唐突に背後に気配を感じた。
殺気はなかった。ただ、熱いものを押し当てられたような衝撃と、少し遅れて裂かれるよう

な痛みが押し寄せてくる。刺されたのだとわかった時には、どうしようもなく身体から力が抜けて、地面に膝をついていた。

（誰……もう一人いたの……？）

倒れ込みながらも渾身の力をふりしぼって振り返る。

そこにいた男が口元で笑んだのを見て、そうだったのか、と思った。

（これが、業焔――）

意識はすぐに、夜よりも暗い闇に落ちた。

「死んだのか？」

倒れ伏して動かない結蓮を見下ろし、范太保は硬い声で訊ねた。

彼女の背中に突き立った太刀を勢いよく引き抜きながら、男が答える。

「心臓を一突きしましたので。まず生きてはいないでしょう」

「そうか――よくやった」

太保は安堵の息を吐く。話を聞かれた時はどうしたものかと思ったが、これで一安心だ。

「急いで東宮府に戻るぞ。こんなところに長居は無用だ。まったく……ちんぴらの言うことなど、うっかり聞くのではなかった。えらい目に遭わせおって」

いまいましげに祝槃をにらみつける。せっかく私兵として雇ってやったのに役立たずな男だ。

思えばこの男から運が尽き始めた気がする。結蓮へのゆがんだ執着で目が曇っていたのか。

立ち去ろうとして、范太保は思い直したように振り向いた。

「おまえたち、娘の死体を隠してから戻ってこい。確か地下蔵があったな。そこでよい」

足を斬られてうずくまっている配下たちに指示し、ふと目を留める。

倒れた結蓮が握る太刀を見て思い出したことがあった。

「そういえば、この娘の太刀に大層執心していたな。〈龍神の太刀〉を捜して桃霞へ来たとか申していたが……」

「確かに、何か神気のある太刀に思えます」

男が言い添えると、考え込んでいた范太保はやがてうっすらと笑みを浮かべた。

「これは使えるぞ。もし万一本物の〈龍神の太刀〉ならば、陛下への献上品としてこれ以上の物はない。さしもの豊家も用意できぬだろうからな。偽物であっても構わぬ。豊家の娘がこれを隠しもっていたと訴えれば、二心ありと疑われても仕方がない」

「……〈龍神の太刀〉を持つ者は、天の玉座すら手に入れられると申しますからね」

男の言葉に、范太保は堪えきれず声をあげて笑う。とうとう豊家に一矢を報いる時が来たのだと思うと気が昂ぶった。

傍で男がじっと太刀に見入っていたことに、彼は気づきもしなかった。

第四章　水と炎の交錯

——結蓮が消えた。

その報告を聞いた時、季隆は嫌な予感が当たったことに痛烈な後悔を覚えた。

彼女と行動を共にしていた舎人いわく、結蓮は范太保の官舎に向かい、そこで彼の馬車を尾行して城下へ下りたという。すぐに太保のほうを探らせたが、本人はつかまらず情報もつかめなかった。

（どこかに潜んでるのか？　私宅……じゃないだろうな。どこか、隠れ家……）

内宮の桃花園で会った時、確かに自分も異変を感じた。異常な権力欲を持つ人間は独特の臭気を放つことがある。彼の場合もそうだろうと思ったのだが、やはり何かしでかしたか。

「まずいじゃない。范太保って猩紅と繋がってるんでしょ。それでもって猩紅は業焔かもしれないんでしょ!?」

劉博士が青ざめておろおろと袖を引く。季隆は思考を中断してつぶやいた。

「あの腕自慢が簡単にやられるわけないだろ」

「何呑気なこといってんのよっ」

「落ち着けよ。今考えてる」
そう、彼女が大人しくやられるわけがない。だがもしも本当に業焔と接触した場合、我を忘れて暴走するのではないかと危惧していた。それを止めるのが自分の役目だと自負していたというのに。
また助けられないのか。――嫌な事態を想像してじわりと焦りがにじむ。
（どこ行った、お嬢ちゃん……！）
――外でばさばさと翼のはばたく音がした。
ややあって書庫の扉が開き、翡翠丸が無表情で入ってくる。
「若さーん。例のお人をお連れしましたけど」
そう言った彼の後ろから現れた人物に、季隆は目を瞠った。

四隅の柱は真珠色。かかっている帳は穏やかな色合いの薄黄と薄緑。
広々としたその寝台で繻子の布団にくるまれて横たわった琮成は、いつもよりずっと小さく見えた。
『結蓮は、怪我はなかったか？』
どうしてもと祖父に頼み込んで一度だけ見舞いに行かせてもらった時。太子は結蓮の顔を見

ると、ほっとしたようにそう言った。自身が痕の残るような大けがを負っているにもかかわらず、まず最初に結蓮を案じてくれたのだ。

『ごめんなさい、琮成さま。わたし、きっと強くなって、琮成さまをお守りします。もう二度とこんな目には遭わせません。必ず、必ずお守りします』

どうしようもなく悲しくて申し訳なくて、涙に暮れながら誓いを立てた。

黙ってそれを聞いてくれた琮成の最後の言葉は、今思い出しても胸がしめつけられる。

『では、わたしもおまえを護ってやるぞ。だから安心しているがいい――』

束の間の夢は消え、暗闇の中で結蓮は目を覚ました。

(……ここは？)

黴びたような臭気がこもっている。じめじめとした土の感触がした。光がないところをみると地下牢か何かだろうか。

起き上がろうとして胸にずきりと痛みを覚える。手足もあちこち疼いたが、耐えられないというほどではない。なんとかして身体を起こし、背後の壁に寄りかかった。

そろそろと胸元をさぐると、大量に出血したのだろう、服が生乾き状態だ。つけていた普段用の鎧には細く穴が開いている。背中から一突きされた時の痕跡は生々しく、さぞや凄惨な姿をしているだろうと思われた。

――それなのに、傷はふさがり、自分は生きている。

（やっぱり……）

さっきまでとは違う種類の痛みが胸に走る。

やはり人とは違う生き物なのだ。そう突きつけられたような気がした。

幼い頃から変だと思うことはあったが、今にして思えば周囲の優しい人たちが気づかせまいと必死に隠してくれていたのだろう。結蓮がそれを知ったのは、皮肉にも業焔襲撃がきっかけだった。襲われて血の海に沈む人たちをよそに、自分だけは負った傷がすぐにふさがってしまったのだ。そして残った血痕は、皆と同じ赤ではなく蒼い色をしていた。

混乱と動揺で呆然としていた結蓮に、助けてくれた翠玉の御使い様は言った。このことは誰にも言ってはいけない、と。――それで気がついた。自分が人とは違うということに。

柚梨軍への入隊に猛反対した祖父は、あるいは知っていたのかもしれない。軍にいれば怪我をすることは日常茶飯事だろうし、何かの拍子にこの体質が知られるおそれもあるだろう。

だが結蓮は意志を曲げなかった。真夏だろうと全身を鎧で包み、怪我さえしなければ特異体質がばれることもないのだからと、誰にも負けないようひたすら腕を磨いた。

それもこれも、すべては太子への誓いを果たすためだ。

（こんなところでやられるわけにはいかない。早く皇城へ行かないと！）

朝議には皇帝も太子も臨席する。もし范太保があの男を伴って朝議へ向かったら――。

暗闇に目を凝らしてみるが、よほど闇が深いのか何も見えない。手探りで壁を伝って出口を探すがやはり何もないようだ。どうしたものかと、唇を噛んだ時だった。

突然、暗闇に淡い燐光が現れた。驚いて見つめる結蓮の視線の先で、それはゆらゆら揺れながら徐々に人の形をとっていき、やがて一人の中年の男の姿になった。

朝服姿のその男は結蓮を見ると安堵したような顔をし、何事か話しかけてきた。

（え？　何……？）

声が聞こえないから何を言っているのかはわからない。彼はさかんに身振りをまじえて訴えてきたが、通じていないことがわかったのか、やがてふっと姿を消した。

まぼろしだろうか。それとも幽鬼でも見たのかと戸惑っていたら、しばらくして頭上から騒々しい物音が降ってきた。

「――お嬢ちゃん！　いるのか!?」

結蓮ははっとして見上げる。季隆の声だ。

「はい！　います！」

一瞬間があり、今度はもっと近くで声がした。

「ちょっと下がってて！」

言われるまま壁にはりつく。ややあって、天井部近くの壁面から大量の土が落ちてきた。さっと差した光のまぶしさに思わず目をすがめる。

「手を出して！　怪我は？」

「はい……大丈夫です」

伏し目がちにしながら伸ばした手を、ぐっとつかまれる。乱暴なほどの力強さで一気に引き

上げられた。
澄んだ新鮮な空気を吸って結蓮は大きく息をつく。あたりは薄暗く、薄青と紫色の空が広がっていた。
（朝……？）
太保たちに会ったのは夕暮れのころだった。一晩気を失っていたらしい。
と、突然、ぐいっと肩を引かれた。
「馬鹿！　一人で動くなって言っただろ！」
いきなり怒鳴られ、結蓮は目を丸くした。季隆がそんな声を出すのを聞いたのは初めてだったからだ。
強ばった顔でにらんでいる彼の頬は土で汚れている。服も手も泥まみれだった。結蓮はようやく、自分が出てきたのが屋敷の裏手の斜面に掘られた地下蔵だと気付いた。そして彼がそこから助け出してくれたことも。
「……、申し訳ありません……」
半ばぼんやりしたまま謝る。突然怒鳴られてびっくりしたせいか、咄嗟に頭が働かない。
季隆が大きなため息をついて髪をかきあげた。
「ひやひやさせるなよ……。ほんとに、大丈夫か？」
こくり、と結蓮はうなずく。見上げた季隆の顔はもう怒ってはおらず、真摯に案じる色を浮かべていた。

「あの……、どうしてここがわかったのですか？」

結蓮がこの廃屋へたどり着いたのはまったくの偶然だった。伝言を頼んだ舎人も知らないことなのにと不思議に思っていると、意外な答えが返ってきた。

「猩紅が教えてくれたんだよ。范太保がこのあたりに隠れ家を持ってるってね。君が范太保の馬車をつけたって聞いたから、太保の隠れ家をいくつか捜し回ったんだ」

「猩紅が……!?」

「で、使い魔と知り合い総動員で捜したら、彼が教えてくれて」

彼が指さした先、早暁の庭先には、先ほど暗がりで見た淡い人影がにこにこ笑っている。

「あなたの使い魔なのですか？」

「いや、友達の梯麻呂さん。琏出身の先輩なんだ。今は幽鬼だけど、二百年前は皇帝に重用されてこのへんに豪邸を構えてたらしい。君を見つけて知らせてくれたんだよ」

梯麻呂と呼ばれた幽鬼がにこやかに会釈する。呆気にとられていた結蓮も急いで拱手した。

「御礼申し上げます、梯麻呂どの」

幽鬼はうなずき、笑って姿を消した。

東の空がしらじらと明けていく。もう彼ら幽鬼の活動する時間ではないのだ。そして間もなく朝議の時刻――。

「御曹司どの！　急いで皇城に戻りましょう！」

太保の傍に業焔がいるとわかった以上、太子や皇帝に近づけるわけにはいかない。

「范太保を止めなければ――昨夜のうちに止めておくべきでした。私の不注意で果たせず……。とにかく急ぎましょう、事情は道々話します」

門のほうへ走ろうとして、足をとられて転びそうになる。まだ身体が慣れていないようだ。

咄嗟に季隆が支えてくれたが、それがなければ転んでいたかもしれない。

「ちょっと落ち着けって。その身体で皇城まで走っていくつもりか？」

「大丈夫です。頑丈なので、これくらい平気です」

「どんなに頑丈なものでも壊れる時は壊れるんだよ。少しは自分を大切にしないと」

「でも、これまでもずっとこうしてやってきましたから」

皇城へ向かうことで頭がいっぱいになりながら、結蓮は彼の傍をすり抜ける。

止めようとしていた季隆がふと黙り込み、ぽつりとつぶやいた。

「むかつくな……」

その冷たい響きに、結蓮はどきりとして振り向く。

勝手な行動をとったことをそんなに怒っているのだろうかと見上げると、何かを堪えるような眼差しが返ってきた。

「君にそんなことばかり言わせてきたのか、周りのやつらは」

まるで彼自身を責めているような響きだった。

意味がわからず黙り込む結蓮に、彼は長袍を脱いで肩から着せかけた。

「御曹司どの。私――」

「いいから着てなって。寒いだろ」
「寒くなど……」
言い返そうとして、ぎくりとする。刺された胸のあたりが瑠璃色の液体で濡れているのに気づいたのだ。時間が経つと赤から変色する血も、自分が人ではないと思う根拠の一つだった。
(見られた!?)
結蓮は青ざめて視線を走らせたが、彼は気にした様子もなく門のほうを見ている。
「事情はだいたい俺も聞いたよ。けど、今からじゃ馬車を使ってもたぶん朝議には間に合わない。ここは皇城から離れすぎてる」
「ですが、どうにかしてでも登城しないと……っ」
「うん。だから別の方法で行こう。近くに河があったからそれを使おうか」
「河？　舟で行くということですか？」
都には舟が通れるような水路もあるが、余計に時間を食うのではと目を瞬く結蓮に、いつもの顔に戻った季隆がにこりと笑った。

皇城の北東には、城市の外を流れる河から引いた支流がある。桃霞にはめずらしく桜林が近くにあることから桜水と呼ばれていた。
町並みが途切れたところにある河原へ下りると、季隆はあたりを見渡し、ぱんっと大きく手

を鳴らした。

「――桜水伯！」

広い河面に、意外なほど朗々とした声が響き渡る。

ややあって、目の前の河面にゆらりと靄が立ち上った。影がゆらぐように姿を現す。

「……桜水伯を喚ばうのは、どなたじゃ」

重々しくそう言ったのは、絵巻物に出てくる仙人のような長い白髭の老人だった。官服と冠をつけており、そこだけ見れば朝廷の官吏のようでもある。

桜水伯、つまりこの桜水を治める水神だ。この世の水場はすべて龍王の管轄にあり、その眷属が河川湖沼の細部に至るまで管理している。

季隆がかしこまって拱手一礼し、口を開いた。

「私は蘭州蓬白山星鶯洞の主、臨道水明真君が九番弟子、橘季隆と申す者です。桜水伯には水門を開いていただきたく参上いたしました」

結蓮はぎょっとした。臨道水明真君とはつまり、国中に祀られている真君廟のあの仙人だ。

（山で修行していたって、真君のもとにいたということなの!?）

あまりの驚きに声も出ずにいる結蓮に、季隆が微笑して軽く口元に指を立てる。今は黙っていろということらしい。

ふむ、と桜水伯が髭をなでる。

「星鶯洞の九郎どのか。して、どちらまで行かれる？」

「桃霞皇城の朝堂前にあります芙蓉池まで」

季隆は堂々たる態度で桜水伯と渡り合っている。彼が仙人の弟子として修行までした人なのだということをあらためて思い知らされる心地だった。

「よかろう。では、御心を捧げられよ」

「ありがとう存じます」

にこりと笑って季隆が懐をさぐる。呆然としていた結蓮だったが、たまらず小声で訊ねた。

「御心を捧げるとはどういう儀式です？」

「儀式っていうか、まあ、賄賂だね」

「賄賂ですって？」

思わず声をあげてしまうと、いかめしい顔つきの桜水伯がじろりと目を向けてきた。

「賄賂ではない。通行料じゃ」

「いやーあっはっは。すみません、この子初めてなもので慣れてなくて」

季隆が笑ってごまかそうとしたが、結蓮を見た桜水伯は驚いたように目を瞠った。

「これは……紫黒公主様ではありますまいか！」

「え？」

きょとんとする結蓮の眼前で、それまで若干偉そうな態度だった桜水伯は「ははーっ」と水面にはいつくばる。

「紫黒公主様のご尊顔を拝謁賜るとは、この桜水伯、思いもかけぬ僥倖にございまするーっ」

「では桜水伯、今回は御心は無しで？」
すかさず言った季隆に、桜水伯はがばっと顔をあげる。
「それとこれとは別じゃ。公主様は公主様、御心は御心」
「これだよ。水場の番人はがめついんだから」
ため息をつきつつも季隆は取り出したものを捧げ持ち、河へと投じた。
ぽちゃん、と水中に落ちたはずのそれらは、いつの間にか桜水伯の掌に載っている。美しく輝いているのは青玉と白玉のようだ。
「賄賂とは、玉のことですか」
「そう。民の間で、水場に丸い団子を捧げる習慣があるだろ？　あれは呪禁師と水神のこのやりとりを真似たものなんだ。二粒捧げたうちの一粒は水伯の懐に、もう一粒は水晶宮に送られる。龍宮がこの世でもっとも宝物を持ってるのはこういう裏があるってわけ」
やれやれという顔つきで水面を見やる季隆を、結蓮はもしやという思いで見上げた。
「霊符を売ってお金を稼いでいるのは、その玉を購うためですか……？」
「封陰省の予算だけじゃ追いつかないからねー。水伯との交渉には絶対必要なものだし、足りない分は自分でどうにかしないと」
悪びれることなくあっさりと彼はうなずく。それを苦労だとも思っていないような顔で。
そんな理由があったのなら言えばいいのにと、あの時冷たい態度を取った自分を思い出して結蓮は少し腹立たしくなった。どうして彼はいちいち悪ぶるのだろう。

「おや……おぬし、いかんのう」

いそいそと玉を懐にしまった桜水伯が、ふと季隆を見つめて顔をしかめる。

「おぬし、力が封じられておるな。もともとの半分ほどしかないのではないか？　そのようなことで公主様の護衛が務まるのか？」

結蓮は驚いて季隆を見た。「余計なことを……」とつぶやいた彼は、にこっと笑みを浮かべて桜水伯を見返す。

「それはそれ、全力で公主様をお守りしますのでご心配なく。開門をお願いいたします」

「うむ……ならば」

桜水伯が右手をあげると、その動きに合わせて水中に空洞が空いていく。それはずっと奥まで続いており、隧道のようになっているらしい。

「行こう！」

季隆に手を引かれ、結蓮は開いた水門の中へと飛び込んだ。

「力が封じられているとは、どういうことですか？」

水の中の隧道は明るい青が広がっていた。水の流れのようなうねりが周囲の壁をめぐっているだけで、他には何もない。

「まあ……その通りの意味だよ。師匠と喧嘩して、力を半分取り上げられたんだ。だから正直、

今の俺はあまり力を使えない」

仕方なさそうに白状する季隆の横顔を見て、夜の皇城で黒頭巾らと戦った時のことを結蓮は思い出す。あの時、彼が突然倒れたのはそういう理由があったのか。

「真君のお弟子でいらっしゃるって、どうして黙っていらしたのです？」

「別に隠してたわけじゃないんだけど。わざわざ言うのも自慢みたいで恰好悪いしね」

何が恰好悪いものか。結蓮は言い返そうとしたが、彼がにやっと笑ったので口をつぐんだ。だんだんわかってきた。彼はどうやら、思ったほど不真面目ではない。わざとそう見せようとしているだけなのではないか。理由まではわからないけれど――。

「あなたには秘密がたくさんあるのですね」

「はは、まあね。――知りたい？」

意味ありげに笑って顔をのぞきこんでくる彼を、結蓮はじっと見つめた。

「……はい。知りたいです」

飄々とした顔の下には他にどんな秘密が隠されているのだろう。見た目ほどいい加減ではなさそうな彼のことを、もっとちゃんと知って理解したい。そう思っている自分がいる。

季隆がたじろいだように笑みを消した。

「急にそんな顔するなよ……」

「え？」

「……あーもー、何動揺してんだ俺！」

ぐしゃっと髪をかきあげ、彼は不自然に前へ目を戻す。結蓮もつられてそちらを見た。
前方に見えていた光が近づいてくる。水門の出口だ。
「そういえば、桜水伯が言っていらした紫黒公主って、なんなのです？」
ふと思い出してまた隣を見ると、さあね、と面白そうな声が返ってきた。
「知り合いとでも見間違えたんじゃないか？」
目前に迫った光の中へと二人は飛び込む。パシャッと足下で水音がはじけた。
光が消え失せた時、二人は池の中に立っていた。すぐ近くにある朝堂からは人の話し声が聞こえている。朝議はすでに始まっているようだ。
「御曹司どの、これをお返しします」
すばやく長袍を脱いで渡す。朝議には正装でなければ入ることはできないのだ。
「大丈夫です。汚れは水で落ちてしまいましたから」
何か言いかけた彼を早口に制し、結蓮は急いで池からあがった。
朝堂は政庁においてもっとも大きな建物で、毎朝朝廷百官が集まり、皇帝臨御のもとで朝議を行う場所だった。ここ二年ほどは太子である琮成も同席している。
そのため警備はかなり厳しい。泥まみれの衣服に水浸しの靴といういでたちで駆け込んできた二人は、たちまち入り口で止められた。
「狼藉者！　ここを神聖な朝議の場と知っての行いか！」
槍で行く手を遮られるが、結蓮は構わずそれをへし折って進んだ。止めようと向かってくる

衛士らを跳ね飛ばしながら朝堂の中へ駆け込む。
「――何事だ？」
居並ぶ人々がいっせいに振り返る中、朝議の進行役である丞相が叫んだ。
朝堂は奥に行くにつれて段々高くなる造りになっていた。一つの段は官吏が四十人ほど座れる広さで、その段ごとに身分に分かれて控える。最奥の玉座がもっとも高い位置になるが、その前にある三つの段は誰も入ることができない。皇帝が害されるのを防ぐためだ。
玉座は御簾がすべて下ろされ中はうかがえない。脇の太子席にいる琮成の姿を確認し、結蓮はその場に膝をついた。
「皇帝陛下に奏上いたします。わたくしは柚梨軍北軍所属太子舎人、豊結蓮にございます。火急の奏上にて、どうかお許しをいただきたく存じます」
「突然なんのつもりだ、豊舎人！」
一喝した丞相は同じ豊一族の者だ。彼は驚愕し、怒りもにじませていた。
ざわつく堂内、前方の段にいた男がすっと立ち上がる。
「――ちょうどよろしいではございませぬか、丞相。議事を少し変更していただきましょう。私から奏上いたしたいのは、そこの豊舎人のことについてなのです」
そう言ったのは范東宮太保だった。死んだはずの結蓮が現れたことで動揺しているようだったが、ここで黙っていては不利だと先に仕掛けることにしたらしい。
「皆様、これをごらんください」

范太保の合図で、彼の下官が布でくるんだ太刀を捧げ持って現れる。結蓮ははっとして腰を浮かせかけた。しかし皇帝近侍の羽林郎に背後から鋼の槍で押さえつけられ、動けない。

「私に仕える呪禁師によりますと、これはかの有名な〈龍神の太刀〉と申す天下の秘宝にございます。これには龍神が封じられており、その主となればこの世のすべてが手に入るのだと。持ち主にふさわしい御方は、煌において皇帝陛下の他にございません。ところがなんと、これを持っていたのはそこの豊舎人だったのです」

ざわざわと堂内の空気が揺れる。同族の丞相も信じがたいという顔つきで見ていた。

「しかも豊舎人はそれを秘し、龍神を我がものにしようと企んでいた様子。これを叛意と言わずしてなんと申しましょうか」

「違います！」

結蓮は叫んだ。槍が喉元に押しつけられたが、なんとか声を押し出す。

「それは龍神の太刀などではありません！　范東宮太保が私に罪をなすりつけるため企てた謀略でございます！」

「控えよ、豊舎人！」

「いいえ控えません！　范東宮太保は息女を太子殿下の後宮に入れるために、私を抹殺しようとしたのです。さらには陛下と殿下の御身を危険にさらす妖怪までも身内に飼っています！」

「控えぬか！　無礼であるぞ！」

范太保が顔を真っ赤にして怒鳴る。

思いもかけない双方の糾弾に堂内はさらに騒然とした。それが静まりかえったのは、太子席にいた琮成が席を立ち、玉座に近づいたからだった。

御簾の向こうにいる皇帝の言葉を聞いて、琮成が向き直る。

「まことに龍神の太刀か否か、そこの封陰官に検分させよとの仰せだ」

彼が指したのは、結蓮の後ろで同じように取り押さえられている季隆だった。解放されて促されるまま前方へと上がる彼に、下官から太刀を受け取った羽林郎が捧げ持って歩み寄る。

手に取った彼はしばしじっくりと調べてから、うやうやしく一礼した。

「皇帝陛下に申し上げます。これは龍神の太刀ではございません」

「確かか？」

代わって訊ねた琮成に、季隆は隙のない笑みでうなずく。

「どこにでもあるありふれた太刀にございます」

「……だ、そうだが？　范太保」

琮成の冷ややかな声に、范太保が窮したように口を開け閉めする。

もしこの場に当の結蓮がいなければ、あるいは審議された事案だったかもしれない。彼にとって誤算だったのは死んだはずの結蓮が生き返り、ここへ来てしまったことだった。

「范東宮太保。豊舎人の申した糾弾について、お聞かせ願えますかな」

豊家を虚仮にされかけたと気づいたのだろう、丞相の声も険しくなる。

高らかな声があがったのは、まさにその時だった。

「――いいや。確かにそれからは、龍の気配がする」

自信に満ちた宣言に、人々が驚いて声の主を見る。

それは本来なら朝議への出廷も許されていない下級官吏だった。にい、と口が耳まで裂けた恰幅のいいその男を見て、范太保がぎょっと目をむく。

「史平！　貴様――」

范太保が言い終わる前に、彼の従者だった史平という男は高々と跳躍した。

衣を破るようにして現れた本性は、燃えるように赤い毛並みの虎頭猿身の妖怪。あざ笑うかのようにかつての主人を鋭い爪で引っかけると、軽々と放り投げる。

悲鳴が響き渡り――一瞬置いて、朝堂内は恐慌に陥った。

赤い妖怪は、太刀を持つ季隆へとまっすぐ向かっていく。結蓮は身体を押さえつける槍を振り払い、夢中で駆け出していた。

朝堂の出口へと逃げていく人々と、琮成らがいる玉座とのちょうど中間あたり。ぽっかりと空いたその空間に季隆は一人で立っている。妖怪が彼を狙うのになんの障害もない。

「寄こせ――龍神の太刀!!」

「御曹司どのっ！」

叫びながら段を駆け上がった結蓮は、その時、翠と蒼の星が飛んだのを見た。

驚いてあたりを見やれば、半透明の蒼い膜のようなものが四方と上下を覆っている。それぞれの隅では先ほど見た蒼い光が瞬いていた。翠の光は、まるで意識を持つ物のようにくるくる

と回り、その軌跡は妖怪に巻き付いていく。
「さあ、ここからが正念場だよ。お嬢ちゃん」
妖怪を見据えたまま季隆が太刀を差し出した。その口元には薄く笑みが浮かんでいる。
「結界を張ったから陛下と殿下に危害が及ぶことはない。ただし、逆に封陰官が応援に来てもここへは入れないんだ。俺たちだけであいつを仕留めるしかないんだけど、どうだろう」
できるかな、と笑って彼は流し目をくれる。結蓮は迷わず太刀を受け取った。
「答えるまでもありません！」
鞘を払い、翠の光の縄に巻き付かれている妖怪へと切っ先を向ける。
「おとなしく往生するがいい！　業焔!!」
赤い毛並みがむくむくと膨らんだ。巻き付いていた翠の光がはじけるように消滅するのを見て、季隆が舌打ちする。
「やっぱり力が増してるな。――前後から挟撃しよう。正面からやれるかい？」
結蓮はうなずき、業焔の意識を自分に集めるようにしながら、じりじりと間を詰めた。
五年前に見た時は黒かった毛並みが赤くなっているのは、炯炯を吸収したからだろうか。だが片腕のないその姿はやはりあの時と同じ獣だ。
興奮したように逆立てているあの赤い毛が鋼のように硬いことを知っている。あれに薙ぎ払われた皇后は、その傷がもとで五年経った今でも目を覚まさない。
「**寄こせ!!**」

業焔が咆哮する。その余波が突風となって襲いかかった。思わず顔を背けた隙に、尋常でない速度で業焔が飛びかかってくる。結蓮はそれを紙一重でかわし、その凶悪に鋭い爪を太刀で受け止めた。片腕しかない妖怪は攻撃を止められて腹立たしげに飛び退る。そこを計ったように踏み込み、額に斬撃を振り下ろした。

「ギャアアア!!」

絶叫とともに業焔の額から血が噴き出す。青い液体があたりに飛び散った。

(青い――)

一瞬、自分の瑠璃色の血のことを思い出した。人の血が赤いのだと知ってから、他の色の血が流れることがひどく醜悪に思えてしまう。

よろめく業焔の片腕に、背後から翠の光が巻き付く。突き刺さっているのは呪具だろうか。

「もう一撃、同じ場所に打ち込むんだ!」

はじかれるようにして結蓮は太刀を構え直した。のたうち回る業焔の動きは激しく、なかなか隙を見つけられない。じりじりと詰め、一瞬を狙って踏み込んだ時、それに気がついた。

(……? 血が、乾いていく……?)

業焔の額から流れていた青い血が赤い毛並みの上から蒸発していく。嫌な熱気を感じ、思わず足を止めた時だった。

「――っ、だめだ、離れろ!」

別人のような鋭い声で季隆が叫び、結蓮は反射的に横へ転がる。

業焔の身体から火炎がほとばしったのはそれとほぼ同時だった。

「……炯炯だ」

炎を避けて傍へやってきた季隆が、吐き捨てるように言った。

業焔が吸収したとされる古の妖怪炯炯は火炎を操るという。業焔の全身から噴き出る真っ赤な炎は、時折白や黄色に光って禍々しさを放った。

「もう一撃で済むのなら、火炎を我慢して近づければ――」

言いかけて、結蓮は季隆の様子に気づいた。額には無数に汗が浮かび、どことなく苦しげな表情をしている。

「御曹司どの……、ひょっとして、力が尽きてきたのですか」

本来の力の半分を師に奪われてしまったという彼は、ここへ来るまでにすでにかなりの消耗があったはずだ。おそらくは一晩中結蓮を捜しまわり、救出した後は桜水伯と交渉して水門を開けさせ、さらには今、結界を張り続けている。

「あの火炎、ただの火じゃないみたいだ。このままだと結界が溶かされる」

「溶かされる……？」

「水の膜だからね。溶けるなんてことは本当はあっちゃいけないんだけど、あれは異常だ」

大きく息をつき、季隆が呪具を取り出す。

「業焔の周囲にも水膜を張る。そこを狙ってとどめをさしてくれ」

結蓮は少し驚き、すぐにうなずいた。

これまでは気付かなかったが、彼はごく自然に結蓮に託してくれる。能力に応じた術者で戦う封陰官のやり方といえばそうかもしれないが、それでも頼りにされるのは心が熱くなる。

下がった場所から季隆が呪具を飛ばして結界を張り直していく。結蓮はその前に構え、業焔と対峙した。炎を噴くその姿をにらみすえる。

相手が炯炯を吸収して変わったように、自分もあの頃とは違う。もう震えているだけの幼い少女ではない。その自負と妖怪への憎しみだけが自身を奮い立たせていた。

床を蹴って飛びかかってきたのをかわし、返す太刀で斬りつけようとして、結蓮はふと眉をひそめた。

業焔が笑ったように見えたのだ。

次の瞬間、業焔は玉座に向かって火炎を吐いた。ジュウウゥ、というそれまでにはなかった嫌な音が聞こえ、結蓮は一瞬棒立ちになった。

季隆が言っていた。――このままでは結界が溶かされる、と。

火と水がせめぎあい蒸気がもうもうと立ちこめる。水膜の中からも見えていた玉座が見えなくなり、結蓮は途端に動転した。

「太子殿下っ！」

うわずった声で叫んだ時、白い蒸気の靄を割るようにして業焔が突進してきた。

その唐突さと俊敏さに結蓮は咄嗟に反応することができなかった。
赤黒いかぎ爪が眼前に迫る。えぐられればひとたまりもない——そう思った。突き倒されて仰向けに転がった時も業焔の攻撃のせいだと思った。
だが——。
（……!?）
結蓮を突き飛ばしたのは業焔ではなかった。
横からぶつかるようにして押し倒し、覆い被さるように上に重なったのは季隆だったのだ。
（あっ……！）
驚いて起き上がろうとして、手袋越しにぬるりとした感触を覚えた。
喉の奥が引きつる。じっとりと濡れた掌と、庇うように覆い被さっている季隆の肩口の赤い色から目が離せなかった。
この色の血を流すと人は死んでしまう。もう帰ってこないのだ。五年前にそうだったように。
血だまりに伏せていた人たちのことがよみがえり、うまく息ができなくなった。
また同じだ。結蓮を庇って、また人が傷ついてしまった。
彼も死んでしまうのだろうか。あの時と同じように、結蓮だけを置いていってしまうのだろうか——。
季隆がよろけるように身体を起こす。それすら目に入らないほど自失している結蓮を見て、異変に気づいたのか彼は眉をひそめた。

「……どうした？」
「……」
「しっかりしろ。どうしたんだ」
怪我がないことを確認した彼が、結蓮の腕をつかんで揺さぶる。それでも呆然としたままなのを見て、動揺の理由に気づいたようだった。
「――結蓮!!」
大声で名を呼ばれ、結蓮はびくっと肩をふるわせた。
すぐ目の前、季隆が強ばった顔で見つめている。結蓮が我に返ったのがわかったのか、彼は大きく息をついた。
「落ち着け。大丈夫だから」
言い聞かせるように言った彼は、結蓮の頭を抱えるように両手ではさみ、じっと見つめている。傷が痛んだのか一瞬だけ軽く顔をしかめた。
「で、も……、血が、出ています」
「血ぐらい出るさ。生きてるんだから」
いつもの軽い口調とは違い、重みの感じられる言葉だった。
口調と声音だけではない、何より一番違うのは眼差しだ。
朱に染まった衣をまとい頬に赤いしぶきを走らせつつも、瞳は水のように静かで、火のように強い意志を灯していた。相反するものを同時に宿した瞳に思わず吸い込まれそうになる。

「そう簡単に死にやしない。だから落ち着いて、自分を取り戻せ。君の役目はなんだ？」

結蓮ははっとした。はじかれるように背後を振り返る。

「殿下……っ、殿下は！」

「大丈夫、もう一つ結界を張った。殿下には業焔の攻撃は届いてない」

見れば、玉座の前に濃い蒼の膜がある。業焔はその膜の内側で、なんとか突破しようとするかのようにもがいていた。結蓮に攻撃した後で隙をついて琮成を狙うつもりだったらしい。

まるで水底にいるかのように蒼い膜がゆらゆらと揺れている。水膜を隔てたむこう側では、玉座の帳を前に琮成が立ちつくしていた。皇帝を護ろうと咄嗟に前へ出たのだろう。

目にした瞬間、結蓮の中に激しい炎が燃え上がった。

――君の役目はなんだ？

「私は……太子殿下を護る太刀……」

その誓いを、太子舎人になった日から一度として忘れたことはない。

それなのに今、自分は何をしている――？

血まみれの姿で倒れていた幼い太子が脳裏をよぎる。あの時も自分は腰を抜かして、ただ彼を見ていただけだった。そんな自分を悔いて、生まれ変わろうと努力してきたのだ。

力なく投げ出していた掌が、太刀の柄を握りしめる。これほどの強い衝動を知らなかった。

まるで自分が自分でないような、わきあがる力を感じる。

「ああ、そうだ。他のことは構うな、君の信じる道を貫け」

ぐっと肩をつかまれた。少しだけ苦しげな吐息とともに声が続く。
「あまり時間がない。できる限り援護するから、君が倒すんだ。できるね？」
こく、と結蓮はうなずいた。言われるまでもない、自分が倒さなければならない相手だ。神経が研ぎ澄まされていくのを感じる。ゆらりと立ち上がり、重心を低くして太刀を構えた。炎を吐いて水の結界をやぶろうとしている業焔を、ひたと見つめて。
剣士の顔を取り戻した結蓮を見て、季隆がかすかに口元に笑みを浮かべる。
「いい子だ。——行くよ！」
響いた声と同時に結蓮は床を蹴った。
行く手に障害物は何もない。飛ぶように駆け、業焔の背に切りかかった。
しかし殺気を感じ取ったのか寸前で相手は振り向き、太い腕で結蓮を太刀ごとなぎはらった。すばやくかわして首へと太刀を振り下ろすが、業焔の吐く烈火に阻まれてしまう。
「横へ回れ！」
季隆の声に導かれるままに体勢を立て直す。雄叫びと激しい炎をまき散らしながら威嚇してくる業焔に、怯むことなく切っ先を向けながらじりじりと間合いをつめていく。徐々に角度が変わり、業焔の背後から完全に太子の姿が見えなくなった瞬間、低い姿勢のまま突進した。
横手のほうで蒼い流星がいくつも飛んだのが見えた。いや、流星ではなく季隆が放った呪具の軌跡だ。太子や皇帝を護る結界を強めたのだとわかったから、結蓮も迷わなかった。
（今度こそ、私が——斬る！）



炎の熱気もかまわず懐へ飛び込む。振り抜いた太刀が業焔の胸を深々とえぐった。すさまじい絶叫が耳を打つ。

しかし、とどめを刺そうと柄を握る手を返した途端、強烈な一撃が脇腹を襲い、結蓮は真横に吹き飛んだ。

「――！」

床にたたきつけられ、あまりの勢いに身体が跳ね上がる。痛みに目がくらみ、咄嗟に起き上がれなかった。ひゅっ、と喉が音を立てる。

（骨が……！）

衝撃であばら骨が何本か折れたらしい。季隆の叫びが聞こえ、ぐっと拳をにぎりしめて痛みを堪える。

絶叫をあげ続けながら、業焔はよろよろと歩を進めている。ふたたび玉座に向かおうとしているのか、それとも苦しみから逃れるためこの場を離れようとしているのか。

転がった結蓮が動けずにいるのを見て季隆は焦燥を浮かべたが、業焔の動きを見るや鋭く呪具を飛ばした。

「逃がすかよっ！」

翠色の軌跡を描いたそれらが業焔の腕と脚を背後の結界壁に縫い止める。地を揺るがすような雄叫びが轟き、結界の外にいる人々が悲鳴をあげたのが聞こえた。

「――お嬢ちゃん。ちょっと頭をおさえて下を向いてな」

なんとか身体を起こして太刀を構え直した結蓮は、その声に驚いて目をやった。
一振りの懐剣を手にした季隆が、業焔を見据えたまま鞘を払う。何か術を起こすつもりだと気づいて結蓮は息を呑んだ。
「御曹司どの！　何をするのです」
ここへ来る時に水門を開いた彼は、それだけでもかなりの体力を消耗したはずだ。そのうえ結蓮を庇って大けがを負い、衣が赤く染まるほど出血している。その状態で結界を張り続け、攻撃の援護までしていたのだ。これ以上力を使えば彼の身が危ない。
季隆は業焔に視線を当てたまま、口元だけで笑った。
「いかに俺がひ弱でも、最後の一撃の力くらいは残ってるよ。ただしこれで仕留めなきゃ大いにまずい。見えるかい？　外に業焔が吐いた炎が出ちゃってる。結界の一部がゆるんじゃったんだな」
はっとそちらを見れば、蒼い膜の向こうで官吏らが殿舎に燃え移った炎を消そうと右往左往している。その先頭に立って指揮しているのは劉博士だった。いつのまにか援護に来ていたらしい。
結蓮はごくりと喉を鳴らす。自身のことをひ弱だと言った彼は、おそらくは次官としての責任を感じて、命を投げ出して戦うつもりなのだ――。
「早まらないでください、御曹司どの！　次こそとどめをさします！　私が……！」
思わず震える声で叫ぶ。と、季隆が目を見開き、次いで苦笑した。

「早まってるのは君だよ。やつの動きを止めるだけだ。そのあとは君の仕事だからね」
え、と瞬く結蓮に、彼は再び業焔に目を戻しながら続ける。
「雷撃で動きを完全に止める。そこを狙うんだ。急所は眉間、喉、心臓、どこでもいい。これがほんとに最後だよ」
季隆が懐剣に口づけ、腕についていた自身の血を刃に含ませる。唇に笑みをたたえたままのその行為はひどく凄惨なようにも見えたが、同時にこのうえなく頼もしく思えた。そして――。
(綺麗……)
男の人に対してそんなことを思ったのは、これが初めてだった。
彼がいれば――いや、二人でやれば、倒せない妖怪はない。ふとそんな思いがよぎり、そう思った自分が少し不思議だった。
(たぶん……嬉しいんだわ)
こんな自分でも人の役に立てると、誰かを救うことができると思わせてくれることが。そして、武官としての自分を信用して、戦力として扱ってくれることが。
(そういえば、この人は最初からそうだった――)
季隆が刃で空中に次々と呪文や紋様を書いていく。あまりの速さに筆跡を追い切れず、何を書いているかもわからなかったが、結蓮は急いで彼のいるあたりまでさがった。
呪具に縫い止められた業焔は、なおも逃れようと激しくもがき続けている。その余波は突風となって結蓮の髪を乱した。

「……そんな策があるのなら先に言ってください」
安堵したのと、うろたえたことが気まずいのとでむすりと言うと、呑気な笑いが返ってきた。
彼の前にはいつのまにか翠色の燐光が軌跡となって現れている。空中に書かれた霊符だ。
「頼んだよ、相棒」
にやっと笑って一瞬こちらを見た季隆は、霊符を描いた結びの一筆を、その勢いのまま業焔に向かって振り下ろした。
「出でよ、鳴神！　布津鳴日子命!!」
――バリバリバリッ！　と、耳をつんざくような轟音が鳴り響く。
懐剣から召喚された雷神が、姿を現さないまま雷撃だけを走らせた。それはまっすぐ業焔へと放たれ、縫い止められて動けない獲物に容赦なく命中した。
「ギャアアアアアアッ!!」
断末魔の絶叫が響き渡るのと、傍らで季隆が膝をついたのは同時だった。
はっとして振り向いた結蓮に、彼は血のにじむ肩をおさえながら厳しい声を飛ばす。
「行け！」
目が合った。瞬間、迷わず結蓮は走った。
業焔はグルグルとうなり声をあげてぐったりしている。雷撃は致命的な打撃を与えたようだが、それでもまだ生きているのは間違いない。その胸のあたりに切っ先を向けたまま、結蓮は渾身の力をこめて身体ごと突っ込んでいった。

（これで終わらせる――！）

ぶつかるようにして刃を突き立てる。黒くすすけた毛並みの体軀が大きく波打った。

業焔の口から最期の絶叫が、胸からは青い血がほとばしり――それで終わるはずだった。

「……っ!?」

突如、目の前が真っ赤に染まった。

それは正真正銘の最期をむかえた業焔が噴いた、紅蓮の炎だった。突き立てた太刀の柄を握ったまま、結蓮は炎にのみこまれていた。

耳のそばをかすめるようにして背後から何かが飛んでくる。季隆が放った呪具だった。それは結蓮の前に水の結界を張ったが、すでに遅かった。

「結蓮！」

叫ぶ声が遠くで聞こえる。結蓮は炎の中でゆっくりと振り返った。

彼の姿は、見えない。

苦しいだろうにそれを顔に出さず、最後の一撃だと軽口のように言っていた。それなのにまだ結界壁を飛ばすような力が残っていたのか。

（……それとも、私のために尽きた力をふりしぼってくれたのかしら）

あの怠け者で面倒くさがりな人が――。

キケケケ、と奇妙な声がして、結蓮は目を戻す。

全身から炎を噴き出す業焔は笑っているようだった。

「**道連れにしてやる。おまえも、帝も太子も、ここにいるみなを！**」

熱い炎がいたぶるように頬をなでる。結蓮は冷ややかに業焔を見据えた。

「おやめ。おまえはもう滅んだのよ。冥府へ下って閻王様の裁きを受けなさい」

業焔はなおも奇声を発しながら炎を吐き散らす。激しい炎に、衣服や鎧は溶けるように燃え尽きていく。

相手の胸に突き立てたままの太刀をえぐるように押し込め、結蓮は声を低くした。

「やめろと言うのが聞こえぬのか」

ギイイイッ、と耳障りな叫びが響き渡る。業火をまき散らしていた業焔が、初めて気がついたかのように――信じられないという様子で結蓮に目を留めた。

「**……小娘……、なぜおまえは燃えておらぬ……!?**」

あたりは炎で紅く照らされている中、そこだけが翠色の光に包まれている。だがそんなことは結蓮にとってはどうでもいいことだった。体中が熱く、いいようのない高揚で満ちていた。ぐっと力をこめて太刀を突き立てながら、間近に迫った業焔の目玉と目を合わせて叫ぶ。

「――おまえに引導を渡すためだ!!」

かろうじて残っていた結界壁の水のしずくが、ひた、と太刀の柄の瑠璃玉に落ちる。

瞬間、心臓をねじ切られた業焔が、凄絶な炎を噴き出して絶命したと同時に――。

おびただしい水と翠色の光が、轟音とともに結界壁と天井を突き破った。

翠玉を溶かしたような美しい水が、きらめきを放ちながら足下に押し寄せてきた。一見するとそうは見えないが、ずしりと重みがあって足を搦め捕るかのようだ。

（この水……）

明らかにこの世のものではない。季隆は自身の張った結界が有効なのをすばやく確認した。結界の外からはこの光景は見えていないはずだ。他者に知られたら結蓮は傷つくだろう。

炎に包まれた彼女に駆け寄る途中の、一瞬の出来事だった。翠色の水はまるで意識を持ったように様々な形に変わりながら結界内に満ちている。湖のように広がり、そこから垂直に水の壁となってそそりたち、檻のような形を作っていた。結蓮はおそらくあの中だ。

絡みつく水をかきわけて進みながら、季隆は一月前のことを思い出していた。

『――どうか、どうかっ、お頼み申す！　うちの孫と結婚してくだされえぇ!!』

最初の一言は、それだった。

顔を合わせるなり平伏して懇願してきた豊論迅に、皇后の父という朝廷実力者の片鱗はまったく見られない。そこにいたのは孫娘を溺愛するひとりの老人だった。てっきり妖怪がらみで封陰省を訪ねてきたとばかり思っていたから、もういろんな意味で驚いた。

『……えーと……。お人違いじゃないですか、ご老公。僕はしがない一術師でして、豊家のご令嬢を妻にむかえるような身分じゃないんですが』

面食らいながら確認すると、カッと血走った目でにらまれた。
『何をおっしゃる！　名高い水明真君のお弟子として修行されていたこと、この老いぼれも聞き及んでおりますぞ。将来は煌の朝廷の守護神としてご活躍なさること間違いなしでござろう！』
『いや、あの……。自分、璉の人間なんで』
守護神はちょっと、と手を振ると、ますます恐ろしい形相で詰め寄られた。
『もしや故国に決まった御方がおいでなのか！　お待ちくだされ、うちの孫もそれはそれは素晴らしい娘ですぞ！　国一番の超美少女なのですぞっ！』
それから延々と孫自慢を聞かされ、掌中の珠のような存在らしいということを嫌というほど理解して、季隆は仕方なく本題に入った。そんなに大事な孫娘をなぜまた自分のような留学生と娶せたいのか、と。
『――孫は、人ではありませぬ』
豊老人は苦悩するような顔つきで打ち明け、語り始めた。
『あの子の祖母……つまりわしの二度目の妻も、人ではなかった。――龍族の娘でした』
『龍族』
『それを知ったのは妻が眷属のもとへ戻っていった時のことです。人の世には長くいられないのだと聞かされました』
季隆はうなずいた。異種婚は禁忌ではないが、長くは続かないのが常である。

『妻との間には娘が一人生まれました。わしはその後、三人目の妻を娶り、何事もなく過ぎていったのですが……やがて娘は男と通じ、子を産みました。そして数年後、子を残して姿を消しました』

『眷属のもとに戻られたんですね』

『さよう。その時に娘から聞かされたのです。龍族の者がなにゆえ人の世に長くいられないのか。それは、人の世に染まりすぎると龍の本性としての心身がむしばまれ、いずれ死んでしまうからだと……』

『そこまで知っておいでなら、なぜお孫さんを人に嫁がせようとなさるのです？』

もっともな疑問をぶつけると、諭迅はいっそう苦悩をにじませた。

『わしは同じ過ちを三度も繰り返したくないのです。妻が去り、娘が去り、このうえ孫にまで去られるのは耐えられぬ。豊家一族は大勢いるだろうと思われるでしょうが、その誰もが代え難い存在なのです。――今でも後悔しております。他に道があったはずだと。人の世に慣れさせ、人の男と娶せ、人として暮らさせることができたのでは、と。豊家の財力をかけてその方法を探してやればよかった、と……』

『……だから、お孫さんを僕と結婚させようと』

『仙人のもとで学ばれたほどの方なら、孫を護る術をご存じかと思いましてな』

豊老人は否定しなかった。よほどの信念をもって実行しようとしているのだろう。

話が見えてくるとともにこみあげたのは不快さだった。

そこまで知っていながら、ただ己のために傍に置こうというのか。異形の娘が人の世で暮らしていくのにどれほど生きづらい思いをしていることか、それほど孫娘を愛しているなら彼はわかっているはずなのに。

『あなたの可愛いお孫さんは、このまま人の世に居続けたら弱って死んでしまうんでしょう？別れがつらくても眷属のもとに送り出してやるべきでは？』

あまりにも勝手すぎる。おそらくは何も知らないであろう彼の孫娘が哀れではないか。

豊老人は、深い皺の刻まれた顔に自嘲するような寂しい笑みを浮かべた。

『それでもわしは、これ以上愛する者を手放したくないのですよ――』

翠色の水壁をかきわけ、季隆は痛む傷口に顔をしかめながら進む。

――あの時、豊老人の目は本気だった。ある種の妄執というべきか。妻と娘に去られた過去がよほど応えているらしい。

彼が、溺愛する孫娘に表向きは厳しく当たっていることは後で知った。当主として豊家を束ねるためという理由もあるのだろうが、孫娘を喪うことにひどく怯えている裏返しの行為のようにも思える。

彼なら必ず孫娘を人の男に嫁がせ、なんとしても眷属のもとに返さないようにするだろう。それでひとまず縁談を引き受けた。自分が断れば他の男が代わりになるだけだと思ったからだ。

当の孫娘というのが五年前のあの少女のことだとわかったのは、その後だった。

『お嫁さまじゃなくて、お弟子にしてください』

大きな瞳で真摯に見上げてきたあの少女は、時を経て、豪腕の女武官に成長していた。

『もう二度と、殿下にお怪我をさせないように――強くなりたいんです』

あの時の言葉どおり、とんでもなく強い剣士になっていた彼女。自分が手を差し伸べなかったために一人であそこまで努力してきたのかと思うと、胸が痛む。かつて業焔を仕留めそこなったことに責任を感じながらも、結蓮の気持ちを考えると、どうしても彼女の手で仇を討たせてやりたかった。

豊家の財力や名前に守られているとはいえ、一族から迫害され、自身の生い立ちをわきまえるあまり愚痴もこぼさず、危険な任務もためらうことなく飛び込んでいく。その真っ直ぐさが不憫だった。

眷属のもとへ帰れば、同族の者たちは彼女を温かくむかえることだろう。迫害されることも、人の世の悪気にあたって倒れることもなくなる。彼女のためにはそれが最良の道なのだ。

けれど――。

たどりついた場所には池のような水たまりがあった。その深みへと靴のままざぶざぶ入る。気を失っているのだろう、黒髪をまつわりつかせた白い肢体が水面に浮かんでいた。

「……どうしようか。お嬢ちゃん」

あんなにも豊老人の思惑に反発し、身勝手さに軽蔑さえ覚えていたというのに。

この生真面目でひたむきな娘のことを、隣で守ってやりたいと思う自分がいる。

己の変化に苦く笑いながら、季隆はそっと彼女の傍にかがみこんだ。
「俺も、君を眷属のもとに帰したくなくなってきちゃったよ……」

覚醒してまず目に入ったのは、朝堂の天井に開いた穴と、そこからのぞく薄青の空だった。
額や頬を何かが伝っていく感触がする。さきほどの水滴だろうかと、とろんとした意識のまま視線をめぐらせると、上から顔がのぞきこんできた。
「気がついた？」
微笑んで言ったのは季隆だった。そこでようやく結蓮は、自分が横になっており、彼が半身を抱くようにして支えてくれていることに気づいた。指先や足先の感覚から、水の中にいるらしいということも。
「寒い……」
なぜだかひどく身体が冷える。こんなに晴れた日なのに、水に浸かったくらいでどうしてだろうと不思議に思いながら身震いすると、季隆がにこりと笑って答えた。
「そりゃそうだ。君、服着てないもん」
は？　と眉をひそめ、結蓮は目線をおろす。そしてすぐに目を瞠った。
衣でくるまれた身体はかろうじて露出はしていないものの、他には何一つ身につけていなか

った。つまり衣の下はまさに生まれたままの姿ということになる。
そう気づいた瞬間、ぐったりしていたのも忘れ、腕をふりかぶった。
「この――不埒者ッ!!」
「うぉっ!?」
張り倒された季隆が派手なしぶきとともに水に沈む。強烈な一撃だったのかしばらく上がってこなかったが、ややあってぷかりと浮かび上がってきた。
「君……。俺の息の根を止める気かい……？」
力なく水面をただよいながらつぶやいた彼に、結蓮ははっと息を呑んだ。
大きく衣が裂けた彼の背中は血で汚れている。しかもよく見ればそれは中に着る袖なしの衣だ。上衣はどこかと捜せば、自分の肩にかけられたものがそれだった。状況がやっとつかめ、慌てて水をかきわけ、彼を抱き起こした。
「申し訳ありません、御曹司どの！　大丈夫ですか!?」
「うん……まあ、生きてるかな……」
「ごめんなさい！」
「いや、いいから……とりあえず、見えない程度に隠してくれる？」
苦笑気味に言われ、結蓮は急いで胸元をかきあわせる。急に動いたせいで水はさざなみ立ち、はおっただけの長袍の裾が頼りなく揺れた。
「ひどい傷です、いそいで手当てをしなければ」

「あー……そういえばなんだか痛くなってきたな。ついさっきまで忘れてたんだけど」
平気な様子で笑った彼だが、かなり血と体力を失っているのだろう、顔色が青い。結蓮は唇をかんだ。
「本当に、申し訳ありません……。私が未熟なばかりに、こんな大けがをさせてしまいました。どうやってお詫びしたらいいか……」
それに、この翠色の水たまりは一体なんだろう。
業焔を倒した時、自分の中に異様な力が満ちたことは覚えている。おびただしい水と光があふれ、身体を包んだことも。ということはこの翠の池は自分が作り出したものなのだろうか。
（ただの人間にこんなことができるわけがない。やっぱり私は、人じゃなかった……）
結界内にいた彼もそれに気付いたはずだ。きっと、結蓮が人でないと知って恐ろしく思っているだろう。
嫌だ、と思った。
力を認めてくれて、対等に扱ってくれて、必要としてくれた。そんな人に、嫌われたくない。
――彼の怪我の具合を案じつつも、そのことに怯えている自分がいる。
突然、ぐっ、と手をつかまれた。
驚いて目をあげると、季隆がいつもの顔で見つめていた。
「封陰官にとって大事なのは標的を封じることだけだ。そこに至るまでにどんな手段を使おうと、どれだけ死にそうな目に遭おうと、どうでもいいことなんだよ。要は最後に生きてればい

いんだから」
「ですが……っ」
「業焔は滅んだ。つまり今日の任務は無事成功ってわけだ。君がそれを成し遂げたんだろ。そんな顔してないで、胸を張れよ」
微笑む彼を、結蓮は何も言えずに見つめる。
業焔への復讐に燃えていた思いが、解けていくようだった。
季隆もまた、微笑を消さないまま見つめ返してきた。
「恰好よかったよ、結蓮ちゃん。――よく頑張ったね」
「……」
彼は業焔との戦いのことを言っているのだろう。だが、その一言は結蓮の心の別の深いところにしみていった。
あの凄惨な事件でただひとり無事だった自分が厭わしく、後ろめたかった。必死で剣技をみがき、修行に没頭したこの五年間。誰かに褒めてもらいたいなんて思ったことはない。ただ、認めてもらいたかった。自分はもう何もできずに震えていた子どもではないのだと。
知らず知らず、涙がこぼれていた。季隆が驚いた顔をしたが、それがなぜなのかさえ気づかなかった。
「はい……！」
――嬉しくて、笑みも一緒にこぼれていたから。

季隆は笑顔を消し、じっと見つめている。結蓮は我に返って腰を浮かせた。
「すぐに運びます！　背負いますので少しの間だけ我慢してください。大丈夫ですか？」
呑気に話をしている場合ではなかったと思い出し、手当てのために抱えあげようとするが、彼はつかんだ手を離さなかった。
「……大丈夫じゃないよ」
「え？」
引き寄せられるまま結蓮は身をかがめる。同時に半身を起こした季隆が、喉をそらすようにして顔を寄せた。
「責任とって治してくれ」
いつもの戯れの色など微塵もない声でささやいた唇が、そっと押しつけられてくる。
それが口づけという行為だというのは知っていたが、突然のことになんの反応もできなかった。ただ、重なった時と同じようにひそやかに唇を離した彼を、驚いて見つめることしか。
（……この人……こんなに綺麗な目をしていたかしら……）
今まで気づかなかったことも、この距離ならわかるのか。もう一度唇がふれそうなくらいの近さで見つめ合ったまま、そんなことを思う。
（でも、なぜ急にこんなことを――？）
眉をひそめた結蓮だったが、はたと気づいて声をはずませた。
「なるほど。口移しに気を補給なさったわけですね！　少しは回復されましたか？」

がくっ、と季隆がうなだれる。
「御曹司どの？」
「あの……。……頼むから隠して……」
顔を覆ってうめいた彼を片手で抱えたまま、結蓮は慌てて胸元をかきあわせた。



終章　同じ空の下で

混乱の朝議から日を置かずして、皇后の結界を解く術式も滞りなく行われた。

五年もの眠りについていた皇后はすぐに目を覚ますことはなく、もうしばらく療養が必要ということだったが、住まいである北宮には戻ってこられている。琮成は幾度となく見舞いに訪れているようだ。結蓮も行きたかったが、身分的に許されず、果たせなかった。

何はともあれ――、春を迎えた朝廷は落ち着きを取り戻しつつある。

「范東宮太保は朝議を混乱させたとして罷免され、桃霞から追放されることになりました。東宮三師は病気休職中の太師に続いて欠けてしまって、一人残った蔡太傅が忙しさのあまり癇癪を起こしかけているそうですよ。しばらくは近づかぬが華でしょうね～」

この日、もろもろの報告にやってきたのはなんと孔東宮少保だった。

「豊家失墜を企んで、皇后陛下が回復される前にと動いたようです。噂を流したりね。あなた方のところにも彼の下官が様子見に来たでしょう？　なんでも業焔は太保に皇后陛下の結界のことを吹き込んで、場所を探させていたようですよ。自身の腕を取り戻すためにね。大したやつですね～。あ、業焔が化けていた史平という男は、城外に出たところを業焔に乗っ取られた

ようで。それだけはちょっと気の毒でしたがね～」
　いつもの揉み手はどこへやら淡々と分析する彼に、結蓮は呆気にとられていた。季隆も面食らった様子だ。
「なんか他人事みたいだけど……、おたく、范太保の腰巾着じゃありませんでしたっけ？」
　あけすけな問いにも、孔少保は別段気を悪くした様子もなく答えた。
「お二人とも口が堅そうなのでぶっちゃけますが。実は私、皇帝密使でしてね」
「皇帝密使!?」
　皇帝直属の隠密だ。官府の監視のため、普段は素姓を隠して朝廷各府に散らばっていると聞く。
「って、そればらしちゃだめなんじゃ……」
「ふふふ。知られたら皆さんも死刑なんで、内密にお願いしまーす」
「何ばらしてくれてんの!?　すげー迷惑なんだけど！」
　季隆が目をむく。結蓮も唖然として言葉も出てこなかった。まさか孔少保がこんな人だったとは。
「あ、そうそう、秦少傅があなたによろしく伝えてほしいと言っていましたよ。豊舎人」
「ご無事なのですね？　お怪我の具合は？」
「まあ、多少痛めつけられたようなのでしばらくは安静が必要でしょう。深入りするなと警告したのにね～。まったく困ったお人ですよ」

行方をくらましていた秦少傅は、范太保に監禁されていたという。許嫁が死んだのは豊家のせいだと唆され仲間になれと脅されたそうだが、頑として突っぱねたため拉致されたのだ。

彼の身を案じつつも信じていた結蓮は救われた思いだった。彼を救出してくれたのが孔少保と知った時はかなり驚いたものだが。

「ありがとうございました。秦少傅を救ってくださって」

「まっ、仕事ですから～」

「いやー、仕事にしてもあの太鼓持ちっぷりは見事ですよ。芝居心が半端なかったし」

半ば呆れたように感心する季隆に、孔少保はきらりと目を光らせた。

「芝居ではない。ごますりは私の趣味です！　次の上官にもしゃかりきに擦り寄りますよ～」

やる気満々で宣言した彼は、軽く拱手して踵を返した。

「これからもあなた方にはいろいろお願いすると思いますので。よろしくお願いしますね～」

「……！　はっ！」

結蓮は急いで礼をとる。皇帝密使の彼がそう言うには、つまり皇帝の意向とも言えるのだ。

（業焔の時のように、このままここで怪異事件の解決に励め、ということなのね）

――そう、結蓮は今も封陰省付き太子舎人として出勤している。

あの日〈龍神の太刀〉を隠し持っていた咎で弾劾されたものの、すぐさまその疑惑は晴れ、何より業焔を調伏したこともあってお咎め無しとなったのだ。おそらくは祖父の力も裏で動いたことだろう。ただ、柚梨軍には戻れず封陰省へ出向したままであり、母の形見のあの太刀は

朝廷預かりとなった。

（でも母様とのつながりが消えてしまうわけじゃないし……。朝廷のためになるのなら、それでいいわ）

寂しく思うが仕方がない。気持ちを切り替えて職務に励まなければ。

一緒に孔少保を見送っていた季隆が、ぱちんと扇子を閉じてつぶやいた。

「――よし。帰ったな」

「は？」

彼は傍の椅子にかけていた布をはぎとると、そこに立てかけてあったものを手に取った。

「はい、これ」

笑顔で差し出されたのは一振りの太刀だ。朝廷に提出したはずの自分の太刀だと気づき、結蓮は目を瞠った。

「こっそりすり替えてきた。預かってるの封陰省だから」

「なんということを！　発覚したらただでは済みませんよ」

「ばれやしないって、そっくりなものを置いてきたし。そもそもこれも普通の太刀なんだから、調べたところで何が見つかるわけじゃないし」

「そういう問題ではありません。あなたには職務に対する倫理や誠実さというものがないのですか？」

「もー、またお説教？　ほんとに真面目なんだからー」

小言にも一向にこたえた様子もなく、彼は微笑んで太刀を軽く掲げる。
「母上の形見だろ？　大事にしなきゃ」
その笑みには、嘘がなかった。いつもの不真面目な時とは違う、優しい顔。
結蓮はおずおずと太刀に目をやる。先代の太刀を壊して以来、度重なる任務をともに戦ってきた戦友でもあるそれに、そっと手を伸ばした。
手に吸い付くような快い感覚。やはり自分にはこれが一番合っている。
本当は手放したくなかったことを今は素直に認めようと思った。取り返してくれた彼のためにも。
「……ありがとうございます」
受け取って礼を言った結蓮に、季隆は満足げに目を細めてうなずく。
それから彼は、ふと目をそらしてぽりぽりと頬を掻いた。
「えーと、さ。この前の……朝堂でのことなんだけど。さすがにちょっとやり過ぎたかなと思って……。同意もなくいきなりやっちゃったし……」
「なんのお話ですか？」
「いや、だから、あの結界の池で、……口と口が当たっただろ。それで……」
実に言いづらそうに彼は言葉を選んでいる。結蓮は一瞬間を置き、冷静な顔で言った。
「口移しの気付けの件ですか？」
「えっ。いや、気付けっていうか」

「どうぞお構いなく。私も特に気にしていませんので。上官どのの命が救えたのですからむしろ喜んでいます」
「あ……そう……」
季隆が拍子抜けしたような複雑な顔でつぶやいた。
結蓮は彼に背を向け、太刀を検分する。――ふりをした。
理由はどうあれ、生まれて初めての口づけだったのだ。気にしないわけがない。
（でも、私が変に動揺したそぶりをすれば御曹司どのも困るだろうし）
こんなことで上官を煩わせたくない。その思いから、あの一件については無反応を決め込むことにしたのだ。
「――おや、これは幸運な。最後に私にももう一度見せていただけませんか？」
おっとりとした声に振り向けば、書庫の入り口に立っていたのは猩紅だった。旅装のいでたちを見て、結蓮は驚いて向き直った。
「桃霞を出られるのですか？」
「ええ。本当はもっと早くに去るはずだったのですが、そちらのお若い方に思いがけず引き留められてしまいまして」
視線を向けられ、季隆が軽く眉をあげる。結蓮が消えたあの日、翡翠丸に連れられて封陰省へやってきた猩紅が范太保の企みを皆に教えてくれたことは、すでに結蓮も聞いていた。
范太保が猩紅を術師として招いたのは、皇后の眠る結界の在処を突き止めさせ、回復祈願を

邪魔するためだったという。すべては豊家との権力争いのためだと途中で知った猩紅は、途端に嫌気がさして彼のもとを去った。だが季隆が尾行させていた翡翠丸に事情を聞き、戻ってきたのだそうだ。

「疑って申し訳なかったですけど、疑惑が晴れないうちに野放しにするわけにもいかないんですよねー。お役所勤めのつらいところで」

「よくわかりますよ。わたしも本来、朝廷のようなどろどろした場所は好みではありません。范太保の誘いを受けたのもひとえに龍神の太刀見たさ、その一心でした。それがなければ近づきたくもないところです」

呪禁師の中には厭世観から昇仙を目指す者も多い。彼もそのうちの一人らしく、政のごたごたに関わるのが面倒で太保の企みを朝廷に知らせることもしなかったらしい。ただ術師の誼で季隆には情報を伝えに来たのだそうだ。結蓮から見れば信じられない倫理観だが、彼らの世界の常識というものらしい。

「失礼ながら、あなたが業焔ではと思ったこともありました。すれ違った時に獣のような臭いがしたので、隠形しているのかと」

遠慮がちに結蓮が言うと、猩紅は声をあげて笑った。

袍の前を開き、中から毛玉の塊を取り出す。——ニャー、とそれが鳴いた。

「……子猫？」

「桃霞に来る途中で拾いましてね。何しろ定宿がないものですから、連れ歩いていたのですよ」

猩紅は愛しげに子猫をなでる。季隆が「まぎらわしいにもほどがあるだろ」と呆れた顔でぼやき、結蓮もほっと息をついた。わかってみればどうということはなかったのだ。確かにこれも一応、獣である。

「それより、お身体はもう大事ありませんか？　突然道端で倒れられて、驚きましたよ」

眉をひそめて見つめられ、結蓮は驚いて猩紅を見た。

「なぜあなたがそれをご存じなのです？」

「たまたまわたしもあの土地廟に詣でていたので。すばらしい太刀だと聞いたものですから、御神体を拝みにね。声をかけたのですが覚えていらっしゃいませんか？」

そういえば、と結蓮は思った。あの時、誰かの声が聞こえたのを覚えている。あの幻惑の世界から現実に呼び戻してくれたのは彼だったのか。

幻覚の外にいながら結蓮の状況を看破していたとは、かなりの凄腕なのではないだろうか。それにこのやわらかな物腰、なんだかあの人と重なる。

「あの――猩紅どの」

もしや、という思いがひらめき、結蓮は気が急きながら身を乗り出した。

それほどの術師がそう何人も存在するとは思えない。もしかして、彼は――。

「五年前、業焔を退散させたのは――翠玉の御使い様は、あなた様ではありませんか？」

「は？」

「いやそれはないだろ！」

きょとんとする猩紅の横で季隆が目をむく。
「いくらなんでもひどすぎるだろ、その間違いは！」
「何を怒っていらっしゃるのですか？」
怪訝に思って結蓮が見つめると、くっ、と心なしか悔しげに彼は目をそらした。
「なんでもないです……」
「？」
最近の彼は時々わけもなく敬語になる。よくわからない人だ。
ともあれ、翠玉の御使い様は猩紅ではなかったらしい。
結蓮の恩人捜しは長期戦になりそうである。

煌を出るという猩紅を皇城の門まで見送ると、二人は封陰省への道を戻った。
ところどころ見られる庭園には必ず桃の木が植えられている。そのどれもがすでに花盛りとなって香気をただよわせていた。風に乗って時折はらはらと花びらが舞っている。
桃花は今や満開の季節を迎えていた。きっと上空から見たら濃紅と淡紅の霞で城市は包まれていることだろう。
（あの日は、まだほとんど咲いていなかったっけ……）
業焔を倒した日。自分の中にあった底知れない力が現れたことの恐ろしさで、外へ出た時も

周囲をゆっくり見る余裕はなかったが、桃の蕾みのことだけはなぜか覚えている。
あの業火にも傷一つなかった自分はやはり人ではなかった。そのことに衝撃を受け、しばらく療養と称して自宅にこもっていた。今日になって久しぶりに出仕したものの、季隆に会うのが少し怖かった。
あの日のことを彼は何も言わない。気づいていないはずはないのに一言も触れようとしないのだ。だから、結蓮のほうから言うべきだろうと思っていた。
「……御曹司どの。先日の、……翠の水柱の件なのですが」
声が詰まってしまった。事実を明らかにしてしまえば、おそらく今までのようにはいかないだろう。それを恐れている自分が少し不思議だった。
太子を守り、御使い様に師事する。それだけが人生の目標だったというのに。
ああ、と応じた声が気のせいか硬い。結蓮は思わず身体を強ばらせたが――。
「あの日は陰の気が強くてねー。水術がうまくいってよかったよ、ほんと」
ひらひらと扇子で煽ぎながら桃花園のほうを見ていた季隆が、振り返って笑う。
「ね？　結蓮ちゃん」
「……」
――気づいていない？
いや、そんなはずはない。他の誰をおいても彼だけは気づいたはずだ。なのにそれを口にせずにかわしたということは、問題にする気がないということか。

（気にしていないの……？　私は人じゃないのに）

傍に異形の者がいるというのに恐ろしくないのだろうか。気味が悪いと――遠ざけたいとは思わないのか。豊家の人たちや最初の許嫁のように――。

「結蓮ちゃんさぁ、最近ちょっと上の空の時が多くない？　だめだよ、たるんでちゃ。俺たちにはまだ大きな仕事が残ってるんだから、しっかりしてくれないと」

いきなり小言を言われ、結蓮はきょとんとした。

いつもの仕返しとばかりに季隆はわざとらしく顰め面をして腕組みしている。

「五年前に業焔を解神したのは誰か、まだつかんでないだろ。俺の仮説を覆すって宣言したのは誰だっけ？」

「……、私です」

「うん。わかってるならよろしい」

重々しくうなずき、彼は一転して笑顔になる。

「頼むよ、相棒。頼りにしてるんだからさ」

ぽん、と肩をたたかれ、結蓮は軽く前へのめった。

（相棒……）

柚梨軍にいた頃は知らなかった言葉。その短い言葉にどんな意味がこめられているかわからないほど結蓮は鈍くはない。

傍にいてもいいのだと、存在を認めてくれている言葉なのだ。

いつの間にか呼び名が変わっていることにも気づいている。親しい人しか本名を呼ばないという璉国出身の彼は、結蓮を名前で呼んでくれるようになっていた。それもまた、認められたようで心強い。

〝君の信じる道を貫け〟――あんなことを言ってくれたのは彼が初めてだった。あの言葉にどれほど力をもらったかわからない。

（私はまだ、ここにいてもいい――いいえ、居続けなければいけない。使命を果たすために、私にしかできないことをやろう。私はここから、殿下と煌国を護る――！）

「よし。それじゃ作戦会議に行こうか」

力強く宣言して季隆が踵を返す。揚々と歩いていく背中を結蓮は訝しげに呼び止めた。

「どちらで会議をされるつもりです？　そちらは封陰省の方角とは逆ですよ」

「ああ、今日の会議は城下で桃花を眺めながらやるから。劉博士も先に行ってるし」

すたすたと歩を止めない彼を、結蓮は驚愕して追いかけた。

「遊ぶつもりですか!?　任務中になんということを――」

肩をつかんで振り向かせる。と、ひらりと桃の花びらが一つ舞い落ちてきた。結蓮は思わずそれを両手で受け止める。

一瞬、過去に戻ったような錯覚がした。御使い様が帰っていった時も同じように桃花が舞ったのだ。そして顔をあげた時には、御使い様はもういなかった――。

「……！」

「ん？　どうした？」
はっとして顔をあげると、季隆が不思議そうに見つめ返してきた。
彼も舞い落ちた花びらの軌跡を見ていたらしい。意を得たように笑う。
「ほらほら、桃の花が呼んでるじゃないか。君も桃霞の人ならこの季節は楽しまなきゃ。官吏たるもの風流をたしなんでこそ一人前だよ。さあ行こう！」
いつもの軽薄な調子で言って彼は再び門へ向かって歩き出す。
結蓮は少し慌てて、しばし迷い、そして口を開いた。
「待ってください、……季隆どの」
おずおずと呼びかけた声に、季隆が足を止める。
軽く振り向いた彼は、笑っていた。
「早く来ないと置いてくよ。結蓮ちゃん」
ふざけていないその笑顔にうなずいて、結蓮は駆け寄った。
「花見の前にお菓子を買いにいこう。月仙同の甘味処、餡の入った焼き餅が美味いんだ」
声がはずんでいる。やっぱり遊びにいくつもりかと呆れつつ、結蓮は答えた。
「すみません。私辛党なので」
「お酒好きなの？」
「いえ、お酒は別に。激辛饅頭や十割辛子粥などは好きですが」
「そっち!?　ちょ、だめだめ！　そんなの食べたら身体に悪いよ！　つか十割辛子粥って、そ

れ辛子だけ食ってるってこと!?」
彼は顔を引きつらせている。どうやら璉にはない食べ物のようだ。結蓮にとっては日常食なのだが。
「よしわかった。じゃあ今日はお兄さんが、うーんと甘い物をおごっちゃうぞ！」
「嫌(いや)がらせですか？」
冷たく言い返しながらも、なぜか楽しくなってきて、結蓮は少しだけ笑った。
——桃霞の空に、淡紅の花びらが舞っていた。

翠玉(すいぎょく)の御使(みつか)い様

お元気でいらっしゃいますか。桃霞は花の盛りの季節です。
今年もまた、御使い様とはお花見に行けませんでしたね。
けれど、御使い様もこの同じ空のどこかで、桃花をごらんになったのだと信じています。
今年は仕事先の相棒とお花見に行きました。
甘い物ばかり食べさせられて閉口しましたけれど、でも、少し楽しかったです。

御使い様のように幸党な方だったらもっと楽しめたかもしれませんが、仕方がありません。
来年こそは、御使い様の隣(となり)で桃花が見られますように。

この春はいろいろなことがありました。未熟者だと思い知らされることばかりでした。
でも、認めてくれる人と出会えて、強くなれた気がします。
いつの日かあなた様が迎(むか)えに来てくださる時まで――
結蓮はもう少し、ここで頑張(がんば)ってみようと思います。

あとがき

こんにちは、清家未森です。六蓮国物語をお手にとっていただき、ありがとうございます！シリーズとして数えると本作は二作目になります。一作目とは違う雰囲気の話にしようと思って書き始めたはずが、気付けばまたも暴走少女や変な人が生まれてしまいました。

中華風の世界観に和風っぽいところも混じってます。参考にした時代などもありますが、いろんなところから引っ張ってきていたり創作した部分も多々ありますので、なんだか知ってる中国史と違うぞ、というところがあっても笑顔で流していただけると幸いです。

最後になりましたが、華やかで恰好いいイラストを描いてくださったＩｚｕｍｉ先生（凛とした黒髪美少女、最高です！）、いつもご迷惑をかけまくっている担当様、新作を立ち上げるにあたってお世話になった皆様、そして読者の皆様、ありがとうございました！

もう一つのシリーズ「身代わり伯爵」の新刊は、二〇一二年二月発売予定です。ちょっと先になりますが、こちらもよろしくお願いいたします。

清家　未森

BEANS BUNKO

「六蓮国物語 王宮の花嫁武官」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「清家未森」先生・「Izumi」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

ろくれんこくものがたり
六蓮国物語
おうきゅう はなよめぶかん
王宮の花嫁武官
せいけ みもり
清家未森

角川ビーンズ文庫 BB64-17 17056

平成23年10月1日 初版発行

発行者——井上伸一郎
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元——株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所——旭印刷 製本所——BBC
装幀者——micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452417-3 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Mimori SEIKE 2011 Printed in Japan

9784044524173

ISBN978-4-04-452417-3
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

六蓮国物語
王宮の花嫁武官

清家未森

「畏れ多くも殿下を敬愛したてまつりすぎていて」舞台は煌国。婚礼に臨む太子近衛武官・結蓮のもとに、太子琮成を襲う妖怪が現れたと報せが入る。尊敬する太子の一大事に、花嫁衣装を脱ぎ捨て、太刀を手に駆けつける始末。自ら三度目の結婚をぶち壊してしまうほど太子に心酔する結蓮だけど、突然異動の命令が!!　待ち受けていたのは、新たな婚約者で――!?

清家未森が贈る、チャイニーズ・ファンタジー、ここに開幕!!